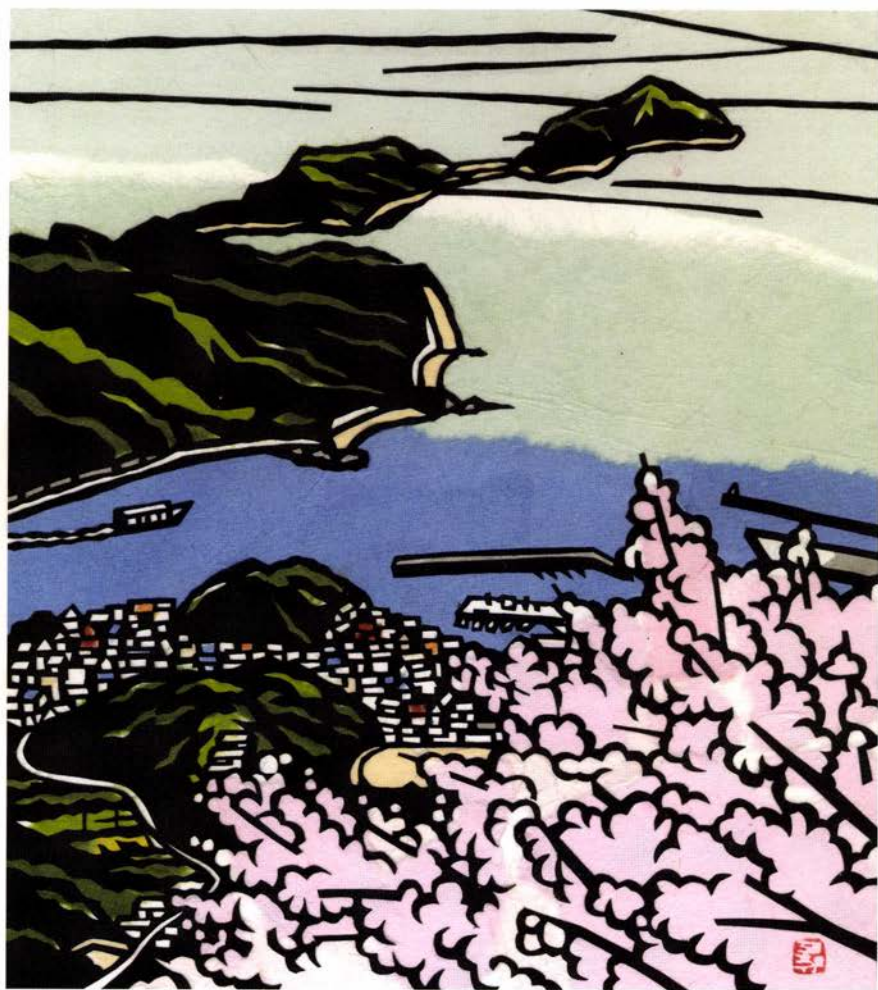


川柳塔

平成三十年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇九一号



日川協加盟

No.1091

四月号

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

新家完司・著



川柳の実践と理論

ご注文は下記へ、ハガキかFAXにて。
到着後で結構です。お支払いは

実践を意識した豊富な例句で学ぶ作句法・選句法・心得
初心者はもちろん、中級者やベテランにも役立つ

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司

326頁。送料+消費税=2,000円 FAX 0858-52-2449

熊本常任理事会

小島 蘭 幸

全日本川柳熊本常任理事会が、2月16日、熊本市国際交流会館で開催され、理事、常任幹事12名と、全日本川柳熊本大会実行委員会の副実行委員長、事務局長の2名、計14名が出席しました。議事は、平田朝子議長の開会の辞から始まり、私は「全日本川柳協会理事長として初めての熊本大会、是非成功させて現在まだ復興途上の熊本を元気にしたい」と挨拶させていただきました。熊本大会実行委員会からは、「昨年から各学校訪問、交換吟社、各地大会参加者、誌上大会参加者、日川協加盟吟社等へ大会案内を配布している」と力強いお言葉をいただくことが出来ました。

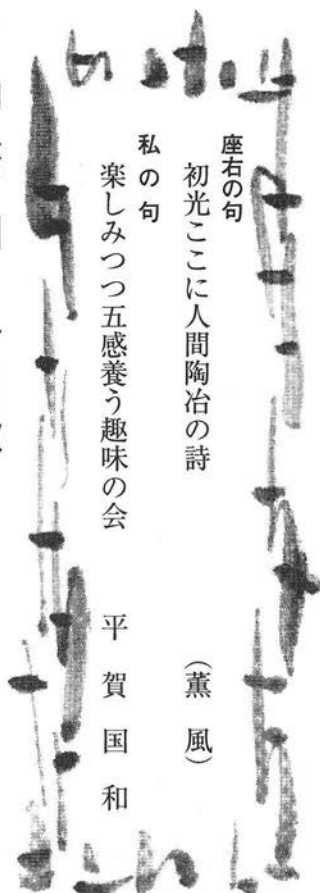
また出席者一人一人から熊本大会成功へ向けて建設的な意見を聞くことが出来ました。議事終了後、熊本日々新聞の記者から取材を受けました。その事は、3月5日の朝刊に「よい作品をじかに聞いて、

6月熊本市で全国大会」という見出しで紹介されました。取材後、近くのお寿司屋さんで懇親会、美味しいお寿司をいただきながら九州の皆さんと楽しい一刻を過ごすことが出来ました。日帰りでしたので復興途上の熊本城を見ることは出来ませんでした。が、駅の売店でくまモンの関連グッズと熊本名産のお土産をたつぷり買うことが出来ました。広島から熊本まで新幹線で二時間弱で行くことが出来ました。第42回全日本川柳2018熊本大会は、6月10日、熊本市民会館シアーズホーム夢ホールで開催致します。是非ご出席下さい。

川柳句集 熊本地震の記憶

作品

ダダッバリバリこれは地球の裂ける音
理石
がらがらと平凡が割れ皿が割れ
孤遊
復興を目指しています城の苔
麦彦
石一つ握り無念の城眺め
朝子
復旧の城拜むまで生きる夢
浩二
余震続く軋む擬音に馴らされる
萬風
車中泊四日目の朝歩けない
康子
解体を待つ家魂のぶらり
ちえこ



座右の句

初光ここに人間陶冶の詩

(薫風)

私の句

楽しみつつ五感養う趣味の会

平賀 国和

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「岩城島の春」

■巻頭言 熊本常任理事会

薫風忌に寄せて

小島 蘭 幸 (1)

川柳塔(同人吟)

山本希久子 (2)

句集の森

小島 蘭 幸 選 (4)

川柳塔の川柳讃歌⁽¹⁸⁾

木津川 計 (45)

自選集

中居 善 信 (49)

■ショートエッセイ(米の飯)

温故知新

(49)

水煙抄

川上大輪選 (50)

誹風柳多留一二篇研究 58

新家完司選 (70)

愛染帖

吉村侑久代 (74)

英語 de Senryu⁽⁷⁶⁾

山口光久・斉尾くにこ共選 (75)

檸檬抄「浮く」

山口光久・斉尾くにこ共選 (75)

薫風忌に寄せて

山 本 希久子

忘れることのできないあの日から13年の月日が流れた。

平成17年4月24日夕刻、薫風先生世界の知らせが届き川柳界に衝撃が走った。

翌25日は編集作業日、当時美章園にあった川柳塔事務所に楓楽編集長 朱夏、義子、私の4人はいつもより早く集まり編集作業の傍ら、計報連絡に追われることになった。先生は主幹を既に5代目天笑氏に譲られ名誉主幹という立場にあったものの、柳界での重鎮、全国柳社との交流があり、親交あり、広く文芸界の著名人でもある。知らせる電話が途切れると、問い合わせの電話が入るといふ具合、楓楽編集長は終日対応に追われた。

その上、同日9時半頃、尼崎でJR福知山線の脱線事故発生、負傷者多数と聞き沿線の同人が事故に巻き込まれていないかという心配まで加わることになる。

ようやく編集作業を終え、4人が先生宅の仮の祭壇に手を合わすことができたのは、永日も、とっぷりと闇に包まれた9時頃になったと記憶している。

一路集「無言」	石田隆彦選	(78)
「リセット」	宮尾みのり選	(79)
初歩教室「頼む」	居谷真理子	(80)
川柳塔鑑賞	柿花和夫	(82)
水煙抄鑑賞	吉岡修	(84)
橘高薫風句抄		(85)
『麻生路郎読本』余滴 ⁽⁴⁵⁾	乗原道夫	(86)
インスピレーション・ナビ	大西泰世	(88)
せんりゅう飛行船 ⁽⁸⁸⁾	新家完司	(90)
川柳塔WEB句会「白」	居谷真理子共選	(91)
三月本社句会		(92)
句会燦燦	弘津秋の子	(96)
各地柳壇(佳句地十選/竹村紀の治・大内朝子)		(97)
四月各地句会案内		(110)
柳界展望		(112)
■編集後記(ひとこと/松本昌)	朱夏・勝弘	(114)

座右の句

五ミリほど浮くとこの世が住みやすい (佳主子)

私の句

逆立ちで天を悠悠ふんでいる 山縣 のぶ子

その年7月号の追悼特集にご寄稿を下
さった作家の田辺聖子さんは
「川柳というまことつらぬき君逝きぬ」
薫風先生のご風格をひとくちに申上げる
と「清爽」という言葉が思い浮かぶと述
べておられる。

長身瘦軀、いくつになられても、文学
青年という雰囲気を持っておられた先生
はあまりにも少食なので、もう少し召し
上がらないと、というところ「僕は川柳を榮
養にしているから大丈夫」と笑っておら
れた。先生は筆まめであった。よく遠方
の大会へお供をしたが、帰りの列車内で、
もうお礼状をしたためておられる。遠出
には同人名簿、切手を常に携え、旅先で
絵葉書を調達されていた。

至極まじめ、貴公子の風貌をお持ちの
先生に、いたずら少年のような一面もあ
ったこともお伝えしておこう。

昭和40年刊行の句集『檸檬』のご自分
の写真が市川雷蔵によく似ていたので、
雷蔵は僕の異母弟とまことしやかに言わ
れ、すっかり信じてしまわれた柳人もい
らっしゃったそうである。

偉大なる薫風先生に師事することので
きた幸せを改めて思う4月である。



小島 蘭 幸 選

尼崎市 山田 耕治

母の介護夜中に洗濯機回す

ラスト一周スタンドにもう誰もいぬ

しめかざりの粉を雀のお正月

肩叩き券お金で買えるものでなし

覚えているよおまえが立った日のことを

いとおしき日になるだろう日記書く

米子市 竹村 紀の治

鍋囲むときもスマホを離さない

住む人の無い屋根の雪積もるまま

雪続く負けるものかと鍋続く

脱いでから気付く靴下裏表

飄飄と八十三の誕生日

夢で逢う人に叱られ励まされ

笠岡市 藤井 智史

ふらすこのなかで誕生する命

伝統と革新混ぜて生む未来

すきま風吹いて凍えている独り

順調な恋へと来たる大嵐

玉手箱壊し老いなど忘れ去る

変幻自在ボクは川柳アーティスト

河内長野市 山岡 富美子

ドカ雪に見舞われてにをはが狂う

丁寧に書けば言葉が立ち上がる

風邪という刺客に不意を襲われる

極寒のなかでも脳の液状化

お喋りというデザートが温かい

ごった煮の鍋を手抜きと言わせない

岡山県 田中 恵

無器用な人だ温かい人だ

寡黙でもシャープなペンは持つている

いつの日か羽ばたく夢があるポスト

梅一輪ほどのうれしいプレゼント

満天の星に守られ生きている

ゴールまで歩いていたい土踏まず

鳥取市 両川無限

哀しみの胸に居座る寒気団
家計簿に夢を削った跡がある

辛かった今日をリセットするお酒
ギャグにしておこう私の寒い過去

弔文の最後は涙色になる
酒愛し人を愛して福を呼ぶ

弘前市 高瀬霜石

ももひきを脱いで桜の下にいる
保証書に付けてください虫眼鏡

田舎者ですから列に並ばない
悪口を言う時みんな目が光る

手を離す勇気が親の方がない
ゴミの日を教えて妻は旅に出る

橿原市 居谷真理子

電飾の街をキラキラネームたち
古都の雪焼かれた山を抱きにくる

くっしりの紅に悔やみを述べられる
花なんて欲しがってないデスマスク

独りだもの見てやるものか冬火花
仏壇の中で小一時間昼寝

大阪市 谷口義

めりはりをつけようごはんを食べよう
ほとぼりが冷めたらマスクは外します

葛根湯から改源に宗旨替え

いつでも行けるといつでも思ってた

ギネスブックに選ばれました立話
さくらさくら母は気骨の人だった

奈良県 渡辺富子

豪雪の里の電話が泣いている
いのちみな神に預けて日向ぼこ

秘めた夢極彩色に塗ってみる
少しづつ脳がこわれる音がする

妻の反論一直線に攻めてくる
歳月に逆らいきれぬ前かがみ

大山市 金子美千代

小正月大吟醸を一人飲む

女子会と言って若やぐイヤリング

はいはいと返事を返す電子音
不要不急の用事はなくて雪ごもり

雪折れの水仙東にして生ける
皆既月食見続けくしゃみ五連発

紀の川市 山東日出男

阿吽の息で背中かきあう夫婦
結ばれることが少ない美男美女

コンビニの灯りが癒す田舎道
嗅覚も刺激されます新刊書

先頭が随時代わって北帰行
継ぎ足して秘伝の味を守り抜く

八尾市 内海幸生

蹟いた石を蹴れない足である
老いの文 辞書開けて閉じまた開けて
山噴火 温泉行くなら遺書持つて
震災の続く地球に無い逃げ場
美しい花咲き誇るのも地球
善人と決めつけられても苦しかろ

松山市 栗田忠士

反則ではないか豪雪温暖化
私を串刺しにする大寒波
徒手空拳素っ裸には素っ裸
馬鹿になるそれができたら楽だろう
これからは指切りなしで生きていく
春風が笑う二月のチヨコレート

大阪市 津村志華子

ステップを踏んだ日もあるオベの足
お好み焼のキャベツも春を待っている
もうとまだ命かけひきしています
お人好し時々ほぞを噛んでいる
亡妹が笑ってるよなおぼろ月
実直に生きてても背骨ひん曲がる

豊中市 水野黒兎

風当り避け二番手で春を待つ
渡されてメロンのように抱く赤子
コーヒーがうまいな風邪は治ったな

古書店の主人昭和の丸めがね
シナリオは起承転結なお未完
ポケットに夢ひとかけら持ち傘寿

三田市 久保田千代

この年もスタートできた友と逢う
日めくりにある格言も寒くなり
冬に咲く花を見習う風に佇ち
赤い花部屋の暗さが深くなる
ふくらみも少しは出来て老いを知る
てのひらを返すと夢が遠くなる

富山市 島ひかる

年賀欠札前に投函した賀状
降りしきる夜除雪車の唸る音
空想の世界で遊ぶ冬の海
トンネルを抜けても見えてこぬ自分
石段の多さ信心深くなる
山頂へ返すむかしの石がある

桜井市 安土理恵

光ひとすじそつと持たせてくれた神
やさしい嘘重ねて夫との会話
いっだって二つ三つは耐えている
春の絵を描こう明日晴れてたら
点描の点のひとつに火の匂い
春の雪わたしの暮したしかめに

大阪市 平井美智子

底知れぬ淋しさを抱く二月の計
また今度今度と雪は降り続く
夕暮れの街で迷子になつてゐる
悔しさの数だけ抱いている蕾
踊ろうか君が笑つてくれるまで
がんばったなあと独りのお赤飯

唐津市 坂本蜂朗

調教師然としてゐる小さい妻
妻の鼻歌が聞こえてくる安堵
福と鬼お面気儘につける妻
細い妻細い食でも太い胆
男性が踊り女性が光り出す
住み付いた鬼に餌をやる平和主義

八尾市 村上ミツ子

丸かぶりもうできません恵方巻
容赦なく立春寒波押し寄せる
ランドセルはあばの夢も詰めこまれ
いくさの影がみえるジョンチャン五輪
不器用と言つて器用に生きるひと
出る杭になつたことなどないけれど

富田林市 肥山一文

ラストまでしっかり尽くす母介護
真つ直ぐに生きてこのままエンディング
百均でお値打ち品が二つ三つ

卓袱台に母のおやつが置いてある
引き出しに亡母の残した家計簿が
定年後たつぷり話すライバルと

紀の川市 宇野幹子

鯰大根冬がゆつくり胃に落ちる
方程式北へ進めば解けるだろ
厚化粧とると出て来た宇宙人
愛すればバラの棘さえ丸くなる
知らぬ間に尻尾を振つていたウカツ
切り札を持つと油断の芽が伸びる

奈良市 米田恭昌

八十路きてまだ悪友というお連れ
断捨離の先陣を切る免許証
未練断ち切りやつと返納した免許
剽軽な遺影のままに柳友が逝き(柳弘氏 追悼3句)
飾られた弔辞に遺影照れている
そのうちに彼岸の句座でまた会おう

箕面市 広島巴子

極寒を逃れ八重山ほっこりと
澄んだ青心にうつす川平湾
やいま村歴史を今に島唄を
花や蝶ずつとおりたし由布島に
竹富島牛車でぐるり夢心地
関空に戻り寒さが身にしみる

札幌市 小沢 淳

挫折した人が持った哲学書
食うために挑む姿を笑えまい
越冬の野菜甘味という御負け
混濁の世に軍隊でない自衛隊
そしてまた庇い合うしかない二人

札幌市 三浦 強一

禁断の木の実であった原子の火
砂嵐ならぬ吹雪という砂丘
握手したとたん名が出た脂汗
ど忘れがどど忘れとなって老い
八十路まだ人間ごっこしています

青森県 松山 芳生

夢うつ津軽の春はどのあたり
惜別へどつと満月渡される
古本屋の棚に知りたい海がある
限りある命に夢をちりばめる
加齢とは何の罪ですか閻魔さま

黒石市 相馬 一花

水いらぬ末期の酒で星になる
祭日はゴマ川柳日と決める
登山家が好んで飲んだ水の色
取り易い人から廻す奉加帳
産声を聞きたくなつたお婆様

弘前市 浅田 隆樹

大吟醸 鮑は主役か脇役か
凍る道残り人生賭け歩く
豪雪が知られマスコミやつて来る
流れ星ミサイルかもという世相
重要と書かれた手紙の平凡さ

弘前市 稲見 則彦

じゃんけんばん太陽だんだん勝ってくる
第七版見栄で買つてはみたものの
花筏主役を主張するお堀
ボチの餌インスタ映えに気をつかう
菓子箱をとつておく癖治らない

弘前市 今 愁女

「鬼は外」叫んで和む節分会
歳の数ほど豆は食えぬと笑い合う
飛行機雲が雪晴れの空尾を引いて
枯らしてならぬ鉢植え移動日課なり
つい先は忘れ遠い記憶が甦る

弘前市 須郷 井蛙

今の子は兵の位が解らない
灯油代高値にふれず受験生
大吉が現実になり嫁が来る
4Bを買って老後のスケジュール
ジョーシアを地球儀まわし確かめる

弘前市 高橋 洋子

大器晩成やがてやがてと歳を取る
父さんが決まって仕切るお鍋の日
愚痴を捏ね夢を食べてる一人鍋
心地よい愚痴も自慢もない会話
多機能家電お年寄りにはただ恐怖

弘前市 福士 慕情

白は白染まらぬ白が好きである
あの日から兎はゴールだけ目指す
地吹雪を煽りに煽る雪おんな
湯豆腐コトコト冬の景色が和むまで
空白のページ涙の痕がある

塩竈市 木田 比呂朗

春風のようにには行かぬ検診値
原因は酒の所為だと知らん顔
ヨーグルト美肌によいと今朝もでた
ダイエット傍観してる三毛とポチ
株価まで直ぐアメリカに義理を立て

男鹿市 伊藤 のぶよし

古希だつて昨日の今日じゃ落ち着かぬ
氷柱ポトポト冬の秘密がとけていく
一期一会回り道でも逢えた幸
倦怠はおもいで今はもう空気
まだだろか花の便りはどの辺り

さいたま市 星野 育子

平昌で平和祭典統一旗
ロボットに通じないアイコンタクト
鏡に映らず川柳に現れ
気がつけばフリーサイズの服ばかり
消えかけた噂復活クラス会

上尾市 中村 伸子

憧れの名前を探す川柳塔
聞きたいなたまに分からぬ句の心
失言で壊れた友情のもろさ
二人同時にメールを出したさあどっち
大きな目の服にしましたアルマーニ

東京都 川本 真理子

記念撮影居るべき人の写真持ち
ここでママ泣くと知ってる読み聞かせ
笑ってる間に次の策を練る
筋肉痛だと言っておく見栄を張り
もう少し寂しがるとため夕陽見る

八王子市 川名 洋子

陽だまりを追って尽きない立話
ブレ金のあった事すら忘れてる
ひっそりと膨らんできている花芽
目印の魚屋さんが消えている
朝刊が来る頃眠くなってくる

横浜市 菊地政勝

金婚になっても愚痴を聞かされる
逝くことは考えないで保険掛け
感謝状わたせぬままに母が逝く
人一倍努力をしてもまだ借家
暴落の株になんにも手が打てず

愛知県 早川遡行

長生きしたいか邪険にされながら
クラシックで逸る気持を落ち着かせ
半日を無駄に過ごしたワイドショー
どうしたらいいか成り行き見て決める
梅干の味を忘れた日本人

犬山市 関本かつ子

一桁の暗算ならばまだいける
霜焼けが出来て昭和に逆戻り
二人きり6DKは寒すぎる
意気込んで話す病気の軽いこと
本当の顔を覗きに來るお酒

鈴鹿市 小河柳女

時がわたしを作り壊してゆく悲しみ
耳をすますとふる里の大地の声
背骨のない雑木林が枯れてゆく
世は移ろうますぐな心立てている
瞳の中の画像見ている懐かしい

京都市 清水英旺

平成は感慨のない時代です
老友を案じる届かぬ年賀状
妻は留守電子レンジが独り鳴る
君が笑み弥勒菩薩かウィーナスか
思い出を携え友の七回忌

京都市 藤井文代

この温もりしつかりお尻敷かれてる
座布団をべちゃんこにするおたく族
老い支度スリムにできぬ負の遺産
綺麗どころとすれ違ったか出た微熱
青春の熱抱いてのクラス会

京都市 榊本宏子

鍵っ子を隣り近所で見た昭和
北風に遊び疲れた喜寿の足
地図にない道へ迷った引き籠もり
初対面慈母観音と見た不覚
愛情は傾いてゆく花とネコ

長岡京市 山田葉子

今日が越せた明日に繋がるだけでいい
円卓を囲みアイディア湧いてくる
しっかりと住所氏名はまだ言える
八十を祝われ生きる力湧く
一歩進み二歩後退に慣れてくる

八幡市 今井 万紗子

あと五年否十年と四股を踏み
老いて尚今の一步を風が押す
イメージ通りあなたとわたし桜色
陽気な風だきつと幸せ寄ってくる
笑うところ一緒の人と丸く生き

大阪府 桑田 ゆきの

初詣世界の平和祈ってる
紅い服着て八十の初詣
時雨して野地蔵さまに傘しばし
初詣テロ無き事を祈りおり
天眼鏡のぞき八十の句作り

大阪府 米澤 俣子

余生なんて言うのは止そう未来でしょ
着膨れて雪の怖さのニュース見る
クラス会老いてもみんな桃の花
喜びは夫婦茶碗が定位置に
ぎりぎりになってひよっこ知恵が湧く

大阪市 井丸 昌紀

二年続けて同じ所に入院
病院で新年寂しくないと云っておく
寒さだけからは守ってくれた部屋の窓
僕の穴うめ何なくしてたらどうしよう
たやすい仕事難しそうにしました

大阪市 岩崎 玲子

挨拶に笑顔プラスで今日も生き
言い過ぎぬように一回深呼吸
老いふたり寝息確かめ恙なく
碁敵で技の進歩を推し量る
好奇心喜寿の坂道押してくれ

大阪市 内田 志津子

スマホから噂話が歩きだす
プロフィール時々言えぬ時がある
福願う寺で神社でチャペルでも
窓開けて朝一番の音をきく
少しずつ少しずつ狭くなるこの世

大阪市 宇都 満知子

副鼻腔炎風邪の神様が居座る
雪が舞うちよつと嬉しくなる私
またすこし涙もろさが加速する
桜並木心待ちして散歩道
雪から雨冬が去りゆくタイミンゲ

大阪市 江島谷 勝弘

気合い気合い油断をしたら風邪を引く
花粉症つらいですけど春がいい
目標は卒寿すぎても五七五
久しぶりに尾瀬でも行くかゆつくりと
妻旅行三日間だけ天下とる

大阪市 榎 本日 の出

スマホから元気をもらう現代っ子
嬉しいねお疲れさんという言葉
すぐ曲がる釘の気持ちもよく解る
石は仏ほとけは石となつてゆく
一病で長生きすると宣言す

大阪市 榎 本 舞 夢

年賀状みんなの幸を知りました
八十五二人で老いを受け入れる
娘孫労り方が深くなる
二日外出三日目家でゆつくりと
三日程寝込むと頭呆けて来た

大阪市 大 川 桃 花

体重が減りすぎ人相まで変わる
減塩食作る楽しみ湧いてきた
町会長の役引き当てて青くなる
入退院重ねて鈍る感受性
大きく剥けた瘡蓋自慢したくなる

大阪市 大 治 重 信

大好きな彼の背中で拗ねてみる
人生を深く考え浅く生き
昨日まで窓辺で見えた紅椿
すべて捨て妻のみ残り平和なり
猫の数犬をぬいたと年賀状

大阪市 奥 村 五 月

ダイエットやる気になった試着室
貧困も何時も笑顔の母子家庭
ミサイルに震える恐怖魚の群
節分は社長も鯛恵方巻
スマホなど持たぬが爺は知恵袋

大阪市 笠 嶋 恵 美

無理しないブレーキかけてまた明日
かつぼう着の紐結ぶ時が入る
欲抜けて老いを味わう誕生日
祝八十二キセキが届く誕生日
今が一番幸せだから句が出来ぬ

大阪市 川 端 一 歩

春よ来い高校野球プロ野球
朝が好き綺麗な空気吸えるから
大寒波元は人間蒔いた種
メダルない人にも拍手迎えよう
ひらがなのふの字に似てる笑い顔

大阪市 古 今 堂 蕉 子

五輪始まり川柳一寸ひとやすみ
一発勝負苛酷なり五輪
肝腎の話している別れ際
クリムトの絵一寸おしゃれな我がトイレ
満足は時にブレーキ鎌の月

大阪市 小谷 集 一

音読の舌のもつれに老いを知る
マンネリに刺激をくれる隙間風
ホッチキスで止めた封書は情がない
感性の違ったままで共白髪
飄飄と生きる八十路のど真ん中

大阪市 近藤 正

正直者フェイク時代に馬鹿にされ
沖繩の大義どっこい四股を踏む
二十四の区に個性ある大阪市
ご祝儀は仮想通貨であしからず
わが地球終末時計あと二分

大阪市 坂 裕之

久しぶりオイとお前で飲み交わす
潔く去っていく彼人氣者
雑談が自慢話にすり替わる
大事な日冷たい雨に負けられん
実践を積んだ人こそリーダーに

大阪市 田浦 實

朝一番開く見出しは今日の運
散歩道目白に合えば句も生れ
有り難い市役所徒歩で十五分
待合室若者ばかり隅に居る
葱一本買物籠に立っている

大阪市 高杉 力

春ですよ踊りませんかジルバでも
クーポンは使っちゃならぬ初デート
社員証に囲まれビジネス街ランチ
初フリマまるで物々交換会
本当の閉店セールだったらし

大阪市 高杉 千歩

有難うおやすみだけで日が暮れる
郵便は届くが出せぬホームです
老人ホーム朝昼晩におやつまで
参加賞だけでも句会出席してみたい
老人ホーム スマホ ラインで日本中

大阪市 田中 ゆみ子

アリランが響く平和が続くよう
善い人でひと日が暮れるああしんど
日向ぼこ鳩も雀もみな愛し
春日得てぐんぐん伸びていく若芽
長い目で見ようあの子にできること

大阪市 津守 なぎさ

振り出しに戻る病状寒の月
春陽差すベッド点滴24時
つつがなく過ごす院内献立表
応援をしてるイヤホンでのテレビ
ハルカスを仰ぐ病窓青い空

大阪市 寺井弘子

残り火をかき立て鏡拭いている
雪予報センター試験不安増す
退院の空に明日への夢描く
身の丈の歩幅で後期プラン立て
松明の伝統守る山を焼き

大阪市 寺本実

繁昌を独り占めするえべっさん
条件が足りず正解出せません
予定では今極楽で昼寝中
初詣神にはあえず人を見る
よっしゃと引き受け後は金次第

大阪市 栃尾奏子

失恋は過去形にしてさあ春だ
綺麗でしょ今なら振りむいてあげる
真っ直ぐな瞳で好きと言わないで
良心にスポットライト当てられる
好きですと寄り切られそう土俵際

大阪市 原田すみ子

さじ加減大きくぶれぬ日が続く
失敗も大阪風に軽く言う
堪えきれず洩れる言葉に血が滲む
温泉の雪がおいでおいでして
早や二月寒いと言っているだけで

大阪市 平賀国和

おはようと私を起こす寒雀
ヨイトマケ聴けば亡き母思い出す
般若経読むと氣力が萎えてくる
九条に抱かれ百まで生きる夢
戦争を知らぬ政治家勇ましい

大阪市 藤田武人

柵も無くなるはずだ無重力
野良猫がエスコートする散歩道
羊水に溶け込んでいる母の愛
優劣が日々変化する現場力
策尽きた僕に天使が舞い降りる

大阪市 藤原千恵子

松花堂弁当食べて小正月
晴れやかに着飾る睦月文楽座
震災を伝える映像忘れまじ
震災日逝った家族と会話の日
火山噴火おまけに地震豪雪も

大阪市 升成好

一本の指揮棒になるコンサート
それなりでいいさ笑う日笑えぬ日
手をあげるだけで通じる友が居る
イメージと今のギャップがあり過ぎる
一つの芽明日は一つの森になる

大阪市 山本 加お里

前向きに暮らすと道も広くなる
姉米寿おもしろ悲しまだらボケ
奔放に生きております喜寿の坂
介護保険使わぬ日々感謝する
思い出をいっぱい抱いて梅見酒

大阪市 吉内 タカ子

前向きで元気一番無理でした
気兼ねより頼み絆を太くした
お互いに言い分笑顔いえる中
足だけは私の宝ハイキング
感謝には笑顔絶やさぬ意気通す

大阪市 若本 安代

弱音など吐かぬ冬芽の根の力
もう一步踏み出す力溜めている
ばつさりと切りたい時もある身内
残されてひとり芝居も上手くなる
寂しさを癒やしてくれる文庫本

堺市 奥 時雄

よく休むので長続きするプール
体形のごまかしようのないプール
半ページ戻し昨夜の続き読む
食文化どうあろうとも母の味
惚れられた記憶はないがよく惚れる

堺市 柿花 和夫

大丈夫まだ太鼓橋渡れます
妻の切札はずみで書いたラブレター
空っぽのグラスを軽く振る独り
失敗のコツは売るほど持っている
百均ではのぼのを買う小半時

堺市 加島 由一

ピョンチャン沙羅の涙の物語
花吹雪死ぬまでモテていたいなあ
酒だって健康のため飲んでいる
通天閣陸の灯台だと見る夜
チョコもらうロマンティックじゃないけれど

堺市 源田 八千代

冬空に剪定の松凜として
コーヒーはブラックでと植木屋さん
六人中五人は独り食事会
トーク&グルメ パートナーには孫誘う
単身赴任仕事の鬼に徹してる

堺市 齋藤 さくら

雪つもる程でないのが有り難い
いつまでも若くないよと膝笑う
このまんま変わらぬ明日を信じてる
親切に涙こらえて手を合わす
カルチャーでストレス消えた頑張ろう

堺市坂上淳司

堺市矢倉五月

年賀状友も元気だ生きている
お愛想の尻尾老犬生きている
新元号雅子妃無理をされぬ様
象徴の務めご苦勞様でした
平和呆けこのまま続きますように

堺市澤井敏治

水滴の丸さは春のごあいさつ
日脚伸び鐘ひとつ増え読経聞く
許されるよりも許すという願い
卓袱台の欠かせぬものに電子辞書
愚痴聞いてくれるペットが傍にいる

堺市遠山唯教

おいしいと食べるごはんは偉大です
風花の舞う足許がもどかしい
豊穣に万灯籠の灯がゆれる
雑草で生きた孤老もまた楽し
いい加減同士で歩む老いふたり

堺市内藤憲彦

嫁ぐ娘の空白埋める酒の量
秘密無い我が家の囲むおでん鍋
スカンタコから始まって五十年
大きなマスク話したくないらしい
勝つまでは粘り切るのが父ゆずり

入院で刺抜いて来たおじいちゃん
嘘はピンクで紫で書く嫉妬
涙出し笑って胸は空っぽに
逢えないと知って降りる彼の住む駅
キラ星が飛び込んで来た見舞状

和泉市横山捷也

大雪で折れた枝にもある蕾
恙なく生きて傘寿の梅の白
縁切った子が骨壺を抱いている
核シエルトターの用意今からいたします
ストレスがたまってしまうようなギャグ

茨木市島田誠一

平穩の影にムンクの叫び棲む
後期高齢もみじマークが念を押す
実力差知ってライバル視を止める
不便さが生んだ進歩に縛られる
肩書きのとれた名刺の深呼吸

貝塚市石田ひろ子

広辞苑父の顔して睨んでる
度忘れを甘やかしてはいけません
日脚伸びちよっと得した気分です
粗食でも胃は健康というカメラ
記憶力賞味期限が早くなる

河内長野市 大島 ともこ
何時だつて売られた喧嘩買うつもり
一番の盟友妻と奉る

初体験カプセル泊の眠れぬ夜
セルフレジあたふた硬貨をばらまく
周辺ですナビは勝手に店じまい

河内長野市 梶 原 弘 光
フェイクニュース混じり長い立ち話
寒空をゆっくり回る観覧車

初対面マスクを外せとも言えず
テロップをゆっくり追えば途中まで
童謡では姉を立ててる由紀さおり

河内長野市 木見谷 孝 代

予防注射してもウィルスの方が勝つ
妻ダウン家事能力を試される
みそ汁も出来ぬ夫でまだ逝けぬ
沙羅ちゃん努力報われもらい泣き
菜園の大根高値で格上がる

河内長野市 黒 岩 靖 博

昼食は抜くと言つては摘まみ食い
久し振りのラッシュアワーに怖気づく
妻の留守手探りする男飯
メガネの行方探す悲喜劇起る日々
豪雪にコンビニの棚なにもナシ

河内長野市 辻 村 ヒ ロ

夫婦共多少の矛盾知らん振り
しっかりと野心を抱いている八十路
繰り返し同じ会話の老い仲間
老い気儘拍車のかかる生きる音
化粧して今日はデイの日迎え待つ

河内長野市 藤 塚 克 三

点滴がゆっくりしろとリズムとる
簡単に掃き捨てられぬ義理がある
誰やったかな笑っておくが名が出ない
窮地脱し友が笑顔で酒誘う
母囲み介護かたわらわらべ歌

河内長野市 村 上 直 樹

大事なものは継続だよと膝小僧
勢いをつけて掻き込むひとり飯
酔ったかな妻がだんだん若くなる
夫婦とや自由不自由紙一重
酒とろり塞ぐところに春がくる

河内長野市 森 田 旅 人

やさしさを湛え山並み続く郷
善人の顔して唄うわらべ歌
病床の折れた心にわらべ歌
願いごとあふれて重いみくじの枝
偲ぶ会涙の涸れて交わす笑み

河内長野市 山室光弘

四條畷市 吉岡修

無神論者雑煮を食べて初詣

甘い顔すれば図にのる濡れ落葉

朝の目覚めもらう生命をいとおしむ

遅咲きで恋のイロハをやつと知る

塞いだら伸びぬ子供の無限大

岸和田市 岩佐ダン吉

苦労したな多くは語らないけれど

ヒト科にはいつもはらはらさせられる

逆風を避けて私が小さくなる

ひとり鍋やつと私に戻つて

拝まれて核廃絶のペンを取る

岸和田市 宮野みつ江

紫を選ぶ女の淋しんぼ

寒すぎる帽子マフラー赤にする

日記帳字消しテープの跡がある

控え目に出来ない性質ですみません

野の花が地にへばりつき冬を耐え

岸和田市 雪本珠子

自由手にしても心は満たされず

出会えより別れが多くなる八十路

春告げる釘煮近所におすそ分け

こころ開きなんでも言える人と居る

子守唄歌うと猫が起きて来る

クレームの窓口してて深い皺

名誉にも金にも縁の無いくらし

待ち時間短い医者もまた不安

短くても中身いっぱい思い出

実力が無いと太刀持ちにもなれぬ

吹田市 木下敏子

弱点を隠し切れない涙つぼ

恵方巻食べてゆつくり歳をとる

大切な余生ゆつくり踏み締める

花一りん咲いて嬉しい庭の春

身の丈に合うた暮らしの花活ける

吹田市 須磨活恵

老いたれど春はうれしい季節です

ありがとう今日も三食ご馳走さん

大好きな季節の果実少しだけ

結び目を少しゆるめてリラックス

辞書引いてふくらませよう知恵袋

吹田市 野下之男

ライバルがもう見えてます大統領

アメリカのゆくえ解らぬ大統領

僕だつてだまっていけないぞレベル3

西郷どんはたたかれてなお伸びて行く

美しい並木道からわが母校

高石市 浅野 房子

お相撲も野球もないよ二ノ月は
余命とはきびしいものよお立ちあ
いもう一度あの世の母に抱か
れたい
日足のびゆつくり春の足音が
れんげ草すみれタンポポ春よ来い

高槻市 指宿 千枝子

再会に心弾ませ駅に立つ
約束に遅れても待つきつと来る
散歩道草木芽生えるファンファ
ーレ
飽きもせず楽しんでる五七五
新聞を読んで一日を締め括る

高槻市 片山 かずお

他人事のように聞いている基地のこと
他人様の方が優しいことがある
妻と嫁他人行儀で仲が良い
にらむのはよそう人相悪くなる
汗かかぬ人が正論ばかり言う

高槻市 島田 千鶴子

着膨れた私に似てる寒雀
蛇口からきりっと寒の水走る
今年また雛は納戸で大欠伸
赤丸でアピールしてる誕生日
間違いは誰にもあると広辞苑

高槻市 初代 正彦

活き活きと趣味を愉しむ人の艶
電子辞書スマホも今や杖柱
異常寒波神の憤懣ではないか
やすやすと雪溶けのする訳がない
あの方のいつもの席が空いたまま

高槻市 杉本 義昭

雑踏の中で無色になる独り
白粥も男も熱い方がよい
頬杖をついて幸せ噛み締める
妻の乱金目の物は投げて来ぬ
むくむくむくそろそろボンと言うでしよう

高槻市 富田 美義

年金の目減りが心を弱くする
嫁ぐ娘の顔が女雛に重なりて
衣装より心の気品試される
五七五ころ豊かな老いの趣味
言い勝って心に残る副作用

高槻市 富田 保子

片付けて何処へ置いたかまた探す
犬猿と言われた夫婦共に100
断捨離をケチな心が許せない
追い風の中でやる気を膨らます
控え目なイメージ崩しバイキング

高槻市 原 洋 志

時代観るカタカナ語増え広辞苑
百歳は五度目のハタチまだ元氣
脱いだ仮面飲み屋の隅におき忘れ
押し問答ゲームセットにさせる酒
観光の穴場訪日客に訊き

高槻市 松 岡 篤

新年の誓いそろそろ忘れ頃
今のとこ酒の制限受けてない
金運吉アテはジャンボの宝くじ
窓際の日差しに欠伸元上司
信書では下手でも自筆通してる

高槻市 安 田 忠 子

寒の入りのどかな春を待ち侘びる
露天風呂梅ほころんで春はそこ
目覚めたら飛び込んで来た銀世界
勢いで飲んだお酒の心地よさ
お茶の間でのどかに語る老夫婦

豊中市 池 田 純 子

雪景色静かに朝が始まった
ひとりぼち雑音さえも友となる
努力の芽雪と氷の上に咲く
チョコレート父の遺影が嬉しそう
パンを焼く今日はバアバの休養日

豊中市 上 出 修

ニッポンを老人力が闊歩する
百歳まで生きるも運と金次第
地球儀に火種バラまくトランプ氏
三面を独占してる大相撲
原発を白だと言って再稼働

豊中市 藤 井 則 彦

朝ドラを薄ぼんやりと見て二度寝
ときどきは頼りにされるアナログ派
定年になって無気味な声変わり
父さんはゴルフではしゃぐこどもの日
夢中になる好きな一つを持つ余生

豊中市 松 尾 美智代

ついて来てよかったと思う貴方の背
子の心配してる我が身がおぼつかぬ
我ながら鬼の霍乱だと思ふ
つくり笑いしてごまかしているころ
何もかも捨てればなれる沙羅双樹

富田林市 片 岡 智恵子

昨日あった歯をさぐる舌裏返す
ため息に背なのあたりに隙がある
悟りには遙か馬鹿にもまだなれず
あきらめるまた諦めて老いすすむ
家紋抱き生きる女の古性

富田林市 関 よしみ

佐保姫がぼかんと肩を叩いてく
白磁皿春の絵の具を溶いて見る
揺り籠に夢の絆を読み聞かせ
冬の虹幻色と立つわたし
ときめきが残ったチョコにワイン注ぐ

富田林市 中井 アキ

故里の森へ意固地を捨てにゆく
信条を守り通してきた旅路
いざのとき守ってくれる両隣
踏み込んだ話はしない老いの友
歳というお化けが時に悪さする

富田林市 中村 恵

目を見張るその日かたつむりが翔んだ
ペットにはならぬ野犬の心意気
火の鳥になるまでもっともつと酒
野良犬はとつくにいない過疎の村
お互いを笑うかアリとキリギリス

富田林市 山野 寿之

ゆつくりと優雅に踊る豆腐鍋
財産は祖母の糠床三世代
休耕田ソーラーパネル燥ぐ声
二度三度弛む気温へ冬の鍬
窓を拭く妻は内側僕は外

寝屋川市 籠島 恵子

卒業はしないと母の習い事
去年とは違う気持でみる馬酔木
とほけた振りで急所を突き合う
こだわりを削ると丸くなれそうだ
思いがけない人から貰う心づけ

寝屋川市 伊達 郁夫

一冊の出会いに花が咲きました
もう少しこの世で馬鹿を演じます
ストレスを捨てに来たよと戸を叩く
充電をしすぎて石になりました
古日記過去をときどき撫でてやる

寝屋川市 富山 ルイ子

噴石を背に受け部下を守り抜く
白根山命を捨てて部下守る
阪神大震災何時までも覚えてる
還付金手続き三時間も並ぶ
肝要な事は抜けてる日記帳

寝屋川市 平松 かすみ

理事選はファン投票など如何
母親の気持ちになって胃を痛め
豆撒きの力士絵になる春よ来い
一輪車見せにマフラー靡かせて
悪人の居ないわたしの隣組

寝屋川市 森 茜

落のとう凍土を割ってすつくと芽
雪の乱おくにことはで着くはがき
友達のその友達に会釈する
火の用心打つ拍子木が闇に冴え
寒椿敷く裏みちへ迷いこむ

羽曳野市 安芸田 泰 子

北風の中を帰って来た無口
買い替えた眼鏡埃を指摘する
言い訳の嘘を見抜いている余裕
深々と下げた頭にある野心
二センチを集め作った雪だるま

羽曳野市 宇都宮 ちづる

冬枯れの公園孫のお供する
はちみつ入り梅干し嫌う一本気
町会の半分後期高齢者
断捨離ができない質で買い物好き
低目の値出るまで計る血圧計

羽曳野市 徳 山 みつこ

音とじ込める2センチの銀世界
ハガキ一枚へ私の雪模様
ときめきを包んでほんのりと蕾
改憲をいうその人の不誠実
憲法へ小細工はもう許さない

羽曳野市 中 川 ひろ介

柳誌置くシャッター街の古本屋
嫁指南主夫の仕事が多くなる
変化球キャッチは胸で受け止める
愛されて愛するために居るこの世
抽出して時効むかえた過去喋る

羽曳野市 仲 谷 真

哲学の道を歩けば清水寺
円山のしだれ桜の美しさ
嵐山タレントショップにぎわって
大阪城梅の続いて咲いている
遅咲きの造幣局でコイン売り

羽曳野市 藤 原 大 子

見えづらさ聴こえづらさが少しずつ
昨日とは違うわたしに違う風
物差しはわたし流儀の視野の中
井の中の悩みと気づく師の言葉
損得がないから夫婦続けられ

羽曳野市 三 好 専 平

しぐれ忌も知らずシリアの記事を読む
海の底一万メートルに棲む怪魚
お笑いの餌食になっている総理
フラミングなぜ一本足で立っている
うどん屋も英語を使うニホンバシ

羽曳野市 吉村 久仁雄

忘れることの幸せ知って背筋のび
ど忘れはあから始めて思い出す
運不運酒の肴のほどのこと
煮え切らぬ僕へ即断の妻となる
平和一つ続けられない星に住む

東大阪市 北村 賢子

紅させば鏡のわたし生き返る
一つぐらいいはブランド欲しい女です
痛む膝去年はブーツ履いていた
いい人に見えるのかしら道聞かれ
思い出になればすべてが美しい

東大阪市 佐々木 満作

金婚日持ちつ持たれつ来た絆
やり繰りを誉めてあげたい妻の才
ささやかなバラ一輪の金婚日
金婚日子から旅行のサプライズ
高騰のヤサイ四分の一を買う

枚方市 海老池 洋

限界集落四季は巡って梅の花
御神籤に開運するとあった筈
土用鰻やがては死語になるだろう
鈍感の方が幸せかも知れぬ
自分史に書く苦い酒美味しい酒

枚方市 小林 わこ

螺子のゆるゆる心バランスとりづらい
上手いうまい話は横においておく
胸底に友の励ましあればこそ
一日を意のままこれが難しい
席ゆずられ素直に礼を言う私

枚方市 丹後屋 肇

御愛想店主へ土産追加する
勢いに乗りすぎていた勇み足
ヒント湧く風呂場の窓に指の文字
週刊誌の暴きを責めている世論
ありがたや火の粉を被る二月堂

枚方市 寺川 弘一

毎日何をしているのよと子の電話
認知症テスト幾度も繰り返す
万歩計あるから仕方なく歩く
ギャル達が突進ケーキバイキング
おばちゃんの飴はいつでも新しい

枚方市 二宮 山久

コンクールボケ防止にと挑戦す
我が郷は夕日百景無人駅
見栄張って見たい気もする年金日
病む右手人には負けない意地っ張り
シクラメン真っ赤に咲いて癒される

枚方市 二宮 紫鳳

おしゃべりや笑いで集う初げいこ
マドンナのトキメキ残すクラス会
失敗も悔し涙も今宝
パンプスで春風切つて古稀おんな
句の世界心旅する至福時

枚方市 藤村 亜成

境内の柄杓ですすぐ水匂う
数多の試練飛び立つ前の雛
小便の勢い立ち直る兆し
人のため尽くしてきました残り福
陽が傾き星が瞬き提灯が点る

枚方市 山口 弘委智

愚痴は捨て望み育てる老いの坂
足るを知り足らずも知った老い二人
平穩の中にある恩報いたい
生きる程知らぬこと増え迷い増え
晩学にエールを送るベンと辞書

藤井寺市 伊藤 アヤ子

底冷えは朝まで続き起きれない
豆まけば外の鳥達寄つてくる
恵方巻小さくなって丁度いい
車窓から雪しか見えない動かない
どんどうした残り火焼いた鏡餅

藤井寺市 太田 扶美代

ボリ袋青空なんか入れてみる
猫柳おだてに弱い妻のまま
しまつておこうとても可愛い孫のメモ
懇切丁寧な冬の嫌がらせ
咳二つ冬の深さを計つてる

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

本当の怖さうしろを向いてから
折り直すやっぱり鶴になつてくる
すぐに逢いたい妹がいる彼岸の日
いもうとの逝つた三年あとを掃く
黒よりも黒い灰色かも知れぬ

藤井寺市 鈴木 いさお

雪国の春がゆるりとやつて来る
サクラサクラ好きだった人もういない
父の形見質種にしたことがある
歳のこと病院のこと孫のこと
外人に道を訊かれて生きる手話

藤井寺市 高田 美代子

1・22嗚呼妹よ先に逝く
触れないで下さいわたし壊れそう
高野山ナイトツアーがあるそう
むくむくと雲が画になる広い空
誘導尋問ポロリ本音が零れたか

藤井寺市 増井 ヨシ枝

医者の数薬の数を飲んで朝
雪コンコあなたを恋うる音で降る
逢いたいと言われてみても車椅子
誰の世話にもならぬと言つてポックリ死
充実の中にひそんでいる孤独

藤井寺市 吉田 喜代子

集中力落ちて行きます止められず
踏みつけにされても横に小さき芽
カロリ―を気にしては旨くない
人様より私の為のチョコレート
舞姫の国を背負つて滑る技

藤井寺市 若松 雅枝

寒に耐え咲く梅僕に力くれ
絨毯に躓く足のもどかしさ
シルバーカーやつと世間の目に馴れる
汗を拭き拭きへそくり探す皆の留守
ヘルパーさんにハグしてじいちゃん照れている

松原市 森松 まつお

抜菌したお蔭で続く休肝日
句会後は行かねばならぬ店がある
熱すぎる男と飲んで風邪もらう
寒さなんかに負けるかと三軒目
うるさ型だったが逝くと淋しいネ

箕面市 大浦 初音

アウトの数踏んで人間つよくなる
僅かなことに心尖るも若さゆえ
我をはず負けるが勝ちの処世術
夫婦間ギャップ楽しむ年の功
犬二匹つれて散歩はご老公

箕面市 酒井 紀華

苦い酒飲んで忘れる君の声
飲むほどに淋しい人がはしゃぎだす
喧嘩して斜めの朝がやってくる
二度となき雲のかたちよ冬の旅
次の世もあなたに逢える水を飲む

箕面市 出口 セツ子

子の笑顔健康以外要りません
愛以外欲しいものなど有りません
惚けぬようほとんど遊び回つて
健康のテレビ夫婦で見えています
美味しいと聞けば遠くに行くランチ

箕面市 中山 春代

春よこい四百年の大銀杏
サッカーボール走る親子の長い影
ページ繰る指の冷たさみずゝ読む
遠い日の紙風船に祖母がいる
雪解水タツポタツポ熱下がる

八尾市 寺川 はじむ

銭金よりも夢に懸けると二刀流
うっかりかお惚けなのか老いの味
同情は要らぬと芽出す零れ種
ケータイをうっかり忘れた日の空ろ
サプリさぷりたつぷり飲んで百狙う

八尾市 宮崎 シマ子

外に出れば寒さが攻める籠の鳥
風邪熱のある夜はひとり寝が恐い
風邪見舞娘が来たのは三日目だ
雪害の経験持つ身思いやる
温いもの食べてもその場だけのもの

八尾市 山根 妙子

春の種袋の中で予報待ち
凍て緩み水仙笑い顔になる
実千両寒さを耐えて綿帽子
豪雪の車列に届け陽の光
春色の胭脂と白が減る絵具

神戸市 上田 和宏

日本中がほっとしました銅メダル
オリンピック寒すぎますよ平昌は
ゴミの日にカラスも来ない大寒波
銀行が混む偶数月の十五日
九十の彼女とお茶を飲んでいる

神戸市 奥澤 洋次郎

消しゴムの汚れ擦っている余白
そして病院で患者がつくられる
とりあえず今日はぼうつと寝ていよう
あの橋を渡るに悔いはひとつある
四十歳結婚しないと決めている

神戸市 富永 恭子

冬ごもり文旦の皮煮ています
子の自由認めて空が遠くなる
作るたび形がちがう布財布
豪雪のニュース人情少し足す
冬晴れ間ちよつとそこまでプチ旅行

神戸市 能勢 利子

新鮮な句材は老母の介護から
七歳に折り紙習う九十七
ごめんネに親子でしようとかハグされた
老母の笑顔見たくてシフォンケーキ焼く
来客に白髪隠しの正ちゃん帽

神戸市 細川 花門

愛燦々ことば織りなす二重奏
(川上大輪・富子句集 読後2句)
爽やかな朝だ富子の句が浮かぶ
タミフルを飲んで隔離の座敷半
食欲はないが酒なら吞めそうだ
冠雪のポストに届く二月号

神戸市 松井文香

穏やかな笑顔輝く病み上がり
プライドを捨てストレスにサヨウナラ
手助けもいずれお世話になる身ゆえ
いさぎよく身を引く妬心出す前に
かびてきたハートは愛で磨かねば

神戸市 山口光久

諦めた時に気分はリフレッシュ
寝転んで明日の風を待つとする
影になり日向になるとプロポーズ
寝不足を鏡が注意してくれる
寒風に野草が凜と咲いている

神戸市 山口美穂

雑炊をふうふう亡母の顔浮かぶ
電話鳴り編物目数またかぞえ
散歩には亡母の帽子があたたかい
コーヒーのあとホツとする日本の茶
半パンの小学生へ寒ささく

神戸市 山崎武彦

素のままで生きた証の皺の数
核心に触れると妻はよく喋る
ふる里の風に出合った数え唄
淋しいね自撮りが映えるひとり鍋
春色をパレットに溶き春を待つ

再会に遠い記憶を手に戻す

おはようを忘れた朝はしんとせぬ

華が無いとは言わせないかすみ草

テープ切るまでは歩みを緩めない

観覧車夢つきるまで回らんか

芦屋市 黒田能子

困ったなああなたの名前出てこない

身をまかせ上手に波に乗ってみる

若者よもつとしゃきんとしてほしい

猫まんま人間だって好きらしい

それなりに幸福だなと思わねば

尼崎市 市坪武臣

なんでかな昼飯だよと腹時計

あの日から五分進めている時計

七五三ママはぴかぴか貸衣裳

そこそこの福を見つけて生きている

冬だから寒いと言わず図書館に

尼崎市 加川靖鬼

壁を這う朝日に春の香りする

男結び締めると解けない悩み

手のひらの温もり逃がさないように

空気のようなお人頼りにされてない

もう春はそこ花芽にも色が差す

尼崎市 永田紀恵

東京のバンダばかりがなぜもてる
肩書きが付けば名刺の顔になる
トイレタイム計算しつつ飲むビール
ノーコメント不倫経験問われても
不味いとは決して言えぬレポーター

尼崎市 藤井宏造

だいたいはもれている内輪の話
診察券束にしながら生きている
僕にとつてハワイは今も夢の島
後ろからゴム鉄砲で妻狙う
花粉症スギやヒノキの仕放題

尼崎市 藤田雪菜

糠味噌が四季の野菜を輝かせ
趣味多くまだ衰えぬ好奇心
ほころびを繕う針が錆びている
鍋一つ買い替え弾む台所
突然の計報寒風が窓を打つ

加西市 金川宣子

財産を使い果たした終の家
幾品も手早く作る母の技
実母でもちよつと距離おく間柄
妻の留守羽根をひろげて飛び出した
ぶつけたい怒り押さえて笑み返す

川西市 大坪一徳

アベさんは右に傾く癖がある
山中さん謝罪にも出るお人柄
ネクタイの緩み直して社長室
自由だがちよつと寂しい定年後
水仙の香に励まされ明日を向く

川西市 山口不動

正月のゴミ全部積む回収車
狙います最高齢の直木賞
同期会行けますかねと足に聞く
史上初簡単に言う気象庁
雪国に申し訳ないけど雪だ雪

篠山市 北澤稠民

腹八分言葉八分を心がけ
病院で心身ともに一休み
腕組んで水の流れに身を任す
足音をしのばせ老いがやつてくる
遠き日の牛と野原が夢の中

篠山市 酒井健二

振り切った友が夜中にふと浮かぶ
釈迦の手の内は信じて無神論
見開いて極彩色に対峙する
健康のオタクと言うも恥ずかしい
健康のオタクを人に何と言お

篠山市 酒井 真由

全身で泣く赤ちゃんの力瘤
点数を稼ぐつもりのお手伝い
手古ずっていますリボンの結び方
捨てられたビックリ箱にある愁い
過ちをくり返しますヒト科ヒト

三田市 足立 つな子

上寿まで歩を進めたい二人して
愛一途手間を惜しまぬお惣菜
極寒のどんどん増える怠けぐせ
苦あれば楽のどかな春はすぐそこに
まだ奮門出の春が誇らしい

三田市 上田 ひとみ

味付けはいつもふたりで決めている
失ったけれど残してくれた詩
何もかも中途半端の冬の中
少しずつ回復させるマイハート
さあ食べて笑って前を向いていく

三田市 尾崎 一子

凍てつく夜節分さんは亡夫の忌
コロコロ節分の豆炒っている
亡夫と鬼豆を肴に恋談義
ピョンチャンヘススポーツ好きはたまらない
青春を謳歌する孫春の風

三田市 北野 哲男

筆書きで和綴じの句集宝物
目と耳の南天残す雪兎
他の星へトレードされた友偲ぶ
好奇心健忘症と同居中
福耳も論吉と縁は深からず

三田市 多田 雅尚

チョコだけでなかったバレンタインデー
法事の日笑って愚痴も聞く仏
子の行事決めているのは皆大人
扶養控除に入れて置きたい犬と猫
軍事費減自然災害対策費増

三田市 谷口 修平

物忘れ数えていたら切りが無い
拉致の子の歳を数えて逝った母
賽銭箱監視カメラで見張る神
選挙後は希望の党に無い希望
言い訳も豈もかなりズレている

三田市 野口 真桜子

ばらばらの記憶の隙間にいる二人
無秩序な騒がしさなり豆をまく
辛くって黙って乗っただまし舟
菌がゆさに負け犬吠える満の夜
青から濃紅先が見えない恋になる

三田市 福田好文

友に自慢妻に内緒の万馬券
出身地でもてはやされるアスリート
小中と皆勤だけが自慢の子
方言で招集かかるクラス会
五十年嫁入り道具がくたびれる

三田市 堀正和

スポーツと言うから相撲ややこしい
「西郷どん」の人氣あやかる砂の風呂
パソコンと周平抱え湯治宿
お土産は森伊蔵です湯治旅
旅帰り先ず新聞のまとめ読み

三田市 村田博

賞罰なし男泣きした事はない
もはや喜寿ローカル線の始発駅
いつ吐くか胸にマグマを溜めたまま
性懲りもなく繰り返す自己主張
万歩計の出番を減らす大寒波

高砂市 松尾柳右子

豪雪に泣く北国も青い空
一人居に娘夫婦の優しすぎ
成り行きでデイスービスに甘えてる
カラオケに楽しむデイの元気な日
締切が近い作句のボケ防止

宝塚市 田中章子

国東の石仏足腰丈夫なればこそ
オリオンと北斗なんとぜいたく船の旅
うわさ話聞き流すのが上手です
聞いたことすぐ忘れますいい感じ
横書きになると乱れるわたしの字

宝塚市 丸山弘一

例年の干し柿ですと友が来る
酒のこと一切言わぬ良いお医者
海外はもうええ温泉にしよ
本年も無病息災どんぞ燃ゆ
一年の計出来る頃にはもう二月

西宮市 秋元てる

久々に早起したら雨だった
片えくぼ好きと言われたのはあの日
秋明菊「冥」の字当てた子の忌日
子の絆伸縮自在で透明に
街へ出て昭和を見つけ足止まり

西宮市 緒方美津子

地吹雪去りやさしい雪の二月号
孫も結婚するのかな小豆粥
シャンシヤンの集客力に舌を巻く
ありがとねパン屋豆腐屋新聞屋
如月や祈る形で待つ蕾

西宮市 亀岡哲子

車窓からうつらうつらの雪が降る

弔辞なぞないが弔吟一句ずつ

セコムはずして鬼もお入り福も居る

一回り噂話の変化球

良く喋る女優わたしと同年

西宮市 西口いわゑ

聡太くんのお蔭将棋に興味持ち

アボカドもトマトも味方だと信じ

6Bとわたくしだけの小宇宙

さすがやねほっこり気分にしてくれた

お役には立たない乍ら輪の中に

西宮市 福島弘子

両隣一人居になり寒椿

お正月隣の猫もひょっこりと

幼馴染み本音が言えるつわの花

八十歳歩いて食べて明日を向く

己が目で浮かぶ地球を見て見たい

姫路市 古川奮水

研がずして米を炊いてもうまい飯

この秋も免許更新続けたい

北新地ネオン御無沙汰三十年

ネオン街朝は鳥の運動場

同席は親友らしく喋らない

南あわじ市 萩原狸月

ふるさとは熊に任せてビルの谷

好き嫌いないからサブリ要りません

美容師の魔法で妻もちよつと化け

世話やきはうとまれながら利用され

ドラマほど立派に死ねるわけがない

奈良県 安福和夫

なだらかな母の乳房の二上山

力士なら詣でよルートツ当麻の地

太子なら唱えた平和出づる国

大和路で核なき昔想い馳せ

美まし国九条あつて花も咲く

奈良県 谷川憲

あすなるの夢の続きは終わらない

ひよつとして隣歩くは宇宙人

氷張る鉢にどっこいメダカ生き

腰痛は気温の変化知っている

お水取り籠松明が春を呼ぶ

奈良県 中原比呂志

揚げ雲雀合格したとふれまわり

もう一年待てと斜めに回る絵馬

春来ても耐えてる露路の植木鉢

一年生見守り隊も一年生

春は良し来る人行く人ファンファーレ

奈良県 長谷川 崇 明

日だまりを抱いて春待つ氷点下
松園展出て美女想い深呼吸
もう一度錆びたアンテナ磨く日日
縄のれん時には友と隙間風
天辺に立てばすぐ出るその本音

奈良市 阿 部 紀 子

気配りもとても上手で人気です
社員にも好かれトップになられたり
家族には優しくなんてありません
悲しみと腹立ちの日々ばかりです
子どもらは私を守り一緒にです

奈良市 宇 賀 史 郎

戦中派何処か違和感ある政治
医者通い楽しみもある高齢者
ところだと本業を出す友に乗る
ゴマシリのイロハを学ぶ酒の席
自分では着れない晴れ着でも嬉し

奈良市 大久保 眞 澄

眼鏡はどこさつきあつたと言いながら
昔ならとうに一揆を起こしてた
自己嫌悪指紙めて紙めくつて
役員が決まるまで息止めている
マスクして近所の犬に吠えられる

奈良市 高 橋 敬 子

鬼になる気力も失せて波立たず
鬼もこわがる幼児虐待するニュース
新年会また道迷う歳となる
検査結果無事で力がぬけていく
一人居の良し悪し思う雪の朝

奈良市 辻内 げんえい

イルミネーション凍えながらも古稀夫婦
逆光なら撮ってもいいと妻の許可
年賀状が今年も来ない訪ねよう
一年後のマラソン目指し先ずシューズ
クモの巣の幾何学模様壊せない

奈良市 山 本 昌 代

新しい靴が欲しいと二男坊
ささやかな駄賃に夢をのせる孫
ばあとお孫おしゃべり弾むお留守番
膝頭揃え家族で聞く法話
暖取って寝とき寝ときと忘れられ

生駒市 飛 永 ふりこ

たかが古稀されどたまには凹みます
闇の中くぐって明日の自信つく
お枕のメガネの底の哀思ぶ
くすぐりたいちゃん付けですがもう聞けぬ
春めいてハートの蕪初初しい

香芝市 大内朝子

突然の目眩人生裏返る

起き上がる氣力を売っていませんか

病床のうつつへ亡母のがんばりや

友の訃を病床で聞く冬の底

食欲が湧いていのちの灯の燃える

和歌山市 磯部義雄

針千本用意されてはつけぬ嘘

統一の旗の実現待つ五輪

夜なべした母さん偲ぶ針供養

積雪で二の足踏んだ旅支度

薬箱持参働く老いた父

和歌山市 上田紀子

足許の幸せにまだ氣付かない

消去法味方が誰も居なくなり

ふるさとの訛り無口が喋り出す

百マスを埋めても空し走馬灯

果てしない夢追いかけてまだ途上

和歌山市 楠見章子

新しいことにキラキラ十二歳

手の内は全部知ってる七並べ

ポイントカードに誘われバーゲンへ

おととと泡出るようにビール注ぐ

アリガトナ照れ臭そうに差し向かい

和歌山市 喜田准一

単純な笑いと複雑な怒り

万札が俺の財布で仮眠する

今日もまた小言が増えて妻元氣

容赦なく切り捨てられるイエスマン

荒れて佳し風いで佳しです海の幸

和歌山市 坂部紀久子

きつかけをくれる便りを待っている

忘れ上手になつて家の中丸く

階段の手摺に命救われる

初恋は胸に青いまま残る

字の乱れ続く昔の日記帳

和歌山市 武本碧

格別のことは無いけど今日も無事

アレンジをするとクラシックも楽し

産声に下心などないだろう

小心の鬼がモザイクかけている

パン一つこねるにもある一家言

和歌山市 土屋起世子

光る輪も翼もないが孫天使

ドタキャンの友あり喜寿のクラス会

独りでもすること多く割烹着

頼ったらこれから先へ進めない

誉め上手いつか介護の世話になる

和歌山市 福井 菜摘

焦らずに二段構えで夢を追う
幸せの目線を低くして満たす
ものさしを変えて平安手に入れる
泣いて笑って原寸大で生きている
笑顔でとじる今日一日の物語

和歌山市 古久保 和子

牡蠣啖る海の不思議に触れながら
太陽に透かして鮮度確かめる
アンパンの餡が偏る半分こ
旅人の目指す木になりたいという
ほんやりと古刹の庭に小半日

和歌山市 堀 富美子

傘寿坂分相応の日が楽し
幸せと思えば明日の絵が描ける
子と意地を張り合いながら子を思う
早起きはヘルパーさんの訪う日です
泣き言は嫌い虚勢が背を押す

和歌山市 松原 寿子

ありがとうの気持届けただけなのに
私語ひとつ垣根を越えてかしこまり
ささやかな夢がふんわり浮いて春
テーブルが熱い会話を聞いている
お宝と思う便りを抱きしめる

岩出市 藤原 ほのか

螺子ゆるめ自分のペースで歩いてる
螺子を巻き今できること励んでいる
小雨なら濡れていこうと思ってる
小雨でも私の歩み変わらない
大切なお金意味あるものにする

海南市 小谷 小雪

心配をかけた分だけ太い幹
窓口よりA.T.M.が好きらしい
一張羅の皮靴雨の日が苦手
一枚のハガキに夢も載せておく
いい春へ首長くしてますかしこ

海南市 堂上 泰女

孫の生長スマホが綴る物語
一揉みに愛情込めてくれるパパ
真央ちゃんの動画で和む足の怪我
訪問リハが氣力をアップして帰る
寒波にもめげず白梅二分開く

紀の川市 北山 絹子

全快の兆し空気も澄んでいる
開幕へ女の勘が冴えてくる
手加減をされて女が強くなり
引き受けた話だんだん怖くなり
命名へ一役買った呑み仲間

紀の川市 楠原富香

息が合うように仕向ける匙加減
自業自得それを肥やしにして生きる
年の功煽てて使う術を知る
踏み出した一歩が明日の糧になる
ふる里の風がほっこり背を押す

田辺市 岡本昇

北陸の豪雪偲び鋏を振る
意識して背筋をぐっと伸ばします
気掛りなことはその都度クリヤする
誘われたらお断りせず乗ってみる
諍いも二人暮しのかくし味

橋本市 石田隆彦

今ここで吾振り返る露天の湯
やさしさへ傾いてゆく老いの情
飛び出しはK点越えの出来でした
笑い合う日が遠退いて今日も臥す
高齢に今年の冬は寒すぎる

鳥取県 斉尾くにこ

雪の夜だれか弾いてるエアギター
安心をしきって会話をすれてる
湯たんぽは冷たくなつて愛されず
今ここで笑い話にする技を
おおもとに好きがあるから厭わない

鳥取県 竹信照彦

驚いた太平洋から雪が降る
鳥取の雪が鳥根県に降った
寒くても温い所で寒ビール
締切が迫り炬燵にノート置く
株乱高下見て笑う素寒貧

鳥取県 西谷悦子

雪を被ってなお美しい赤椿
寒はたんワラ傘差して美を誇る
湯を流すだけの風呂だがよく汚れ
この皺は笑い皺だとしておこう
胸奥の引き出しで夢老いてゆく

鳥取県 細田裕花

評論家めっちゃ楽しそう世相斬る
紙ヒコークイワぬ夢を追って飛ぶ
ほほ笑みの力信じていいですか
仮想通貨損得だけは現実
年毎に医療費少しづつ増える

鳥取県 松川行男

高齢者離さぬ電話今日もあり
出かけるの川柳塔がきてますよ
投句欄両隣見てホッとす
どこへ行くゆつくり歩け雪の日は
ああ二月雑煮の餅の数忘れ

鳥取県 山下 節子

今年また笑顔の集う初句会
へそくりをはさけた本がわからない
老い二人まさかの時を考える
介護士が虐待をするまさかの世
出発は相思相愛だった筈

鳥取市 奥田 由美

初めての年金消えた検査代
逝く前に母の水団もう一度
声優の素顔見つけて割けた夢
旅先に訃報が届く親不孝
一行も書かない日記二月去る

鳥取市 加藤 茶人

美肌ねと誉めるが容姿には触れず
したたかに生きて表も裏も知り
席順で悩むゲストの格と地位
畳より施設で死ぬば子等は楽
右手では握手左はジャブを打ち

鳥取市 岸本 宏章

じゃんけんで決めた役割でも重い
雪遊びする子もいないわが団地
山に降る雪が恵みの水となる
長生きの秘訣語れるまで生きる
自画自讃目立つトランプ安倍総理

鳥取市 岸本 孝子

雪国に住んでも雪は気がめいる
女子会の誘いも雪に邪魔される
お互いが突つ支い棒になる役目
一呼吸待つこと忘れもめごとに
笛吹けど何も変わらぬ少子化だ

鳥取市 倉益 一瑤

不器用な鬼の孤独を知っている
わかってますよたと種まきしたことは
媚も尻尾も降らぬ達磨の一本気
振り向けばすったもんだもなつかしい
毒舌の鬼も仏になりました

鳥取市 田中 天翔

暖かい握手とハグに舞いあがる
真っ直ぐにアンテナ直し前を向く
亡き師に会える気がして向かう句会場
やあやあとドアの開く音風の音
ふりかえる言葉の中の師の気持ち

鳥取市 棚田 大

人生にまさかもあると喝入れる
付度も聞こえ良い時悪い時
心にも綻び生じくらくらだ
大自然自己中の世に喝入れる
運動は米寿からだだと吹いている

鳥取市 谷口 回春子

呆ける振りしながら暮らす樂隠居
早とちりしながら相手煙に巻く
孫が来て諭吉を連れてUターン
爺婆のサブリメントは孫四人
我が家には内弁慶が二人居る

鳥取市 永原 昌 鼓

付度もお世辞も苦手老いの性
雪掻いた道は感謝をして通る
逝った子へ今朝もお詫びの鉦ふたつ
骨だけは若いと医者のお太鼓判
ご先祖を誰に託すか思案する

鳥取市 中村 金 祥

文春がまさかまさかをあぶり出す
絶筆が世界平和と粹な人
降りそうな天堪えてる出棺時
少年の手探り潜む可能性
ランドセル夢と希望を詰めておく

鳥取市 夏目 一 粹

ピンからキリキリがピンより偉くなる
まず短所握り短所に触れないの
ストレスを先祖の墓に置いてくる
わたくしの喫煙場所が雪の中
人間は表は善で裏は悪

鳥取市 平尾 菜 美

あるがまま生きる財布の夢がない
気配りの尽きぬ姑の背字ぶ嫁
畳めない嫁の座姑となる覚悟
滝壺をさけて通れぬ遍路笠
分けへだてせぬ川柳道の広い海

鳥取市 福西 茶 子

吹っ切れたんだねショートカットが楽しそう
ソプラノの音で古木の梅開く
横向いているのに向い風が来る
阿を聞いて呶と言えないのも私
ラッキョウの酢っぱさひとつ恋終う

鳥取市 前田 楓 花

改めて見るとあなたは美しい
生きてたら母に食べさせたいうどん
氷の下メダカ静かに耳すます
雪の日は火燵で昼寝幸せだ
悲しみは返品喜びは貯蓄

鳥取市 山下 凱 柳

朝決意夜に反省繰り返す
走り続けた人生ちよつと一休み
終活の準備はちよつと始めるか
浮き沈みあった貫ぬく正義感
逆転はあるぞ両手を空けておく

鳥取市 吉田 孔美子

一月は働かないのさと大祖母
何人の従姉妹廻った振袖よ

「ライオンキング」の前で居ねむり

継ぐ者は無いが剪定エチケツト

ハチ公の忠誠ハリウッドをも繋ぐ

鳥取市 吉田 弘子

ひとりでも生きたあなたの居ない冬

身の丈と思えば何ら苦にならず

我が身より孫の未来を気にしてる

コーヒーはブラックと孫大人びた

無味無臭飾り気のない現実派

倉吉市 猪川 由美子

拉致家族呼べど叫べど無反応

雪ずりの音にびっくり落ち着かぬ

はれのひ社よ記念思い出返してよ

厳しい世弱者とどんな生き難い

恩師の死未だ衝撃続きます

倉吉市 牧野 芳光

朝方の夢を一日追っている

気が狂うような時間が横たわる

寂しい人の目線寂しい人へ向く

封筒に翼みたいな切手貼る

名刺捨てこれから腹で勝負する

倉吉市 山中 康子

亀の意地たまには見せるおばあさん

きりつめてきりつめて買う必需品

干涸びた体重増して大はしやぎ

文春ににらまれてから真人間

ピョンチャンが世界平和の鐘ならす

米子市 後藤 宏之

目をとじるまるで少女の合唱団

先送りこれが私の得意技

土の下虫もそろそろ春気分

草むしり酒も供えて墓まいり

すばらしいヒントもらったムダ話

米子市 後藤 美恵子

児は宝うるさいなんて罰当たる

学問が好き卒業を延ばします

編み物の一目ひと目がボケ寄せぬ

掃除ロボベテラン主婦をチェックする

詰め放題欲の本気度もろに出す

米子市 中原 章子

平成の穏やかな年暮開ける

年賀状下の桁から確かめる

バスデー記念に電子辞書を買う

縫いぐるみ犬と一時語り合う

玄関へ野菜だまって置いてある

米子市 成田 雨奇

鳥取に勝ったと思う今日の雪
わが病めば急に元気になる女房
ハモニカの練習をする雷雨の日
一週間禁酒成功祝い酒
本年もよろしくと言う歯医者さん

米子市 吉田 陽子

こころ早芽吹く二月の和菓子から
髪洗うときめくほどに泡立てて
ボランティア心を洗う日と決める
山鳩のボウボウと母思うとき
逆風の止み間にひらく花図鑑

島根県 伊藤 寿美

みぞおちにずっと動かぬ石がある
檜山へ行く山茶花の径を掃く
わたくしが何処にも居ない展開図
無人駅一人ホームで待つ始発
七十二年沈んだままの兵の墓

松江市 石橋 芳山

折り畳み可能な夢を持ち歩く
監視カメラにため息までも写される
珈琲の香りにしつとりと朝日
発禁となるのか僕の顔までも
傾斜角最大男のプライド

松江市 藤井 寿代

ポイントの貯まる店だけ繁盛する
ビットコインに集まった愚か者
若者よビタミンは足りていますか
幻想的な雪景色でもキラリ
春はそこ真つすぐ丘に駆けのぼる

松江市 松本 知恵子

横歩きする程旨い蟹ツアー
折れそうで電車に乗って孫の家
手押車の母とゆっくり歩いてる
雪見障子見ながら母は冬を越す
大寒の日溜りに居る母と居る

松江市 松本文子

針の筵か羽毛布団か現在地
山のカラスも認知症になった
頭叩くとスカスカボンと音がした
炬燵からベッドへ眠り移動する
ぬるめの爛だ私を墮落させたのは

出雲市 伊藤 玲峰

老いた木にピーチク小鳥来てくれる
絵を架けて思い出の街懐かしむ
豪雪も児等は燥いで雪だるま
角砂糖楽しい内緒聴いて溶け
朝の水グイッと手足よろこばす

出雲市 小白金 房子

踏みしめる力頂く朝参り
対局へ心眼開く駒の音
いい話熱爛一本追加する
胸の鈴鳴らして巫女と近くいる
国産の豆ではにげぬ鬼の声

出雲市 多久和 敬子

父さんの紙飛行機は世界一
光るもの無いからせて心でも
脇役でいいよ笑顔を絶やさない
力ないけど父さんを動かせる
自己主張上手になったマイタオ

雲南市 菅 田 かつ子

ぐちも聞くあなたが側に居てくれる
福耳をもつてじいちゃん聞こえない
拾われてコロとかわいい名をもらい
これしきと言ったがやはりどっこいしょ
それとなく孫が味方をしてくれる

雲南市 松 本 昌

正解のない人生だ楽しもう
老眼鏡補聴器年金消えて行き
北風と太陽どちらも怖いもの
あの人は過去の人なり賀状来ぬ
これで良いまほろばの里八十年

岡山県 池 田 たか子

同じこと聞く辛抱もボランティア
朝ドラの台詞をもらい元気でる
こだわりを捨てると私になくなる
終活のタンス内緒がうるたえる
へたでいい心に届くハーモニ

岡山県 高 岡 茂子

足痛を忘れデバ地下試食旅
苦しんで一句抜けたと喜んで
川柳であの世までが楽しそう
プロポーズ長生きすると誓った人
君に抱かれワルツを踊る夢をみる

岡山県 山 縣 のぶ子

ざわざわと追っかけて来るのは未練
ばあちゃんは炬燵に一人五七五
哲学者気取りのボチが昼寝する
厳寒も耐えてパンジーのカラフル
ぐうたらも生きる知恵かとミカン剥く

岡山市 工 藤 千代子

ハツケヨイ座ってなんかいられない
目を見ると負けそうなので手を見てる
いろんな音をさせながら悔しがる
海見える墓地がいいねとかけうどん
化粧するから嘘も言いたくなった

岡山市 丹下 凱夫

日記帳を買う二三日のために
ぎこちない歩幅で世間渡っている
壇蜜にやき餅をしている傘寿
妥協案ないまま酒の席に着く
もう死んでいい歳頃になっている

岡山市 永見 心咲

しじみ汁ごとりと春を飲み込んだ
幼子もおんなの貌で雛の前
人差指悪さはできぬブーメラン
チェロを弾く指はメロディ知り尽くす
春蒔きの花いっぱい敷き詰める

岡山市 藤成 操江

ダメ押しの言葉が重い予定表
良し悪しはどうあれ助言聞いておく
橋渡しした後一人残される
風邪ひくな転ぶなの声今日もくる
梅さくら春は足し算靴を履く

岡山市 前田 恵美子

毎日がマンガみたい過ぎてゆく
サザエさん昭和の心持ち続け
頬つぺたに気合を入れる寒い朝
ウォーキング充電される気の力
午前四時新聞届くバイク音

広島市 岸本 清

日日新たな増えることない持ちタイム
寒風にさらわれそうな老い二人
ローン終え家と僕との持久戦
名人の技には隠し味がある
大笑いしたら悩みが消えていた

竹原市 石原 淑子

ゆめうつつ春を待つて花蕾
母の味噌しつかり薫る路の臺
雪ダルマお天気チェック忘れない
雪の日の居場所を探すカラス二羽
太陽光発電とんの灰が邪魔をする

竹原市 岩本 笑子

座ぶとんを枕に男寝ていない
この道は一人で生きて行く為の
それなりに生きて七十路の声を聞く
みかんむぐ角を出さないようにむぐ
生きて生きて十錠の薬手のひらに

三原市 鴨田 昭紀

辻褄を合わせた嘘がひび割れる
青春の日を呼び戻すビートルズ
生かされて生きて美味しい朝ごはん
曲線が描けぬまっしぐらな気性
わたくしを透かすと見えてくる微罪

岩国市 上村 夢香

東かがわ市 川崎 ひかり

また今日も鬼と格闘する羽目に

深夜使いつの間にやら夢の中

ひとりでもテレビ見ながらワッハッハ

歴史好き大河ドラマが火を点ける

雪の中朝刊三時のバイク音

宇部市 平田 実男

医者通いしているほうが長く生き

ご夫人をちと持て余す安倍総理

美人より人好きのする顔がいい

抜き足で私へ老いが忍び寄る

不便とは書いてなかった分譲地

下松市 有海 静枝

硝子越し寒風知らぬシクラメン

他者からの評価を捨てた楽な肩

なあなあで捨て置くことができぬ性

生きている証拠に分別ゴミを出す

おしゃべりを貯蓄しているひとりぼち

防府市 坂本 加代

ボイ捨てに効果ありそうミニ鳥居

興信所狙いつけたら百年目

本籍はシートレートの免許証

ジェット機が頻繁に飛ぶ危機の空

会話中スマホ見ている薄情さ

雪国のように三日も雪が降る

プレスリー青春してたはじけてた

姉の紅さして十九の初デート

手加減を計算してた昭和の子

チャレンジに気持ち二十の心意気

松山市 古手川 光

春を喰うわらびぜんまいうどたら芽

脱皮して成長大人も筈も

この頃の天気予報のお節介

急ぐまい終着駅はもう近い

川柳が支えてくれる老いの日々

松山市 宮尾 みのり

乙女の祈りまでは月謝を払ったが

いい顔に撮つてと無理なことを言う

同情の言葉さらりと受け流す

断捨離も過ぎると人の好きも消え

忘却の彼方で過去が生きていた

松山市 柳田 かおる

いつも本気で毒舌でした好きでした

少しだけアレンジ歩幅かえてみる

錆びないでチョーコレートに赤ワイン

十年前のセーター今年流行るかも

語り部になろうやむやにはしない

大洲市 中居善信

骨のない男育った平成か

言いたいことは言って反応見えています

また核に頼る時代になる乱世

豪雪へ春の準備をしてる梅

疵くらいあるよ八十年生きた

西予市 黒田茂代

無音の夜明けると外は銀世界

南予人には豪雪の一尺余

雪に暮らし奪われたのも久しぶり

豪雪の朝も新聞几帳面

屋根の雪どーん心臓飛び上がる

西予市 西田美恵子

妻の吐息を聞き逃してはいませんか

甘い物好きだが甘い人じゃない

みだらに散る牡丹芍薬より椿

永久保存版あなたとの出会い

夫婦ゲンカ黙り込むのも秘策なの

高知県 小澤幸泉

老いた義母独り田舎にしがみつки

八十年神の恵みと妻の愛

鶴彬榎村浩と会わせたい

酒消えて十九年と三ヶ月

年毎によい味になる田舎汁

土佐清水市 辻内次根

庭の隅真如は草の花の中

酷寒の地に比べれば朝の霜

もう後は風に任せる冬の雲

残り時間少ない甘い香りして

摂生に努めこの世をもう少し

北九州市 小松紀子

時どきは生きてて良かったと思う

墓じまいあと樹木葬私の役目

席をあたため待つとるけんネと亡夫

老犬看とる切なく悲しく泣きました

足腰の愚痴を聞きつつなだめつつ

唐津市 山口高明

侵犯へ遺憾遺憾と抗議だけ

石英に濁った流れ磁器の町

放火盗撮勉強ばかりしてた人

火傷する覚悟あるのと火の女

調停にかけても解けぬ縄れ糸

熊本県 岩切康子

積雪は昼間に消えて陽眩し

糸切歯使える自分褒めてやる

日に二度の薬忘れる私の手

夜型と朝型暮し夫婦仲

キャンセルを埋める受診とありがとう

熊本市 杉野羅天

白薔薇が凜と咲いてる零下二度

高貴な方だ美人の香り牡丹

母の手にボンとわがまま置いて行く

ガキ大将真面目な友に支えられ

和太鼓ヘルンバのリズム和で響き

沖縄県 森山文切

放り投げたい衝動を腕に抱く

となりの闇を飲み込んだのはわたし

すれ違う人という人ほくそ笑む

干涸びた蛙圧縮された自我

凝固した優しさを受け入れて吐く

(前月分) 篠山市 酒井真由

みかけ倒しの男と組んでいるタッグ

愛と死がテーマ徘徊老人も

テーマから逸れて侃侃諤諤と

不思議な街で不思議な人と遇いました

夫と紡ぐ日々が私の宝です

水煙抄

(つづき)

沖縄県 宮

すみれ

底冷えの昨日も今日も同じ服

風雨など笑い飛ばして女学生

古本をリメイク好きな花表紙

直球でねじれ誤解を解いていく

森の句集



枕木の詩

両川 洋々

枕木の寝言も聞いて旅ひとり

野晒しの貨車よ泣くなど枯葉舞う

雨しとど赤字レールよ泣くでない

保護色に染まり切れない日を焦り

枕木よお前の愚痴は俺が聞く

花道も遊びも父の貨車知らず

俺の靴今日のいくさへ揃えられ

愛の鞭だったと気付く一周忌

癌という言葉に触れず触れさせず

母の日へ二泊の旅を子が贈り

よつぼどの怒りへ日記白いまま

職安へ男ざかりを売りに行く

渡り鳥いくさの国をいくつ見た

中年を意識ハンカチ無地にする

父に似た羅漢が我慢しろと言う

(平成2年10月21日発行)

川柳塔の

川柳讃歌

(16)

上方芸能評論家 木津川 計

六畳に柳行李で今日がある

北野 哲男

映画「おくりびと」の主人公・小林大悟は妻を捨て、情婦と放蕩に生きた父と三十年ぶりに死後対面したのです。変わり果て、顔を見ても思い出せない父は一人暮しでした。枕元には名前を書いたダンボール箱が一つあるだけ。七十数年生きてきて遺したもののがこれだけとは、いったいどんな人生だったのだろうと大悟は思うのです。それにひきかえ、哲男さんは柳行李一つから出発して今日の地歩を築いたのです。頑張り抜いた人生でした。

触るなと書いてあるから触られる

内 藤 憲 彦

木下順二の名作「夕鶴」でつうは亭主の与ひように言う。「一つだけ、いつもの約束。機を織っているところを決してのぞいて見ないこと。ね? きつとよ」ああのぞいたりせん」「ね、お願いよ。これだけは固く固く、決し

てのぞき見しないこと……。もしのぞいたら、それであたしたちの間はおしまいよ」。固く約束した与ひようだったが見てしまった。ええっ!! 一羽の鶴が自分の羽を抜きながら織っていたのだ。憲彦さん、究極の愛です。

一年の計で自分を縛らない

三宅 満子

「一年の計は元旦にあり」と言われ続けた方も多かるう。私もその一人で気を入れ替えて勉強するぞ、と計を立てても三日坊主で終る繰り返した。が、学校の勉強はせずとも本は読んだ。いまの学生はほとんど読まず、旅行によく出る。シエクスピアの研究者・小田島雄志さんがかつてこう言った。「ホテルの光ヤドの雪では、文よむ月日も重ねられない」。満子さん、縛らずに何をされるのです。自由闊達、それもいい人生です。

一番でなくてもひかるものがある

藤 原 ほのか

人生をやり直すことができるなら私は中学校の教師になりたい。どの子も持っている「ひかるもの」がいまなら分かると思えるから。小山内薫の言を永六輔は「役者その世界」に記している「人間の肩が俳優になるのでは無い。人間の宝石が俳優になるのだ」ではあるが、後半をこう言い替えたい。「人間の原石

を俳優にするのだ」と。優れた演出家は原石を磨いて宝石にするのだ。ほのかさん、一番でない方が先々の面白さ、楽しみなのです。

欠礼の予告賀状が増える老い

坂上 淳司

「今年をもつて最後にします」という賀状が近年届くようになった。書く手間に加え、多い方は経費もバカにならない。年始の挨拶をやめるというのだから、こちらも出さないのが対し方だろう。すると誰からも、どこからも賀状が届かない。なんとともわびしい正月になると思えばこそ私は出し続ける。この年になれば、なんとか生きてます、の通知でもあるから。淳司さん、さてどうされますか。

こつこつと貯め病院に持つてかれ

古手川 光

NHKスペシャル「老後破産―長寿という悪夢」(新潮社)を読みたい。ある男性(74)は洋服の仕立て屋だが年収は24万円、それに毎月の年金が6万円。一回の食費は100円から200円。奥さんは寝たつきりで入院しているが、1カ月の入院費が6万円、年金全額を充てる。生活保護を申請したが100万の預金があるため却下された。奥さんの葬儀代にあてる大切な金だ。光さん、私達は力を合わせ、なんと貧しい国を築いてきたのでしょうか。

自選集

小島蘭幸

熊本城に勇氣もらっている独り九州人の熱き取材が終わらない理事長賞あなたに贈りたいのです応援に行こう握手をしに行こうくまモンに負けぬ応援団である

三宅保州

生きてきた証部厚くなるカルテドーナツの穴にはまった自己嫌悪愛犬の喪主は私がつとめます性質も背中も丸くなった父メールという海に溺れていませんか

宮西弥生

老いというたしかなおとにある自分春という暦に自分から先ず変わる手も足も口も達者で浮く話まだ寒波居坐る鍋がきょうもまた一彩を変えると年齢が若返る

村上玄也

もう叫ぶ勇氣持たない八十路坂瘦せてきた僕に丸くなったねとは父の倍生きてて父を越えられず追い風に乘って実力見誤る捨て石が返り咲く日を心待ち

森山盛桜

イソツブの寓話に教えられている苦しんだ数Ⅱは役に立たぬまま根拠など無いが明日も生きられる制服と私服は使い分けているおもかげが朦朧とするちぎれ雲

八木千代

かなり本気

掛け声でどうにか進む台所二つ返事で回ってくれる洗濯機小掃除で済ます私の住むまわり返信は遅れぎみだが丁寧の不束なれどかなり本気の家しごと

山本希久子

主婦業に徹す冷蔵庫を満たす情報の重さにかしぐ飯茶碗悩みごと尽きずに仮想敵を追うネガティブに傾く一人だけの夜春に近付く病人は快方へ

板尾岳人

離婚した話犬から聞きました
古本屋でトイレを借りて出てこない
峰歩く金子兜太は許せない
いつ迄もいつ迄も母生きている
古池に金子兜太が飛びこめり

川上大輪

甘言に致死量ほどの毒がある
飛び乗ってみたけど降りる駅がない
反省が足りず輝また出来る
出る幕があり年寄りも忙しい
異常乾燥鼻水は出てるけど

木本朱夏

クラス群れてわたしの今日を暗くする
指の傷ごときに春を泣かされて
身の内の鬼を宥めてジャムを煮る
心地好い居場所があった夢の中
ネコ派イヌ派パンダ派も居て日向ぼこ

小西雄々

歪んできた笑顔へ続くリハーサル
美しくなる果物食べて満足か
鴨はネギ私もやはりネギ背負う
忘れたことが多くて枝枯れる
胃がねじれじゆくじゆく痛む夜が長い

齋藤 効

教室にチューリップ咲く新学期
種籾の一粒ずつにある未来
ぐっすりと眠り目覚めたい花芽
春雛がビヨビヨいのち遊ばせる
変化球に慣れて見事なバッティング

新家 完司

負け犬のDNAが離れない
いい名前スズラン桔梗ハナミズキ
マンボウが師匠ゆつたり深呼吸
落武者の姿でついてくる妻よ
晩酌で弾みをつけて飲みに出る

竹 治 ちかし

まだ里の匂いを恋うて街に住む
切り取り線私は内か外ですか
日々練磨立派に死ねるよう学ぶ
六度目の干支から貰う果し状
たればの世界で凄い夢を見る

津 守 柳 伸

気付かない振りで育てる自立心
目覚めればお湯もコーヒもワンプッシュ
ウガイ手洗いインフルエンザ遠ざける
毎晩の風呂は命の潤滑油
寒餅はもう届かない雲の峰

都 倉 求 芽
 起きるのが日に日に遅くなる寒さ
 熱いお茶供える今朝も0度以下
 節分もお詣りせずに無事祈る
 狙うから願いに変わる人生譜
 行っただけでよかった噴火する前に

土 橋 螢

初夢に死んだ女が現れる
 九十歳そんなに無理をするでない
 八方美人だったなあ茜雲
 長生きをしてもよいかと飯を食う
 寝たきりにならないようにドッコイシヨ

西 出 楓 楽

割り切れぬ割り算ばかり昨日今日
 ほんやりしていると明日が追ってくる
 鏡よ鏡少し忖度しておくれ
 山茶花のようにわたしは散るだろう
 八十路そこ生きてるだけが大仕事

仁 部 四 郎

花祭その日は八十路の同期会
 花祭甘茶めぐりにばあの紅
 花祭象は去年と同じ顔
 春の唄ですシャンソンに花祭
 花祭たしかめてきた回忌札

前 たもつ
 いい町だ保育所がまた増えてゆく
 早朝散歩月はいつでも味方です
 言葉は凄く折々のことばに出会い
 川柳を話題にもして菌科の椅子
 神様の造ったものに適わない

政 岡 日 枝 子

蟹三昧冬の皆生の温泉へ
 誰も気軽に家を出られる友八十路
 もしかして家では浮いているのかも
 いやしかし年金だけは持っている
 買物がある時孫は声かける

第69回 エヒメ春の川柳大会

日 時 4月22日(日) 午前10時
 場 所 愛媛県総合社会福祉会館
 (松山市持田町3-8-15)
 電話 089-921-5070

第一部

事前投句 締切 済み

第二部

当日投句 (各題2句・未発表に限る)
 (投句締切 11時30分)

「耐える」	川又	暁子	選
「カーブ」	木本	朱夏	選
「移る」	土橋	旗一	選
「古い」	田辺	進水	選

参加費 2000円

問合せ先 川柳まつやま吟社事務局

大前 尚道

電話 089-952-6774

主 催 川柳まつやま吟社

大洲の例会の宿題「幸せ」に次のような句を投句した。「米の飯食えるだけでも幸せだ」である。選者、智彦会長は迷うことなくこの句を入選句に拾った。随分と古い時代背景である、余りにも時代錯誤である。だからこの句を出すことに些か迷った。だが僕たちの年代には、すんなりと受け入れられる部分が残っている。

日本は昭和二十年に終戦を迎える。いえ、終戦でなく敗戦である。立ち上がる力も気力も途絶えた無残な姿である。街には食べるものが何もない時代であった。食料の流通を取り仕切る役所も潰されてしまった。ヤミという言葉がはびこる時代になった。小学校二年の時である。

教科書も鉛筆も帳面も何も無い時代。先輩から譲り受けた教科書を真ん中に置いて、二人で覗き込んで勉強した時代。戦勝国のアメリカは敗戦国の子供たちへいろんな物資を送り届けた。腸詰めウインナーを食べたのも、牛乳を飲んだのもこの頃である。本当は牛乳でなく、牛乳からチーズやバターを作る脂肪を抜いた蛋白質だけが残る脱脂粉乳を、水で溶き火を通したものであった。それでも僕たちは旨いと思って飲んでいた。

田舎には何とか食べるものが有ったから生きられた。麦飯もトーキビ飯も食べられるものは何でも食べた。今はいい、白い飯が毎日食べられる・・・。
古い話である。

温故知新

『たかぎきやう高杉鬼遊川柳句集』から

ひとまわり大きくなった鬼が来る
人間の檻に危険と書いておく
あなたでも社長になれる本を買う
千手観音 役にたつ手は二三本
飲んで寝て明日を考えたりしない
台風に包む位牌とにぎりめし
救急車 不幸を覗く人ばかり
奥さんの顔色を見る菊花賞
アツシーと言われてまでも尽くす恋
ひとときを原田泰治の絵に遊ぶ
金持ちへ補てん貧しい人にな
酔昆布を噛み噛み猿之助を観る
することもないのに猫も起きて来る
にんげんに等級がつく文化の日
よいことがこんなにつづくはずがない
あきもせず一夫一婦の内裏難
落ちこぼれ集めて塾がよく稼ぎ
パチンコのネオンの一字パが消える



川上大輪選

河内長野市 中島一彌

訪ねれば母の笑顔がぱっと咲く

ありんこがきよろきよろしだす春はそこ

適当に散らかつてると寛げる

右左指に食い込むレジ袋

重ね着の隙間に忍び込む寒気

寒い日は歳に関係なく寒い

尼崎市 近兼敦子

上ばかり見ないでそつとひと休み

諦めた頃に答えがふと浮かぶ

孝行かうんうんうんと母の愚痴

ゆるゆるとかたい頭もストレッチ

調子よいことだけ口が軽くなる

お互いに話聞かずに盛りあがる

豊橋市 藤田千休

叶わない恋に吐息の二つ三つ

懐メロがやさしく撫でる老いの耳

お見舞いの花に仮病を見破られ

捨てる神拾う神ありラブゲーム

多数派が惰眠むさぼる政

幸せな今日をハグして放さない

佐賀県 真島久美子

言い慣れた医師の口調に腹が立つ

蜘蛛の巣の向こうセカンドオピニオン

見舞い品私と母がよく太り

冗談も言える父ですいすい天気

病院の自販機だから信じよう

寝坊助になって退院日が決まる

鳥取市 副井裕

飛び起きたしかし何して過ごそうか

カラオケ屋明日のことはケセラセラ

妻の勘警察犬の上を行く

点滴で知識不足を補充する

我が務めごみ捨て掃除運転手

過疎の村空気と水に癒やされる

那覇市 前川 真

平凡で平和な朝の目玉焼き
限定と言われて無駄な物を買う
盆栽も背伸びをしてる午前二時
相槌が上手な影と二人旅
種を蒔き三坪に明日の地図を描く
廃線と決まり混み出す過疎の駅

鳥取市 山野 すみれ

皆違うお辞儀の角度暮らし向き
不揃いの菜箸で芋転げ落ち
噂消す時の帳が降りるまで
聞こえたり聞こえなんだり婆の耳
さて諭吉これからどこへ行くつもり
真っ白な雪も汚れて溶けて行く

大阪市 小野 雅美

嘘を聞く用意万端前のめり
ひとりカフェ隣の席は三組目
揺らしてもあなたの元へ戻らない
振り向かないできつと決心鈍るから
欲望を抑える蓋は甘いまま
深呼吸すれば吹っ飛ぶ悩み事

山口市 中前 幸子

夜の神話はまだ耳底にまつり笛
ラッキーチャンス逃して一つ老いを積む
涸渴した右脳へ効かぬ火の呪文

春の構図へ饒舌なわたしの骨
主語の無い街へ不要な句読点
花の宿想い出の日を巻き戻す

貝塚市 吉道 あかね

じいさんとはあさんだけの雛祭
白酒に少し酔ってる老いふたり
キラキラが消えたまあるくなつてから
古稀近く私の線が崩れ出す
十人十色少し嫌いな色もある
ブラブラのボタン付け替え春を待つ

和歌山市 西川 千鶴

五輪など我関せずと炬燵猫
ぶきつちよな生き方ですが良しとする
逃げ水のようなものです恋なんて
妬ましいナイスボディの砂時計
離陸後は天に命を預けます
金運は無いが元気に生きてます

尼崎市 清水 久美子

死生観持たずにありのまま生きる
ぼやきからのろけまんまと乗せられる
高慢にならぬ上には上がある
野菜高騰もやしに感謝しています
未来より過去に色めくクラス会
迎合をして良い子振る時がある

横浜市 川 島 良 子

古希万歳褒美いただく無料パス
一歩から始めるイチの難しさ
この寒波作動中止か脳回路
ほほえみ外交平昌五輪後の行方
飄々と生きる眩しい君の背な

横浜市 長 島 亜希子

センター試験僕も解けてた頃がある
亡母に逆らったが同じ道歩む
マスクして行けば素顔で大丈夫
上司だった妻は今でも上司です
洋服が大きくなってあら変ね

佐渡市 高 野 不 二

簡単に教えてくれぬ電子辞書
米寿とは自分の事と思われず
トイレに行く回数だけは数えてる
去年の事言うて昨日の事忘れ
CMについて誘われて手がのびる

福井市 伊 藤 良 一

家族にも麻酔が欲しい大手術
わたくしも鬼になれると知る妬心
新鮮な朝だ昨日は過去のこと
許すより許された数知らず生き
逆風にチャンスはあると子はジャンプ

名古屋市 富 田 末 男

前向きで殻を破った自負がある
大空で翼リズムを整える
ここには青信号が何時もある
どん底でグルメに縁が遠くなる
跳ね上がるバンに元気を貰う朝

豊橋市 小 松 くみ子

六十の手習い脳もハジけ飛ぶ
そろそろと断捨離するか脳の中
パスデー一人入院して静か
しじみらにメダカの糞を掃除させ
ひと粒で幸せになるチョコレート

豊橋市 西 郷 紀美代

昨年と同じことした日記帳
好物がそれぞれ違い不経済
呆け同士庇い合ったり突いたり
空気で別れ話が重くする
戦争の一手手前の意思表示

豊橋市 高 柳 閑 雲

雪国は雪に埋もれて声も無く
曇りガラス拭うと見える未来地図
今日もまた小さな墓穴掘りました
影武者の影も形もない野武士
遠来の客とりあえず酒を出す

大阪府 小 栢 こずえ

人違いしたかと思う風邪の声

日溜りの新芽たしかに伸びている

生きて行く道を知ってる老いの知恵

まだ飛べる余力を持つて生きる今

柳誌にも一人と思う人の句が

大阪府 畑 中 節 子

入浴剤入れてちやつかり旅気分

グルメ旅贅沢三昧一人占め

倅せは人並で好し五感研ぐ

いたわりの言葉頂くほどに老け

派手かしら問うばあちゃんの薄化粧

大阪府 中 島 栄 子

亡き夫に恋をしましょうもう一度

あなた懐温泉旅行出かけましょ

老い来れば見送る事の多いこと

気儘な人も亡くなる前は優しくて

リハビリ仲間独り住まいで話好き

大阪府 長 高 俊 雄

善行も悪行もせず黄昏れる

訪ね来よ冷えたビールが待っている

まな板がネイルアートを拒んでる

今日開くまた新しい一ページ

今日からはざくばらんでお前俺

大阪府 森 廣 子

気にせんといて言われて更に気にしてる

かなしみは尻尾みたいに続くんや

悔しいと嘆いて見せて舌出して

ちらほらの粉雪やから愛される

上手やな隠れてはるは花の影

堺 市 近 藤 治 子

反抗期子の言い分に耳を貸す

貸した本きれいな栞連れてくる

よく笑い心のゆとり手に入れる

あたたためて昨日の料理食べる昼

秘密よと自慢話を聞かされる

池田市 太 田 省 三

新築の一番風呂は老いた父

あこがれの先輩今は尻の下

推薦の決まった子からアルバイト

日当たりの良い家だけど昼は留守

冷え性の足が絡まる掘炬燵

門真市 坂 本 星 雨

心の氷柱冬の独りへまた伸びる

鬼は外鬼が豆撒く平和かな

かすみ草の和気藹藹を妬む薔薇

もうここで別れましょと冬の傘

ネクタイを外し海鼠になってゆく

河内長野市 原 熊 知津子

しがらみを払い落として独楽まわる
友情から色づく春の観覧車

寝屋川市 岡 本 勲

陽のあたる場所から落ちるスキヤンダル

こちらの出方待っているのねズルい人

雨天延期もう逢うことはないだろう

河内長野市 穂 口 正 子

ざわついて転がり落ちる止めなく

隠しても手は正直にしゃべり出す

頼もしいはずだった夫支えてる

孫帰り本の続きを開く夜

これも出会い恨みを解いてジョークなど

高槻市 三 谷 白 黒

ひとのこと嘘であつてもおもしろい

野菜高爺のやる気を刺激する

長いまゆ爺になった証拠です

間違いを見つける入試できそうだ

これからはおまけの人生楽しもう

豊中市 貝 塚 正 子

生き上手余白をうまく手なづける

銀杏をむきてヒスイの色に酔う

立つ時は掛け声かける癖がつき

命懸けチョット大層に言うてみた

フツと思うことはほとんどすぐ消える

離婚後はどっちにつくか悩む猫

それぞれの夕日見ている倦怠期

思いやり響き合ってる古い二人

喧嘩して妻には勝てぬ記憶力

もの言えは品格おちるうちのパパ

枚方市 佐 藤 武 紀

カラオケは溜った憂さの焼却場

無為無策それでもちゃんと生きている

足るを知り流れに任す我が余生

老けたなと電車の窓の自分見る

話題は株深刻ぶって輪に入る

箕面市 寺 井 柳 童

マフラーは？出かける度に注意され

畳替え昔なつかし古新聞

免許返納未練が残る教習所

喪中ハガキ毎年増える老齢化

占いが図星当って気味悪い

八尾市 田 邊 浩 三

ハルカスを着物で登る頼もしさ

核隠しオリンピックで逃げる北

腰痛に同情よりも痛み止め

曾孫は泣く狙い目を知っている

ジム帰り禁酒日忘れおでん屋へ

八尾市 前田 紀雄

定年後妻にリモコン操作され

我が家でも時々噴火山の神

場外で相撲取つてはダメですよ

アベノミクス貧乏神が離れない

ダイア婚目指し忍耐力磨く

神戸市 玄 番 美恵子

半世紀面影さがすクラス会

あつさにぬくもり添えて母の味

いい法話欝て聞いた遠い耳

はらはらとさせる低空基地の町

遊びごろ一杯抱いて春を待つ

神戸市 田 本 古 鈴

悔しさもここまでくれば笑い顔

爪を噛む気づけば亡父の悪い癖

消しゴムで消せるくらいの過去がいい

十何年暮らせば犬も気を利かす

磁石みな北を向いてる迷い道

伊丹市 延寿庵 野 靄

まだ夢があるから今日も辞書を繰る

割り切ればこだわることは何もない

世渡りへ笑顔をひとつを生かし生き

一歩引くことを覚えて丸く生き

クリオネが春の扉を開けに来る

篠山市 久保木 剛

自分ではセーブしている酒の量

バック酒揺するも残るもどかしさ

私だけお箸で食べる披露宴

軍艦を見てカッコイイ言う世代

ねんねこを死語に追いやる抱っこ紐

三田市 九 村 義 徳

鬼ごっこ知らず育った現代っ子

早起きが苦にはならない年になる

月影が雪見障子を開けさせた

どん底で他人の情けに春を見た

なんとなく言った一言後を引く

宝塚市 岸 田 万 彩

薄い身に河豚の悲しみ透けて見え

欠伸する貝は運命予知しない

蜘蛛の巣を詫びつつ払う庭の道

勲章になった持病に春の風

また一つ昔話が出来上がる

奈良県 中 堀 優

鋭角の心なごます地藏さん

それぞれの幸福という選択肢

また一度洗濯したいわが心

贅沢なゆっくりという老いの坂

チヨコもらい心も血をもさらさらに

和歌山県 森 下 よりこ

今日も零下コタツの守りに終始する

和歌山より可愛んだるか東京パンダ

野菜高鍋よりおでん多くなる

何かあるカラスが屯してる場所

そしてそして同窓会が女子会に

和歌山市 北 原 昭 枝

手酌酒ひとりのんでる窓の雪

額の中家族揃っていたあの日

水の輪を追って静かなもの思い

踊り場の日溜りでまつ花日より

あの人の足音がする春を連れ

和歌山市 倉 橋 悦 子

起きてから設置第三委員会

週二回これほどというゴミの山

悔しさをばねに若木が枝を張る

この世とは凄いききてるだけでいい

礼状が10円忘れ帰宅する

和歌山市 定 松 宏 枝

葬式は安くていいと念をおす

不自由も常と思えばそれなりに

受話器とりついよそ行きの声になる

春うらら母の手を引き針供養

真つ新な雪に足跡ポストまで

和歌山市 佐 藤 ま き

冠雪の垣に見まがう雪柳

しんしんと古里包む綿帽子

スノードロップ花芯ハートに咲く可憐

クラシックで発酵進め美酒を待つ

皆既月食見とれて凍る一時間

和歌山市 福 呂 秀 子

アンバランスあつて生活保たれる

八十路来てまだ必要な修正液

勿体無い昭和の声がまた聞こえ

パンジーが堪えて彩る寒の庭

身繕い武装に掛かる寒の朝

鳥取県 門 村 幸 子

冬が好き真夏日が好き濃く生きる

挽回は牛の歩みの気の長さ

雪掻きをへこたれながら日に三度

ギザギザの心仕舞って人の中

ふと和む亡母のキュートな笑い顔

鳥取県 児 玉 規 雄

うっかりとボタン押しそなトランプ氏

トランプとキム・ジョンウンの主役劇

年末も年始もネコはマイペース

ミサイルと舟で汚れる空と海

大の字にうっかり点をつけました

鳥取県 下 田 茂登子

独り身に味方と言えば川柳だ
自由とはいつでも食事出来ること
本家のいじめ今更憎むこともない
死にたいと言いつつ医者へ行っている
不自由な足腰だけまだ独り

鳥取市 大 前 安 子

無言電話へ無言のままの根比べ
本当は無口じゃないよおしやべりよ
今ここで喋り出したら止まらない
待て教え犬に待つこと教えられ
いいじゃない犬掻き出来て進めてる

鳥取市 田 賀 八千代

綻びも歓喜も知っている指輪
綻びを繋ぐ鍋だよ寄つといで
白黒をつけずやんわり生きてやる
エプロンの下で忍耐力学ぶ
本心を隠しプランコ揺れている

倉吉市 大 羽 雄 大

氷点下凍らせぬよう糸の水
朝食の雑炊にする蟹の鍋
ごみ出し日塵出すことの事始め
入れ物が小さい大きすぎる欲
綺麗なもののきれいに见たい目の手術

倉吉市 岡 崎 美知江

やつと来た運トンネルにしてしまい
ごめんねの一言絆よみがえる
急がねば老いの力も燃えつきる
降る雪に地球のうめき声がする
振る雪にまだ脅えてる青い屋根

倉吉市 堀 かずこ

思ひ出をたどってひとり旅に出る
星明り心の闇を照らしてよ
眠りたい夢の中でも会えるから
幸せはやさしい笑顔やつてくる
大雪が私の心寒くする

倉吉市 宮 田 風 露

動けるうちやつておきたい順を決め
口八丁手八丁は過去のこと
八十路とは時間のかかる事ばかり
老いの身に厳し過ぎます寒暖差
立春を迎えてもまだ凍て付く日

倉吉市 若 松 由紀子

バイキング欲張った分贅肉に
バラ一輪独りで祝う誕生日
甘味断つ三日続かぬダイエツト
酷使した肩腰膝に悩まされ
目も耳も味覚感じる舌も老い

米子市 生田 和之

島根県 原 德利

堂々と無職の二字を書く余生
マドンナも以下も愛しきクラス会
母の死を吠えて知らせたボチが逝く
焼き芋で飲むコーヒーも乙なもの
新語増えやむなく買った電子辞書

米子市 川 本 美津子

献立が決まらず店で立ち話
肉食べて元気な味と孫が言う
時期来れば人見知りせず花は咲く
芯に火をつけた貴男はチャッカマン
ちゃっかりと試食品食べ昼すませ

米子市 戸 田 真理子

猛暑日が恋しい今日は氷点下
片意地を張って虚しさだけ残り
断捨離を執着心が邪魔をする
言い分を半分にして様子みる
鳥の群れＪアラートに何思う

米子市 野 川 宣子

嫁った娘が年始お客の顔で来た
床の間が賑やか神がいる気配
外は雪冬眠ぐらし一週間
困ったらもやしたっぷり鍋になる
浄土へとおりづる入れる棺の中

仲の良い夫婦の秘訣ウフフフ
いつまでもひよこのままで済みません
大吟醸粗末ですがと持つて行く
空き缶の転がる先のレクイエム
人情で割ると焼酎薄くなる

雲南市 永 見 安子

あれこれと思うばかりではかどらず
新年もどっこいしよから立ち上がり
まだいける断捨離する日先延ばし
また今日も雪雪雪に愚痴もでる
雪の日々春のプランを立てている

瀬戸内市 宮 宅 比佐恵

ありすぎも無いのも困る人の欲
一匹のゴキブリ私をもて遊ぶ
平成も災害続きで幕下りる
したたかに生きよう仮面つけたまま
木々芽吹くみんなの顔も春になる

尾道市 日 谷 寛

曲り角越えてやさしい君という
この人の素直にハッと気づかされ
よろこびもかなしみもほら半分こ
しあわせがしあわせを呼ぶ二重虹
歩幅合わせてふたりの明日へ夢を足す

竹原市 若年幸子

松山市 郷田みや

欠けたとこパズルのように埋め夫婦
過疎が好き青い瞳をした嫁が来る

駅弁を買って今夜はひとり膳

春めくが恋の兆しの見えぬ孫

のんびりと出来ぬツアーの花巡り

府中市 岸田武

妻流に被せてくれるニット帽

覗かせてもらう隣の寒ボタン

乾布摩擦して妻を慌てさす

開演のベルもう一度トイレです

朝練の礼儀正しいユニフォーム

三原市 笹重耕三

ふる里の訛りが沁みている地酒

曇りのち晴れに私の血糖値

わたくしも乗るはず介護バスが行く

今度また会おうと軽いうそを吐く

父の香と土の匂いにする軍手

宇部市 高山清子

新党は付かず離れずまとまらず

低温へ粕汁を炊き老い独り

やばいぞと辞典も変える新時代

メールでは乱筆もなく味もない

伸びる芽を摘んでる親のエゴの愛

不器用が前進ジャンプ繰り返す

横向きが家族写真にひとり居る

雪が舞うちよつと電話をしてみよう

鍵穴は隠しています自動ドア

あれこれを入れて豚汁しゃべりだす

大洲市 花岡順子

食卓を若菜アレンジしてくれる

ルンルンは宙に浮いてる僕の靴

発端は針の先から大事件

もう時効昔の罪を暴露する

桜散る風が吹こうと吹くまいと

高知市 三谷松太郎

AIちゃんいつからそこに来ていたの

ガラス越し目白眺めて無為のお茶

山小屋に埋めて帰ったミスマッチ

自叙伝は血気を過ぎてからがいい

月明り朦朧とした分岐点

沖縄県 島村つばき

孫守りの卒業あとにひ孫待ち

無器用も器用のうちと励まされ

まずいとは妻に話せずそつと塩

理屈抜き只うなずけば安らいで

憧れた専業主婦も超多忙

札幌市 斉藤 宏子

東京都 高岡 弥生

隣人の愛を集めた子の食堂
みぞれ雪ひたすら前へ旅立つ子
捜し物代用品で間にあわせ
生きる為荒波目がけ木造船

札幌市 富永 恵子

秘湯の地心ほどけて湯の煙
コトコトと帰りを待つてナベのふた
豆を煮る冬の厨はにぎやかに

大寒の空気を吸って風邪知らず

弘前市 高森 一吞

深海は未知の四次元ドラマ生む

天を突く空を見上げるＪアラート

宮大工釘など要らぬ技がある

あのねのね秘密一つは墓場まで

白河市 鈴木 たけし

東北のＢＧＭは花は咲く

ルーティーンを終えた寝顔へ神宿る

風邪癒えて調剤票を千切り捨て

消毒の済んだスリッパ出番待つ

千葉県 廣瀬 良磨

ストレスが固い口から洩れている

乾燥に僕の踵が負けている

真四角な父の背中が丸くなる

決心が時間とともに溶けていく

末っ子の子育て悔いはありません
堂々と年齢言つてすっきりと
泣きながら駆け寄つてくる子が愛し
冬五輪プレッシャーとの戦いで

横浜市 巖田 かず枝

痛いので三度見てますわろてんか
激痛に思考食欲停滞し

辛いです痛みかゆみの戦いは

今日もまた痛い痛い日が暮れる

静岡市 渡辺 芳子

エンディングノート完成したいボケぬ前

幸せを感じる私生きられる

この世での縁を大事に生きている

友病んで自分の生き方考える

名古屋市 山本 三樹夫

人間を試す自然の雪猛威

水仙が眠りを覚し咲き誇る

取り立てる税が何処かへ消えて行く

夢だけは自分が主役立て役者

江南市 脇田 雅美

パスポート平和の願い入れておく

人助けまさかに貰う感謝状

デッサンにＢ５軽やか走ってる

バツサリと心機一転髪を切る

大阪府 高 木 道 子

お薬も自慢も過ぎた身の軋み

我が家の生前退位の軽い腰

リフォームをして古民家の洪を抜く

隣人と野良が顔だす勝手口

大阪府 中 内 孚 彦

再縁を拒むは実家の心地よさ

計画になくできた子が親しい

結局は国際世論効き目なし

人生を捨ててた筈がクジを買う

大阪府 磯 島 福貴子

バレンタイン義理チョコやめて自分用

老いの坂笑いと涙ありのまま

帰っておいでメダルなくとも堂堂と

仮装した鬼に泣き泣き豆まく子

大阪府 柴 本 ばつは

家族旅行しぶしぶ付いてきた夫

旅をしてきつちり朝を食べる癖

しんどいな妻との旅は禁煙車

無理したなと腰へ言うてるコルセット

大阪府 樋 口 真

厳寒に痛いガス代電気代

爺さんがこけても誰も騒がない

好奇心幼児はボタン押したがる

良い思い出捨てられなくて減らぬ嵩

大阪府 前 川 善 之

鬼の面付けて吠えてるお父さん

リハビリで歩け歩けの妻の愛

子の笑い鬼も逃げ行く保育園

老人も希望の見える丘に行く

大阪府 松 田 聰

大丈夫かな東京五輪目の前に

インフルに負けた自分が情けない

吸殻を捨てる心が悲しいな

マイナンバーどれだけの人カード持つ

大阪府 横 山 里 子

赤い月帯に乗れば翔べそうな

婆ぬきかこの頃とんと誘われぬ

久久の心齋橋はよその国

持つては逝けぬが無いと淋しい金

堺市 梅 木 澄 空

昨日会い今日の訃報が呑み込めぬ

肩書きをひけらかす奴浮いている

歩み寄るきつかけとなり誕生日

赤ん坊の喜怒哀楽は頼もしい

堺市 松 永 庄 三

老うごとにチャリンコサドル下げてます

キツチンに定年亭主入りびたり

ちよっぴりのプライド捨てず生きてます

改憲よりめぐみの方が先ですよ

堺市 大和峯二

暮らし向き無視し冷たい政治する

金貯めることすらできぬ低収入

心配をひろげひろげるオスブレイ

九条をいじり平和を旅に出す

豊中市 荒巻 夢

初雪に手のひらほどの雪だるま

人間を嘲笑うかに活火山

クラシック聴くにも気力要りますね

変人の片鱗残しさあ米寿

池田市 上山堅坊

年金のお庭の中にある暮らし

老いの儂さ晴らしてくれる紙オムツ

まず一步進む女神を期待して

大宇宙自由に飛べる五七五

泉大津市 助川和美

結婚を機に感謝の気持ち湧く

議員さん当選すれば反りかえる

脱線した国会いまだ森加計

厚化粧綺麗になった積りです

河内長野市 渡邊 修

ピョンチャンでひそひそ話の舞台裏

喜寿超えて未だに届く義理のチョコ

チラシ見て女房が決める晩ごはん

品格が落ちる駄洒落の元上司

吹田市 岩口 のぞみ

五輪見てちよっと真似して足がつる

隠してるチョコは高級自分用

旦那には義理チョコさえも忘れてた

雛人形出し遅れてもすくしまう

豊中市 源田啓生

狂ったか鏡この頃嘘ばかり

終活に妻はヘソクリ忘れてる

終活で出て来た指輪で一騒動

蟹哀れ丈夫な手足鬼が食う

羽曳野市 磯本洋一

違うだろうそう言う君も迷い人

老老の会議の前に葉飲む

LED子供部屋から近代化

若返る昭和ナツメロ口ずさむ

枚方市 坂本ミヨノ

老いてまだ料理を作る冴える腕

この寒さ過ぎたら寿命延びるかな

空腹の虫に囲まれつまみぐい

雨漏りにバケツを並べ音楽だ

神戸市 奥水弘

鬼だつてあんたの家にゃ行きません

バックしゃん振り向きざまに見る勇氣

抜けに抜け残りはらはら髪惜しむ

野菜たつぷりカレーどや顔亡母がいる

神戸市 近藤勝正

鳥人に鳥も驚く冬五輪

冬五輪うまく使つた北の知恵

天変地異長生きするのが怖くなる

通知帳もらう心地の検診日

神戸市 山根弘華

没句でも希望すてずに五七五

卒寿でも向上心はまだ枯れず

美しく老いる鏡をさがしてる

はらはらとさせた息子の一人だち

伊丹市 平井富夫

内の人愚痴と文句の聞き上手

立呑み屋親父の愚痴に花が咲く

爺に言う孫が大学入学と

見に来てね発表会で孫跳ねる

加西市 山端なつみ

水点下裸の旗手は風邪引かず

ソチ涙ビヨンチャンに飛び沙羅メダル

合格点もらえぬ主婦のお出かけ日

髪を切りピアスをチラッ花金よ

篠山市 長谷川善輔

新技術勝手に走る車が怖い

この新車すぐにおやつが欲しくなる

太りすぎ手頃な値段は小さすぎ

目が覚めてすることもなく句を作る

篠山市 藤井美智子

恵方巻き捨てるニュースへ胸痛む

食べ物捨てるられませんか戦中派

腹の虫おさまったのか笑つてる

乗り越えて喜怒哀楽もおだやかに

三田市 幸田厚子

初英語ハローと言えた三宮

いじわるも知恵と笑いの人気婆

番傘の屋号行き交う有馬の夜

アンテナを張りつめた妻うわさ好き

三田市 辻開子

風邪もらい無気力ですがお許しを

巻き寿司は手作りしてた頃思う

ゆつくりとテレビ見てたら邪魔入る

ストーブが寒さ厳しくストおこす

三田市 東内美智子

お義姉さん曇り後晴れ天気者

股のぞきあっち向いてよ恥ずかしい

平成の次の元号待ち遠し

昭和一桁孫から見れば大昔

三田市 松本 ゆかり

そう言えば娘五十を過ぎていた

片足で青鷺寒の瀬に不動

あの二人シャガールのよう宙にうく

年毎に小さな箱にするゴデイバ

宝塚市 太田 としお

結婚記念日忘れるぐらい愛してる

生きる道一番大事笑ろてんか

何よりも腹の乾きを満たさねば

ええやんか金ですますというてはる

西宮市 福田 正彦

士気煽り体罰に見る負の連鎖

争いと平和が同居この地球

畦み合う国と国とに虹の橋

極寒に笑顔持ち寄り和の五輪

姫路市 中野 忠

母と撮るこの一枚は宝物

誘われるあいだが花よ今のうち

味方とて足の裏まで見せられぬ

モーニング喋る相手が待っている

三木市 山口 久子

眼をとして母の笑顔に逢いに行く

福の神毎年我が家ねがいます

じいさんが芋が焼けたと呼んでくれ

辞書相手文字は引いたが句を忘れ

奈良市 尾畑 なを江

好きなのでシンブルライフ心がけ

後悔が多く時々立ちどまる

無責任他人の口に軽さみる

病院へ行く時マスク持つて出る

和歌山市 鍋嶋 澄子

淋し波激しく高く胸砕く

太陽でキラリ氷柱が心射す

青い空冷たさはなつ冬の朝

梅もいい白く春まつ吾が娘

和歌山市 福島 一雄

やつとこさ父の寿命に迫り着く

シンシンと闇につぶやく夜の雪

暖房器メモリはいつもハイレベル

問いかけに答えぬ医者と妻怖い

岩出市 村中 悦男

銃後に生きて今ゼいたくにめしを食う

水仙を活ける鉢も春の音

設定温度見直しせまる外は雪

免許返上それでも事故の夢を見る

鳥取県 飯野 菖子

没の句を大切にして続く道

もう一度着地をしたい母の膝

年のせい心配ばかり先に出る

人生は覚悟覚悟の道だった

鳥取県 橋谷 静江

気のゆるみ雪に足元すくわれた
惜しげなくなつたつぶり食べる自家野菜
老いた齒にたつぶりお金かかりだす
川柳が私の元氣取り戻す

鳥取県 橋本 整

苦も楽も残して妻は終の旅
いい人になること止めて楽に生き
踏み込まぬ距離を保つて家族愛
このごろは介護施設に鬼が住む

鳥取市 上山 一平

零下五度お隣の水感謝する
どか雪に埋もれたキャベツ天まかせ
雷鳴にまたも雪かと氣が減入る
泡雪に咲く山茶花のけばけばし

倉吉市 田中 紀美恵

大口を開けて笑いの空氣吸う
ひ孫誕生うれしい空氣飛んで来た
夢追つていつの間にやら八十路なる
優しい顔曇つた心消して生き

倉吉市 田中 けいこ

いやなことと思ひ出さない事にする
客よりも監視カメラが多い店
偉い人似たり寄つたりウソをつく
春闘もボーナスもない職もない

境港市 中井 虎尾

雪化粧照れてほほえむ伯耆富士
立春に逆らいながら雪は降る
降る雪は宇宙の使者の白い水
凧に鳥になりたい一葉舞う

米子市 池田 美穂

韓流を死ぬ程観ても話せない
釣書には取説付けて欲しかった
寒いからグーばかり出す私の手
大雪がやる氣の上に積もつてる

米子市 伊塚 美枝子

雪見酒この地に暮らすご褒美だ
春色に染まる日待つて雪に耐え
成人の孫と乾杯感無量
脳天氣プラス思考で過ごす日々

米子市 黒田 紀美江

元氣でした付度しあうサロンの輪
改訂版買う氣はあるが小さい字
そつと見る雪見障子の別世界
雪女今年は里に下りないで

米子市 田村 周子

単調な日々には笑いは良い薬
はれの日に娘を泣かす商売人
留守番のシンビジウムが氣にかかる
東京の雪にびっくり転ぶ人

米子市 見山温子

穏やかに老々介護やつています
食べたい物食べれる今日に感謝する
あんたのため長生きすると夫が言う
続くカレー無言の夫にビール注ぐ

松江市 相見柳歩

果てはない魂の旅はとけさま
初恋のひとの胸には飛び込めず
あの世では揺れることさえないだろう
天国の杵へ樂して入れるか

松江市 中筋弘充

ホームの義母はあまり気にせぬ現在地
百歳の義母が孫の死認めない
逝った子の自慢肴に飲んでいる
金払ってまで死にそうになる遊園地

松江市 山根邦代

ごま粒が入れ歯のすきまいけずする
冷え込みに手足も脳も休み中
アドバイスもらえば嬉し背が伸びる
オリンピックかけける若さに夢もらう

出雲市 黒目ひでお

忘れまい共に生きてるこの時を
あのフリーズを忘れられずにあの曲と
夢を追ひ辛抱我慢夜明け待つ
ジョージアに花を咲かせた栃ノ心

玉野市 片岡富子

相続を少ないなりにやつてみた
家系図を紐解けば知らぬ人ばかり
終活に兄妹絆強くなる
雪積もり喜ぶ子供見当らず

広島市 田桑恵子

皇寿の母ひ孫やしゃごに見送られ
香燵る母亡き部屋の寒々し
風花舞う母の初七日春近し
ゆつたりと本とコーヒーひとりの日

広島市 松尾信彦

きょうもまたタラレバ日記締めくくり
失敗談デフォルメしては人寄せる
カレンダー一年かけてダイエット
無為無策薬のんだら炬燵番

尾道市 小畑宣之

自分から未完の大事と言う大事
僕未完これからなんだ夢一杯
プロ野球未完の大事ばかり増え
人は皆生きてる限り未完成

竹原市 土井輝恵

習慣病名前通りでございます
ハンガーのダウンが背中曲げている
結婚はバラ色で無し孫に言う
八十の齢に甘える日もありて

竹原市 六田 半徳

唐津市 岩崎 實

背骨を痛めて自宅で養生中
酒の量減らして鍋の味うれし
左手を右手でさすり明日想う
雨あがり新しい風ありがとう

三次市 伊藤 寿子

叱らないピアノ教師へ詫げる指
脳と指孫のピアノへ脱ぐ兜
ピアノ弾く中学生に戻る指
嫁さまのダウンへ婆婆の底力

今治市 渡邊 伊津志

長寿税取られそうです近未来
脇役を果たし続けた妻の自負
葱坊主木偶にも木偶の恩返し
修羅いくつ越えて果たした金字塔

高知県 茨木 昭夫

ちよん掛でビットコインを釣り上げる
米寿きて残りを燃やすステッパー
残り火を大きく写す顕微鏡
リミットの線を跨いで余白行く

福岡県 本田 さくら

寒い朝時計とふとんにらめっこ
近頃の地球何かのたたりかな
桜草小さなつぼみ春まぢか
賀状こず何か気になりでんわする

わが生は芳谷炭坑跡地にて
兵三人母の百度で皆還り
行く末は輪廻転生霧の中
香煙を浴びてみんなを守り抜く

山鹿市 中山 好打

背くらべ孫とはりあう年となり
寒の入り凍てつく手にも息をかけ
お飾りを下げて寂しや神仏
大空をとび魚のよに飛ぶジェット

山鹿市 前田 幸子

老いてまだ自慢の歯です歯垢取り
賞味期限婆さま平気でごちそうさま
初孫に家内笑顔が増えました
補聴器がやとやさしく声かける

山鹿市 柳田 白沙

春よこいゴールは一緒スタートも
朝いちにメダカがきつと声かける
誰に請う日付を元に戻してと
この児らに夢を包んで贈りたい

沖縄県 禰 モモト

春嵐とんとんとドアノックする
助手席の愚痴耳障り気が減入る
戌年を五運六気で頑張るぞ
いびつでも味は変らぬ蜜りんご

(宮 すみれさんは44頁にあります)

誹風柳多留一二篇研究 58

伊吹和男・山田昭夫
石川道子・小栗清吾
細井龍夫

清 博 美

489 ひたを直しながら鯛の先キへたち

伊吹 祝い鯛。袴の襷を直しながら、白木の
台に載せた鯛を持つ供の前に立った、お祝いの
言葉述べようとしている者の描写句。

清 賛 棒つきの中を生鯛式まひ行き 安元宮1

490 しやくぜんのよけい中宿二日置キ

伊吹 『易経』(坤・文言伝)の、
積善の家には必ず余慶あり。積不善の家
には必ず余殃あり。

の文句取。今までたんまり儲けさせてくれた
から、勘当になった息子を中宿は二日間だけ

置いた。

中宿ハ義理で勘当二日おき 一〇五
清 賛 このフレーズ、謡曲の幾つかでも引
用している。

491 おいこんだかげまやつひしあこをなて

伊吹 この句の場合のやつびしは、たびたび、
しきりに、といった意。髭が生え始め、しき
りに顎を撫でる陰間は、その職業としては既
に峠を越している。そんな若い年頃を「老い
込んだ」と表現したのが、句のミソなのだろ
う。

山田 賛 普通「顎を撫でる」は「得意な
さまの形容」(「広」)に使われる成語ですが、
本句の場合は全くの逆。何か句作上の効果が

秘められているのでしょうか。
清 賛。

492 むかと書いたかと木曾とのあつき也

伊吹 悦喜は、喜悦と同じで、大いに喜ぶこ
と。少し引用が長くなるが、『平家物語』(巻
七・木曾の願書の事)に、

一年高倉の宮園城寺へ入御の時、山、
奈良へ牒状を遣されるけるに、南都の大
衆、いかゞ思ひけん、その返牒をば、こ
の信救にぞ書かせける。「そもく清盛
入道は、平氏の糟糠、武家の塵芥」とぞ
書いたりける。入道大きに怒つて、「何
でふ、その信救めが、浄海程の者を、平
氏の糟糠、武家の塵芥と書くべきようこ
そ奇怪なれ。急ぎその法師を搦め捕つて、
死罪に行へ」と宣ふ間、これによつて南
都には堪へずして、北国へ落ち下り、木
曾殿の手書して、大夫坊覚明と名のる。
とある。奈良から逃げて来て木曾義仲の枯筆
となった覚明(信救)に、返牒の中で清盛(浄
海)のことを「平氏の糠」と書いたのかと義
仲が言つて、非常に喜んだであろうという想
像句だと思う。

状箱か来レハよはれる太夫坊

初 11

山田 賛。御明解。

493 あちなつりはりて尊トをむこにとり

伊吹 海幸彦と山幸彦の神話からの句。天照大神の孫の瓊瓊杵尊には三人の子があり、長男が火照命で三男が火遠理命である。それぞれ海の漁・山の猟を得意としたので、海幸彦・山幸彦とも呼ばれた。この兄弟があるとき道具を取替え、それぞれ異なる獲物を追ったが、弟が兄の釣針を魚に取られてしまつた。針を返せと兄に責められた山幸彦は、大綿津見神宮を訪れ、大綿津見神の娘の豊玉姫をめぐり、捜していた針も手に入れたという物語である。この場合の味なは、粋な。大綿津見神にとって、釣針が縁で火遠理命を掣にしたのだから、粋な釣針である。

清 賛。釣針のなんきか直ぐに仲人し 宝九義

494 三ッふとんよつ程天へちかくなり

伊吹 類句が多数ある吉原の高級遊女の三ッ重ね蒲団。類句一句目だと、畳から九一センチメートルくらいになるので、これは少し言

い過ぎだろう。しかし、その蒲団で寝た気分は、高くて天にも昇る気持ちなので、天に近いと詠んでいる。

畳から三尺高ひおもしろさ 箋三二
三ッふとんよつほと月へちかくなり

清 賛。

495 ほへる犬手桶をかぶり追ひ廻し

伊吹 迎春準備の歳の市の句。一番賑わった浅草寺は、十二月十七日と十八日の両日であつた。市で買った手桶を被つて歩いていたら犬に吠えられ、悪戯でその犬を追ひ回している、描写句。

市戻り手おけをぬいでしぎをする 一三三
犬が来てさわけハ桶もぶつこわし

清 賛。

496 さあこゝたつらをぬぐへとせげんいひ

山田 吉原の大門、あるいは売り先の妓楼の前に来た時、女衛が連れて来た娘に「さあ此処だ、面を拭え」と言っている。娘は行き先不安で、泣き濡れているだろう。

つらをぬぐへと手ぬくひをせげんかし 安五梅 4

497 けいせいを買ふと男が生きて来る

山田 男一度は伊勢とよし原 種御三三
という句もあるように、男と産まれて来たからは、花の吉原へ行つて初めて一人前となる。あそぶ氣をやめるとさかる男ふり

別解。真面目一方で恋患いの男は勞咳になると言われた。実は氣鬱症で、江戸時代は「氣のかた」と呼ばれていたものだが、これには特效薬があつて、女性に接すると忽ち快癒し「男が生きて来る」というのだ。
どちらも成り立つと思うが、「男が生きて来る」という語感からは、前半か。

石川 前半に賛。ただし、吉原へ行つて初めて一人前となる、というより、傾城を買つてこそ男つくりがあるというようなことで、一人前となる、というのとはちよつと違う？
伊吹 「男つくりがある」なるほど。遊里礼賛句と思う。

清 男つぶりという外見ではなく、男一人前としての風格がそなわつて来る。

愛染帖

新家 完司選

(投句287名)

タクシーも地下街までは来てくれぬ
京都市 都倉 求芽

(評)電話一本で来てくれる便利なタクシー。
特に酔っぱらったときには感謝々だが、さすがに地下街までは降りてきてくれない。

余生とはこんなものと朝寝する
三田市 久保田千代

(評)余生とは「現役を退いてから旅立つまでの残された人生」。誰からの叱責も受けずにのびのびと寝坊できる、最高のひととき。

先を読むのには便利な破れ傘
那覇市 前川 真

(評)破れ目から雨が漏るが先が見える。と言つても明日や明後日までは読めない。まあ、せいぜい20メートルほどではあるが……。

家計簿の三日少ない二月好き
大阪市 岩崎 玲子

(評)三日も少ないということは、三日分の食費も光熱費も助かるということ。おまけに二月は年金月。寒いけれど如月は最高!

ベッドから落ちるくらいにまだ元氣
豊中市 藤井 則彦

(評)衰弱した人は寝返りさえ人の手を借りなければ出来ない。ベッドから転げ落ちるということは、まだまだ大丈夫ということ。

文科系なので多少はおせっかい
東京都 川本真理子

(評)自分が文系か理系か、しっかり認識している人は稀。「文系なのでお節介」てなこと、何となく納得させるのも文系の力か?

席譲る機能忘れてきたスマホ
河内長野市 原熊知津子

(評)指でつつくだけで何事でも検索できる魔法のようなスマホ。だが、「目の前の高齢者に席を譲るべし」等という指示は出さない。

ひとりぼち拾い集めてバスツアー
大阪市 津守 柳伸

(評)集合場所で談笑しているあの人もこの人も独り者。元氣だからこそ参加できるバスツアー。ずつとずつとずいっと出掛けよう。

四民平等のんだくれにも朝が来る
弘前市 高瀬 霜石

(評)明治政府が士農工商の身分制度を廃止したときのスローガン「四民平等」。モチロン、のんだくれにもお日さまは微笑んでくれる。

お金だけ信じて川が渡れない
松江市 相見 柳歩

(評)お金の力は侮れないが、それだけでは

何事をも成し得ない。先ずは「人の輪」。信頼できる人たちとの繋がりが何よりも大切。

年齢の自覚促す雪が降る
海南市 堂上 泰女

転んだら最期ですよと雪が降る
米子市 竹村紀の治

赤ん坊の様にヨチヨチ凍る道
大阪市 磯島福貴子

銀世界さぞや雀もひもじかる
三田市 谷口 修平

山陰がそんなに好きか今日も雪
鳥取市 吉田 弘子

予報士も顔をしかめる寒気団
和泉市 横山 捷也

ひとり幅の雪かき今日も三度する
倉吉市 岡崎美知江

ただひたすらに我と戦い雪を掻く
弘前市 高森 一吞

暖まる鮫鱈脱む冬の鍋
鳥取県 橋本 整

大寒の胃袋空かし蟹の鍋
枚方市 小林 わこ

カニ缶で辛抱します一人鍋
河内長野市 中島 一彌

ゴキブリも出るに出れない冬の底
大阪市 宇都満知子

風邪ひいてたら坂の治り道

西宮市 福島 弘子
手始めに今年の句帳張り込んで

河内長野市 木見谷孝代
新子語録胸に刻んで作句する

笠岡市 藤井 智史
川柳のプロフェッショナル目指したい

鳥取市 倉益 一瑤
天皇をネタに句作りする平和

藤井寺市 鴨谷瑠美子
句は裸選者にすべて晒してる

尼崎市 市坪 武臣
川柳が僕の仮面を暴露する

三原市 笹重 耕三
川柳のようなど誉められた短詩

豊橋市 藤田 千休
全没が今日も私を貝にする

米子市 成田 雨奇
朝な朝な脱いだバジヤマで背中掻く

岡山市 永見 心咲
まあまあといいやの果て客となる

府中市 岸田 武
転んでも澄ました顔で歩きだす

佐賀県 真島久美子
白髪がなんだ僕には禿もある

黒い靴履くとたいい蹴蹴く

本当は餃子が好きと言えぬ恋
沖縄の土産家族で奪い合う

鳥取県 斉尾くにこ
沖繩へ行つたつもの日向ほこ
いいかげんなので許せるいいかげん

土佐清水市 辻内 次根
停電になったら死ぬるかも知れぬ
バッタもんばかり残った身の整理

黒石市 北山まみどり
柔軟な耳で相談受けてます
あいづちが上手で家に帰れない

鳥取市 岸本 宏章
猫ほども役に立たない人の髭
下戸なのに演歌は酒の歌が好き

豊中市 木藤こみつ
便秘の時は迷わず本屋さんへ行く
私に浮いた話が多すぎる

枚方市 海老池 洋
樹木葬もいいなと思う花の下
猛獣も子供の頃は愛らしい

京都市 榎本 宏子
悔しさをバネ オリンピックも全没も
スリムになりおしやれに足を組んでる

宝塚市 丸山 孔一
大通り迷彩色の車列行く
Jアラート落石注意とどう違う

鳥取市 山野すみれ
大丈夫地球はいつも回ってる
四六時中神に守られハメ外す

河内長野市 村上 直樹
便利さはやはりスマホか思案橋

高槻市 原 洋志
持たされたスマホがなんと迷子札

米子市 池田 美穂
遠方の孫とスマホの中で会う

枚方市 寺川 弘一
美味しい前にインスタ映えの写真撮る

下松市 有海 静枝
メモすべて預けたスマホ家で待つ

広島市 岸本 清
うっかりとスマホ忘れて自由人

岡山県 紫 しめの
へソクリも春画も入れてあるタンス

堺市 内藤 憲彦
なんでだろういつも経理に選ばれる

三田市 堀 正和
日中韓表示 入湯心得

河内長野市 山岡富美子
諦めてしまおうとおばあさんになる

宝塚市 岸田 万彩
反対はマスクをとって言いたまえ

奈良市 尾畑なを江
おおかたは扇動されて恵方巻

鳥取市 上山 一平
ストープを囲む下着が攻めてくる

岡山県 田中 恵
着服れてよいしょこらしよと言うダルマ

鯛釣つてくると言うから火をおこす
大阪市 山田 耕治

エプロンが粉まみれです息子です
大阪市 榎本日の出

コンビニが喫茶店まで兼ねてきた
大阪市 田浦 實

少人数の会議するならファミレスで
神戸市 能勢 利子

鰯の生け簀のイワシのように生きている
堺市 加島 由一

後悔は食はずき喋りすぎた時
大阪市 古今堂蕉子

福引のティッシュを溜めてカゼを引く
豊中市 水野 黒兎

外出の度にハンカチ失くして
大阪市 榎本 舞夢

60を過ぎててもご飯すら炊けず
松江市 石橋 芳山

気合いで着る昔似合ったお気に入り
奈良市 大久保眞澄

情けなや脚立ごときにびびってる
四条畷市 吉岡 修

仏壇に涙もこぼし愚痴も言う
倉吉市 宮田 風露

かくれんは隠れたままじゃ日が暮れる
島根県 原 徳利

長生きをしそう老人会のボス
樺原市 居谷真理子

げんこつに愛もあつたよ昭和の師
橋本市 石田 隆彦

ミシン踏む音で育つた昭和の子
和歌山市 上田 紀子

広大な屋敷を捨てて施設入り
堺市 奥 時雄

美しい方のお咳は品がある
大阪市 柴本ばつは

下り坂 頼りになるは金の杖
今治市 渡邊伊津志

元気が取柄梅干しだけの常備薬
藤井寺市 太田扶美代

疑って飲みつづけてる常備薬
岡山市 丹下 凱夫

あとがきのほろほろと鳴るオルゴール
青森市 守田 啓子

退屈な招き猫だな電池切れ
青森県 松山 芳生

おじいさんやねんからとおじいさんに云う
大阪市 谷口 義

口ずさむ孫の歌声意味不明
鳥取市 谷口雄太郎

こつそりとスキップ試すまだいける
岡山市 藤成 操江

味噌ラーメン食べたくなって雨模様
海南市 小谷 小雪

七福神恵比須のほかは異邦人
三田市 北野 哲男

古いとは言わずクラシカルと言おう
和歌山市 武本 碧

金持ちの指の先まで温そうだ
鳥取市 前田 楓花

は五百羅漢に見当たらず
富田林市 山野 寿之

事業計画倒産すると書いてない
東かがわ市 川崎ひかり

奄つてもむしつても悪が蔓延る
三原市 鴨田 昭紀

信号が走れと膝に無理を言う
箕面市 中山 春代

いい加減生きた仕打ちの医者通い
横浜市 菊地 政勝

回復期やつと通院出来ました
香芝市 大内 朝子

整骨院へ行く日は下着から換える
堺市 矢倉 五月

ばあちゃんが垢じゃ死なんと風呂拒む
堺市 梅木 澄空

背を丸め律儀に影がついてくる
奈良県 渡辺 富子

妻の辞書ゴメンの文字が見当たらず
高槻市 片山かずお

もう一度トイレ済ませてから秤
神戸市 松井 文香

墓参りしつかりせいと励まされ
宝塚市 太田としお

雪しきり熱燗二本追加する
弘前市 稲見 則彦

雪見酒新酒出番を待っている
鳥取市 岸本 孝子

大雪だ雪割りにして飲んでやろ
三田市 村田 博

立春の新酒亡夫と春の酔い
三田市 尾崎 一子

遠吠えの負け犬ばかり寄る飲み屋
奈良市 米田 恭昌

ビットコインどうすりゃいいの縄のれん
西宮市 緒方美津子

かるかんで芋焼酎を飲む至福
羽曳野市 吉村久仁雄

ほろりする古賀メロディーで手酌する
八尾市 山根 妙子

羊水の中でくつろぐ独り酒
鳥取県 門村 幸子

ときめきが乾かぬように大ジョッキ
河内長野市 辻村 ヒロ

サムライのくせに三本目のワイン
沖繩県 森山 文切

タイガースだけが命の酔っ払い
神戸市 細川 花門

旨そうに食べて飲んでる吉田類
大洲市 中居 善信

奢られた酒に仕事をさせられる
寝屋川市 伊達 郁夫

百までも晩酌出来るなら生きる
香南市 桑名 孝雄

休肝日決めたとたん絶不調
大阪市 坂 裕之

結局は冷や一口を飲んで寝る
堺市 澤井 敏治

酒やめたけれど好きです酒の席
八尾市 宮崎シマ子

干し大根になった足にも芯がある
塩竈市 木田比呂朗

ファスナーを同じ人から注意され
大阪府 米澤 俣子

美しい景色見ぬまま足の裏
松山市 栗田 忠士

名曲を流すと豚もよく育つ
大阪市 大川 桃花

母譲りの性格苦労する息子
藤井寺市 鈴木いさお

ウォッシュレット無い民宿は泊まらない
大阪市 内田志津子

七〇〇歩風とノルマが背中押す
奈良市 辻内げんえい

妻も古稀さすがの鬼もまるくなる
札幌市 三浦 強一

気が付けば教えて米寿トホホホ
寝屋川市 富山ルイ子

生きていてよかった幸せな米寿
生きている

外零度ライブ会場汗流す
玉野市 片岡 富子

赤ちゃんのハイハイまるで掃除ロボ
明石市 桃谷 和郎

チンをして冷めた二人を温める
紀の川市 宇野 幹子

大風に平和と印ほこらしげ
枚方市 山口弘委智

聞き役に徹する事は難しい
西子市 黒田 茂代

遂に古稀がぜん張り切る保険証
男鹿市 伊藤のぶよし

エンディングノート書けずに立ち寝させ
沖繩県 禰 モモト

ジョージアを身近にさせた栃ノ心
大阪府 平賀 国和

横になりモーグル親たら肩凝った
鳥取市 田中 天翔

家に来る隣のネコは認知症
加西市 金川 宣子

セールスを断る方の背が丸い
豊橋市 高柳 閑雲

辛さ知らぬまま雪国に憧れる
和歌山市 坂部紀久子

貸金庫の隅で静かに眠る骨
堺市 遠山 唯教

死の哲学学び今をば楽しまん
大阪市 笠嶋 惠美

英語 de Senryu ⑦⑥

麻生路郎句集 『旅 人』

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

敬遠をされて 一人で飲みに行く

*Avoiding others
I drink out
alone*

けろりんかんとして 代議士嘘が云え

*A Diet member
tells a lie
carelessly*

avoid 意識して避ける *other* 他人 *dring out* 酒を飲みに出かける
Diet member 国会議員 *tell a lie* 嘘をつく *carelessly* ぞんざいにも、無頓着に

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句①⑥ 多言語で発表するポーランドの女性
イレナ・イリス・シエフチク (Irena Iris Szewczyk)

イレナさんはヨーロッパの多くの人がいくつもの言語に通じてるように、俳句のブログを英語、フランス語、ハンガリー語、ポーランド語で開いています。ヨーロッパの地続きの地形から見れば、多言語を習得するのは日本人が考えるより容易で、また歴史的に自然に身につく環境であるといえます。彼女の俳句や写真俳画はポーランド内外で出版されていて、日本の俳句コンテストにおいて受賞もしています。cherry trees and willows『桜と柳』からイレナさんの作品を引いてみましょう。日常の暮らしを繊細に描写する作品は魅力的です。日本語は『葛』俳句の協力、最後の作品は吉村訳です。

trying a ponytail/ on new year's day/ the smiling face

(初髪を結うてもらうてにこにこと)

a frog/ the prince in my garden/ incognito

(若蛙わが庭の王子の仮り姿)

this year again/ autumn arrived-on my hand/ a little brown spot

(また今年秋来て手にも染み一つ)

migrating birds/ my husband bids them goodbye/ as to sons

(鳥渡る子に別れたるとき夫)

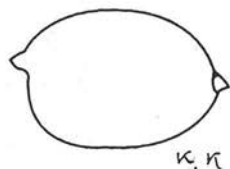
共選欄

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 367名)



「浮く」山口光久選

浮いた灰汁まめにすくつて世を渡る 河内長野市 木見谷孝代
輪の中で浮いているのが私です 寝屋川市 籠島 恵子
ひとり去りふたり去りして浮いてきた 白河市 鈴木たけし
浮雲のひとつが僕に見えてくる 鳥取市 岸本 宏章
まだおんな齒の浮く世辞に酔ってゆく 高槻市 富田 保子
月食の赤銅色が宙に浮く 羽曳野市 藤原 大子
フルムーン北と南で宙に浮く 塩竈市 木田比呂朗
浮く為に力溜めてる水中花 神戸市 富永 恭子
ほほえみの中に浮かんでいる打算 高槻市 島田千鶴子
水に浮く程の嘘から身が沈む 宝塚市 丸山 孔一
浮かれてるあの娘もきつと淋しがり 西宮市 秋元 てる
ストローで吸い取る浮いている微罪 松江市 石橋 芳山
頑固過ぎ浮いていますよお父さん 八王子市 川名 洋子
浮いているだけで幸せ終い風呂 尾崎市 清水久美子
藁一本友の情けが身に染みる 弘前市 稲見 則彦

「浮く」斉尾くにこ選

春うらら浮き立つピンク・キャミソール 岡山市 永見 美咲
普段着でちよつと気後れの会合 大阪市 宇都満知子
オーイ雲私を月に連れてって 大阪市 田中ゆみ子
出張費浮かせて苦い発泡酒 大坂市 井丸 昌紀
首が浮いて眠る羅漢の露天風呂 富田林市 山野 寿之
積もる雪思ひ浮かべて砂丘芋 八尾市 山根 妙子
浮くように雪像目がけ走る子ら 札幌市 斉藤 宏子
落ち込んだ心を浮かす庭いじり 豊橋市 西郷紀美代
流水を溶かす北上するさくら 青森県 松山 芳生
浮かれてるあの娘もきつと淋しがり 西宮市 秋元 てる
お姫様抱っこしてよね介護ロボ 三田市 池田 美穂
団体の行動嫌なはぐれ雲 三田市 谷口 修平
ドーナツが浮き輪に見える海育ち 名古屋市 富田 末男
ばあちゃんの派手な水着が浮くプール 三田市 尾崎 一子
水に浮く程の嘘から身が沈む 宝塚市 丸山 孔一

若作りしても老斑浮き上がる
 少しだけ浮いて最終バスが行く
 上澄みをそっと掬っているところ
 あきらめを夜空へそっと浮かばせる
 アドバールンひとりで浮いているつもり
 浮き沈みしながら石はまるくなる
 うたたねの頬に年輪浮いている
 人間が宇宙を汚す浮遊物
 リストラの波で浮き輪を奪い合う
 八十の浮いた話で笑わせる
 柚子風呂に親子の首が浮いている
 今日の愚痴猪口に浮かべて一気飲み
 空想の自由席ですばかり浮く
 新生児無心の笑みに皆浮かれ
 空っぽの証拠わたしが浮いている
 買い与え爺が浮いている雛祭り
 カタカナ語多用する声浮いている
 浮かぬよう沈まぬように微調整
 看取る手も看取られる手も皺が浮く

秀句

堺市	坂上 淳司
大阪市	平井美智子
芦屋市	黒田 能子
大阪市	小野 雅美
米子市	竹村紀の治
鳥取市	倉益 一瑤
和歌山市	福井 葉摘
和歌山市	磯部 義雄
茨木市	島田 誠一
大阪市	川端 一步
三田市	北野 哲男
弘前市	福士 慕情
大阪市	若本 安代
札幌市	斉藤 宏子
佐賀県	真島久美子
堺市	矢倉 五月
弘前市	高瀬 霜石
東京都	川本真理子
鳥根県	伊藤 寿美
札幌市	小沢 淳
下松市	有海 静枝
和歌山市	古久保和子

地球儀が重い命を乗せて浮く
 浮く地球は憂いをつめて回り行く
 底辺にまでは浮き輪が届かない
 少しだけ浮いて最終バスが行く
 これが一番楽だとクラゲ波の上
 豪華船竜宮城が浮かんでる
 潜水艦星が見たくて浮上する
 看取る手も看取られる手も皺が浮く
 人体の浮遊装置が要る介護
 少子化に先祖の位牌浮いている
 アドバールンひとりで浮いているつもり
 浮き雲の視野は360度
 笹舟や国民学校一年生
 アワビ手に海女さんの浮く春の海
 汁椀に春の緑が浮いている
 浮上するときは独りになったとき
 古池に正統派だけ浮いている
 暗闇に浮かぶ虚像は僕だった
 浮いているだけで仕事をしるる雲

秀句

寝屋川市	伊達 郁夫
西宮市	福田 正彦
三原市	鴨田 昭紀
大阪市	平井美智子
高槻市	片山かずお
貝塚市	吉道あかね
尼崎市	藤井 宏造
鳥根県	伊藤 寿美
池田市	太田 省三
札幌市	小沢 淳
米子市	竹村紀の治
富田林市	中村 恵
土佐清水市	辻内 次根
豊中市	水野 黒兎
橿原市	居谷真理子
佐賀県	真島久美子
沖縄県	森山 文切
枚方市	藤村 亜成
貝塚市	石田ひろ子
堺市	坂上 淳司
松江市	石橋 芳山
桜井市	安土 理恵

「無言」

(投句 223名)

石田隆彦選



オレに話しかけるなカニのフルコース
逢いたいと言えないままに電話切る
だんだんと無言になって反抗期
おばちゃんも口にはチャックの座禪中
圧力は無言の方が効いてくる
父さんが受話器を取るとツーツーツ
言葉にはできず弔意のただお辞儀
饒舌と寡黙が向いあう無言
引きつけるパントマイムに見る言葉
淋しいか無言電話の向う側
無言にも馴れて辞典と仲がよい
末席で無言のままの反骨士
無言には無言で返す持久戦
何かある迷わず妻の無言の矢
痴話喧嘩無言になって離婚劇
もう少し賢くなれば喋ります
チャックした口がムズムズして困る
打開策尽きて沈黙重くなる
震災を無言のこけし語り継ぐ
沈黙は反対ですの意思表示

河内長野市 梶原 弘光
大阪市 小野 雅美
豊橋市 小松くみ子
加西市 山端なつみ
上尾市 中村 伸子
高槻市 初代 正彦
下松市 有海 静枝
奈良市 宇賀 史郎
大阪市 宇都満知子
和泉市 横山 捷也
倉吉市 山中 康子
和歌山市 武本 碧
堺市 内藤 憲彦
河内長野市 藤塚 克三
鳥取市 竹信 照彦
河内長野市 原熊知津子
大山市 金子美千代
箕面市 出口セツ子
米子市 中原 章子
八王子市 川名 洋子

許し乞う無言の母の慈悲の瞳へ
悪夢からさめて無言で割るたまご
縦か横黙って首を振った父
喝采の日から無口が溶けてゆく
気に入らぬことでも無言にはならぬ
医師がまた黙り込んでるレントゲン
唇を噛んで無言の意志表示
信念の無言誤解とデマを生む
冷凍庫の無言春まで眠らせる
リアクション椅子は冷たくなるばかり
深呼吸して深呼吸して粘る
信念を貫く無言だってある
佳句
幸せを夢見る汗のただ無言
百花繚乱花は無言で四季を告げ
叱るほどの親切はない苦笑い
雄弁に勝る無言の手強い目
逆転へ必死無言の面構え
人
爆発か無言か投げられた小石
地
バンザイで送り無言で骨帰る
天
感動の極み無言というポーズ
軸
返事をしそうでない友の遺影

堺市 矢倉 五月
青森県 松山 芳生
弘前市 稲見 則彦
紀の川市 宇野 幹子
鳥取県 西谷 悦子
高槻市 富田 美義
神戸市 山口 光久
大阪市 樋口 眞
大洲市 花岡 順子
佐賀県 真島久美子
弘前市 高瀬 霜石
香芝市 大内 朝子
池田市 上山 堅坊
伊丹市 延寿庵野鶴
橿原市 居谷真理子
大阪市 古今堂蕉子
羽曳野市 徳山みつこ
鳥取市 福西 茶子
高槻市 富田 保子
男鹿市 伊藤のぶよし

「リセット」

(投句 221名)

宮 尾 み の り 選



淋しくてリセットボタンもてあそぶ
過去のこと水に流して再生紙
あの頃の自分見詰めに帰省する
リセットは早目の受診だからこそ
落ち椿水に浮かべて今一度
リセットがきかぬ海馬も足腰も
謝罪ショーあれでリセットしたつもり
時代が変わりリセットを拒否される
リセットをしたら私でなくなつた
リセットしても心に残る傷がある
リセットに失敗旗の色変える
同窓会寡婦達やたら元氣良い
この辺でリセット大人の恋だもの
リセットの効かぬ齢にある未練
リセットのきかぬ噂が走り出す
二度叩きリセット開始古時計
リセットを繰り返してる遺言書
古くなりリセットボタン動かない
訳あって君をリセットする鉤
なんとまあリセットをしてこれですか

藤井寺市	太田扶美代	和歌山市	武本 碧	高槻市	松岡 篤	米子市	池田 美穂	吹田市	須磨 活恵	西子市	黒田 茂代	唐津市	仁部 四郎	河内長野市	原熊知津子	犬山市	金子美千代	大阪市	森 廣子	松原市	森松まつお	三田市	福田 好文	横浜市	川島 良子	東大阪市	佐々木満作	鳥取市	山下 節子	高槻市	島田千鶴子	豊中市	松尾美智代	八王子市	川名 洋子	奈良県	中堀 優	八尾市	村上ミツ子
------	-------	------	------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-------	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	------	-----	-------

リセットの為に金を貯めている
失言のリセットボタンありません
リセットもままにならずによく転ぶ
改名に勝負を賭ける演歌歌手
リハビリが終り明日へ軽い靴
リセットは汚れを知らぬ頃がいい
タイムマシン戻った過去のつまらなさ
春爛漫リセットボタンボンと押す
リセットの出来ない過去へほぞを噛む
間違つてリセットボタン押した悔い
冬ざれに耐えた木の芽が吹き上がる
リセットをしたい絆に絡む情

佳 句

ロボットに命令されるやり直し
削除キー指一本のさようなら
また明日へリセットすると日が沈む
糊しろの過信リセット繰り返す
フクシマをリセット出来ぬ放射能

人

しがらみを捨ててリセット風の中

地

負けは負け眠らなければ明日は来ぬ

天

振り出しに戻るとどうってことはない

軸

リセットへ覚悟の程は口にせず

佐賀県	真島久美子	倉吉市	大羽 雄大	和歌山市	上田 紀子	河内長野市	梶原 弘光	西宮市	福島 弘子	大洲市	中居 善信	豊橋市	小松くみ子	今治市	渡邊伊津志	松山市	栗田 忠士	上尾市	中村 伸子	富田林市	関 よしみ	東大阪市	北村 賢子	犬山市	関本かつ子	下松市	有海 静枝	鳥取市	永原 昌鼓	男鹿市	伊藤のぶよし	大阪市	若本 安代	倉吉市	岡崎美知江	三田市	北野 哲男	弘前市	高瀬 霜石
-----	-------	-----	-------	------	-------	-------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	--------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------

初しよ教室

題一 囲む

居谷 真理子

季節がら鍋を囲む句が多数寄せられました。同じ光景を同じ表現で詠めば、安定はしても感動は薄いです。目の付けどころがユニーク、着眼は同じでも表現が個性的。どこかで自分らしさを出したいものですが、独り善がりも避けたいし。いやはや難しいものですね。推せん句の不二夫さんの作品をご覧ください。鍋料理の特長を的確にまとめ、共感を呼ぶ句に仕立てられました。

(原は原句 参は参考句)

原 たき火だよみんな囲みあたろうよ (山久 子)
作者のお人柄でしょう、あたたかい句です。
五七五に整えて

参 たき火だよみんなおいでよあたろうよ
原 取り囲む金魚怯える可愛い目 (みちを)
参 取り囲む目に怯えてる金魚鉢

原 安値見て妻と囲んだ冬の鍋 (和之)

参 特売の野菜で妻と小さい鍋

原 クラス会老師を囲み涙声

参 老いた師を囲めば涙声になる

原 好きな歌ハートで囲みリクエスト 美枝子

「ハートで囲み」がいいですね、具体的な曲名を上げた方がイキイキします。

参 愛の賛歌ハートで囲みリクエスト

原 雨漏りでバケツ囲こんで音楽だ (ミヨノ)

参 雨漏りのバケツ囲んで聞くリズム

原 四の五のと明かり囲んで血がたぎる (高道 子)

上五と下五が不釣り合いでは？

参 四の五のと明かり囲んで落ちもなく

参 激論の明かり囲んで血がたぎる

原 パチパチと炎を囲むどんどど焼き (三樹夫)

参 ご近所と炎を囲むどんどど焼き

原 ちやぶ台ですといとん囲んだ昭和の日 (斎宏 子)

参 すいとんとんちやぶ台囲んだのは昭和

原 笑み溢れ記者に囲まれメダリスト ひでお

参 記者団の芯にメダリストの笑顔

原 第一子がお顔かおに囲まれる (貝正 子)

参 生まれ出て笑顔笑顔に囲まれる

原 婆ちゃんも曾孫と一しよにカルタ取り (御節 子)

参 曾孫らと頭並べるカルタ取り

原 病人を囲み葬儀の話を (大) 安子

えげつないなあと大阪弁で言われそうで

す。気丈な病人を主人公にしました。

参 囲ませて葬儀はこうと言に残す

原 囲まれて友は大勢彼居ない (東) 美智子

参 恋人はいないが友に囲まれる

原 多ぜいの人に囲まれ観るピカソ (こみつ)

参 解る人解らぬ人と観るピカソ

原 兄弟に囲まれ育つ遅しさ (紀) 美代

参 兄がいる弟もいる遅しさ

原 囲まれて雪洞の中登校す

参 登校の列行く雪の壁の中

原 ぐるり山山から四季を感じとる (剛)

「囲む」を使わず確かな情景描写です

参 ぐるり山山から四季がやって来る

原 集う会老若男女笑顔囲む (紀) 美恵

参 老若の笑顔で囲む今日の会

原 雪囲いされて元気な寒牡丹 (徳) 利

参 雪囲いされて微笑む寒牡丹

原 子供らを敢えて囲いの外に出す

このままでも良いのです (美) 穂

参 子供らに敢えて囲いの外の風

原 どんとさん囲む笑顔は御神酒色	温 子	参 奈良公園立派な角は囲まれる	原 一人居の退去の跡地囲いなく	まさる
参 どんとさん囲めば御神酒よう回る		参 鹿せんべい買えばとたんに囲まれる	参 一人居が去って囲いもない更地	
原 不倫説囲むマイクは遠慮なし	厚 子	原 赤ちゃんを囲むしあわせ希望の目(富恵子)	原 スマホに囲まれそつとケイタイ引つ込める	澄 空
参 不倫かと囲むマイクは遠慮なし		参 赤ちゃんを囲む希望の目が囲む	参 皆スマホそつとケイタイ引つ込める	
原 囲む鍋湯気に本音が沁みて出る	真	原 雪囲う愛でる牡丹に嫉妬する	原 沢山の物に価値観見失う	(高)弥 生
参 囲む鍋湯気に本音が揺れている		参 雪囲いされた牡丹に嫉妬する	参 沢山の物に価値観見失う	
原 気短かな姉弟なれど丸い鍋	(門)幸 子	原 離さない愛という名の包囲網	原 頂いた野菜囲って冬の鍋	風 露
参 気短な二人を論す丸い鍋		「囲む」の題に「包囲網」はこの句のみ。	参 頂いた野菜囲ってまたも鍋	
原 善人に囲まれてから増す不安	(小)雅 美	参 逃さない愛という名の包囲網	原 盤面に身を乗り出して睨む棋士	一 彌
参 善人の中でふくれていく不安		原 勝負超え雀卓囲む老いの楽	情景描写からもう一歩踏み込んで	
原 女性に囲まれて昔をしゃべらされ	亜希子	参 勝ち負けは言わず雀卓囲む仲	参 盤面を棋士の気迫がつつま込む	
参 おばちゃんに囲まれ過去を喋らされ		原 テーブルを囲めず寂し核家族	【佳 句】	
原 油断ならない国ばかり領土減る	孚 彦	参 テーブルを囲みたいけど核家族	スマホより周囲を見てよそのキミ	のぞみ
参 油断ならない隣の国が取る領土		原 ちゃぶ台を囲んだ昭和遠くなる	トンドさん囲み書初め天に追う	雄 大
原 遠巻きに見るに限るは火事喧嘩	なつみ	中村草田男(明治は遠くなりけり)をふ	司馬さんの本に囲まれ菜の花忌	俊 雄
参 遠巻きに見ることにする火事喧嘩		参 ちゃぶ台も昭和も遠くなりけり	反戦の熱気が囲む基地フェンス	つばき
原 丸い火鉢囲み団らん昭和の夜	福貴子	参 ちゃぶ台も昭和も遠くなりけり	笑う母囲んでみんな子にかえる	くみ子
参 丸火鉢に子の手皸の手昭和の夜		原 願わくば花にうずもれ尊厳死	救急車遠巻きに見るその一人	里 子
原 雰囲気につつまれて咲く赤いバラ	昭 枝	原 師を囲み生きて来た道発表会	【今月の推せん句】	
参 雰囲気なんでしょう		参 師を囲みそれぞれ生きた道語る	食事会囲んだ鍋に愚痴も入れ	若松由紀子
原 奈良公園人気者です囲まれる	一 雄	原 食卓を囲めばすべて丸くなれ	善人に囲まれて善人になる	山本ふみ子
参 囲まれたのは鹿か、人か、		参 食卓を囲めば丸くなれました	鍋囲む湯気だけでない温かさ	磯野不二夫

川柳塔鑑賞

同人吟 柿花和夫

— 3月号から

ときめいた過去と肩組み飲んでいる

坂本 蜂朗

齢を重ね心に少しゆとりが出来た今は
苦しくも楽しかった過去たちを肴に、独
り酒。肩の組める過去は作者の永遠の財
産です。

ライバルも同じサブリを飲んでいた

岸本 宏章

人間の弱みを巧みにしていくるサブリ
メントの広告のなんと多いこと。鯛の頭
も信心からなどと笑って済ませない齡と
なりました。悔しいけれど。

長い廊下もう私しか歩かない

森山 文切

長い廊下は人生の道程の譬え。一緒に
歩んでいた友人や身内さえも各々の道を
歩き出した。所詮は自分の道を独りで歩
くしか無いのです。

そろそろかそろそろだろうなあ 訃報

高瀬 霜石

深夜、早朝の電話で覚悟してはいたが
友人、身内の逝去を知らされると力が抜
けてしまう。だれも避けることの出来な

いこととは解っているのですが、自分な
りの死の哲学を考えてしまおうのです。

手ぶらで行くあの世レンタル出来まスカ

谷口 義

いよいよあの世への出発。何を持って
行く？三途の川の渡し賃、当座の衣類、
考えると切りがない。レンタルに頼るこ
とにするか。

常識を非常識だと言う世間

上田 紀子

角界の常識、教育界の常識、政治家の
常識、各業界の常識を世間から見れば非
常識の極み。然れば問う。世間の常識と
は何か。

湯豆腐にこころの冷えを覗かれる

伊藤 藤のおよし

ここは鋤焼きや鮫鯉鍋ではぎやか過
ぎて落ち着かぬ。冷えたころには京の
湯豆腐がびったり。熱燗を添えれば効果
てきめん。たとえフラウがいなくとも。

デイサービスで母が無心に戯れる

鴨田 昭紀

案ずるより産むが易い、と言えは言い

過ぎてしようか。母上様の老いは穏やか
に進行中。ショートステイも視野に入り
ますね。とにかく共倒れは避けるべきで
す。私、十年間、父母の介護を経験いた
しました。

今までと違う世界で生きている

榎本 舞夢

スマホやAIの世の中を嘆かずに、作
者は加齢と共に変わりゆく日々のことを冷
静に受け止めて、好奇心をエネルギーに
変えておられます。見習わなくては。

これは夢夢の中でもそう思う

宮尾 みのり

夢の中で夢を見ている。だれでも経験
することだ。今生きているのも夢の中で
はないかしら。フロイトの「夢判断」を
お勧めいたします。

ハンドルが失くなるのかなAI化

杉野 羅天

車が完全に自動運転化されるまで運転免
許の返納を待つことにしました。車のこと
はさて置き、国のハンドルはしっかりと握っ
て安全運転でお願いしたいものです。

うたた寝の枕にびたり広辞苑

佐藤 古拙

広辞苑にタオルでも巻けば立派な枕。
記憶力も蘇ればいいのですが。電子辞書
は役に立ちません。

地吹雪ツアー葦は笑つて見てるだけ

稲見 則彦

五六豪雪以来の大雪。雪は豊作の前兆などと言つてはおれません。まして、地吹雪ツアーなんて不届き千万。雪掻きツアーに変えるべきです。

思い切り新米頬張る玉子かけ

高橋 洋子

中八も気にならぬ秀句です。熱熱の新米にふつくらした新鮮な地鳥の玉子。醬油はやはり濃口に限ります。しかしいつからでしょう。玉子かけご飯が料理の仲間に入つたのは。板前さんが泣いてます。

朝一番鏡と笑顔かわします

山田 葉子

鏡と睨めっこ。昨夜の反省を込めて。済んだことは全て過去。これでは今日のスタートから遅れをとります。出来れば新しい今日の始まりを笑顔でスタートしたいのですが、これがなかなか難しい。

酒二合ここから私おもしろい

岩崎 玲子

ほろ酔いの自分を客観視できる間はまだ酔ってません。人並に少し饒舌になっているかも。三合飲んだ作者にお会いしたいものです。

自家製のレモン八つもできました

江島谷 勝弘

八つが多いのか少ないのか。八つもと詠む作者には満足できる収穫でしょう。半年がかりで実つたレモン。まずはレモンの耐ハイか。いや上品にレモンティー。ちなみにわが家では二つでした。

かくれんぼみんな帰つて冬となる

大治 重信

近所の子供や孫とかくれんぼ。みんな無事に帰つてひと安心。しばし冬の静寂を楽しむ作者。だれも捜しに來ない大人のかくれんぼでなくて良かった。

知らぬ振り出来ぬ見てたし聞いてたし

古今堂 蕉子

夫のスマホ、子供の部屋の引き出し、お気持はわかりますが、決して再生したり覗いてはなりません。ぐっとこらえて最低限のルールを守りましょう。お互いの幸せのために。

ぼつかりと空いた穴から明日を見る

坂 裕之

努力は天才に勝つといえど努力が必ず報われるとは限らない憂き世。しかし努力は続ける価値があると信じたい。努力によって感性を磨き一条の光に気づくこともあるでしょうから。

言いたくて言えぬ本音を句にあかす

寺井 弘子

川柳は人間陶冶の手段であるならば、

本音を句にすることによって、自己実現が可能になります。他人に迷惑を掛けぬ範囲において。

掘り炬燵やっぱり母が先に立つ

若本 安代

夕食の片付けもやつと終り、母も炬燵に。炬燵の上には蜜柑と熱いお茶。突然のピンポンに電話。だれも動かない。対応は母の役目と決め込んでいる。昔の母は偉かった。

欠礼の予告賀状が増える老い

坂上 淳司

来年から賀状は出しませんとの賀状への添え書き。先を越されたと思いつつ、住所録を修正。喪中のハガキでなくて良かった。

グローバルなどと老人会の席

横山 捷也

趣味の会や老人会では過去の職業や社会的ステータスを問わないのが暗黙のルール。老人会がグローバルになるのは結構なことですが。

ドナーにもなれぬ臓器に酒を注ぐ

太田 昭

日本ではドナー登録の数がヨーロッパ諸国、韓国、中国より少ないそうです。脳死判定の厳しさにもよること。ドナー登録の手続きは簡単だそうです。

水煙抄鑑賞

—3月号から

吉岡 修

年ごとに夢を小皿に移し替え

伊藤 良一

新しい夢が溢れそうで、小皿に取り分けているのか、夢が終ったので大きい皿より小皿でいいのか気になって面白い。願わくば年ごとに新しい夢を見たい。気合いを掛けられました。

隙間風防いでくれる子が居ない

花岡 順子

カラオケでよく歌った「隙間風」を思い出します。…いつかはほほえみに巡り合える。久し振りに行ってみたいです。

こんなにも子どもいたのか旧校舎

鈴木 たけし

私の住む市でも小学校の統廃合が実施されます。数が減れば質が上がってほしいもの。世の中の大変化が少しずつ迫っていると感じます。

今の世を褒める一句が浮かばない

畑中 節子

今日の鑑賞句にも「世の中心配句」が多い。川柳人としては当然かも知れぬが、「いいとこ見つけて」句になるのが少ないのは気になるところだ。

流れ着く人影もない難破船

森 廣子

冬の海まるで特攻朽ちた船

佐藤 まき

北の方から日本海へと流れつく木造老朽船。死体が遺されている。こんな悲惨な句が二句もあった。悲しいことですね。

日本製白い目で見る人増やす

大和 峯二

一流企業と見ていたが不祥事が相次ぐ。製品検査を省略したり、ごま化したり。国産を信用し誇りに思ってたが情けない産業界だ。しっかり立て直してもらいたい。柳界からの警告である。

OB会いまだ序列があるのなり

岸田 武

取れた肩書の跡が消えぬ。先輩後輩の関係もある。どこも一緒やなあ。やむをえん。

一二三の笑顔とつてもチャーミング

前田 紀雄

棋士藤井六段の活躍にも欠かせない一二三九段。鋭い勝負の世界にこの存在はほほえましい。棋界の川柳みたいでいい。

手の中でマイクもじもじ出ぬ言葉

飯野 菖子

突然のご指名で…と立ったものの、頭の中は焦りの最中。席題に追われている時に似ている。コツがあれば知りたいものです。

我が川柳歌で言ったら音痴かも

中井 虎雄

自分の句が柳誌でも拡散されてゆく、名句名曲と読まれたり音痴と見られていくことだろう。面白いことだ。

宝くじほどの期待もない施策

神野 千恵子

はずれてもはずれても買い続けているジャンボくじ。なるほど施策も同じだ。

平成の残る時間に加速つく

玄 番 美恵子

天皇さまの退位も決まり平成が終る。新年号が気になるが次の年号も加えて四元号下を生きたこと、喜びとしたい。

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

乳母車 いのち育てしものなつかし
土の中 土の埴輪が埋められ
墓があり 急に土あたたかくなる
滝の白 雨は斜めに降りかわり
灯籠三千 祈願三千 尽くや神
静かな灯三千集ってしずかなり
大いなる硝子の如き寒気あり
火の粉降る闇 豊頬の奈良乙女
走る火の行きつくところ屋根の反り
恋を待つ人座り椅子充実す
真心をあげて淋しくなりました
待つ人が来て愛犬を放ちやる
税務署出て万の毛穴を押しひろげ
春愁の 無より淋しき無限大

笛吹き童子 恋ならなくに ならなくに
仏像を恋うるがごとき恋となり
ホームバー 子なき夫婦が赤を着て
秋吉台 石の饒舌 雲の黙
朱の鳥居 愛恋道の入口か
寂まくと 伎芸天女に指紋なし
師はあらず 文学小径埒もなや
尾道や 今見下ろせし船に乗る
五月の雨 尾道生駒似たるあり
師を胸に置く 船と船すれ違い
盲目の亜鈍氏が笑む 師を話し
耕耘機 色異なれど音同じ
掃苔の隣の墓に帽をのせ
てんとう虫 ここにも小さい輪島塗
銭湯に隣す 輪島映画館
鬼あざみ 能登曇りてふ曇りあり

『麻生路郎読本』余滴(45)

「川柳職業人宣言」前後⑤

葉 原 道 夫

路郎は、昭和11年8月号「川柳雑誌」で「川柳職業人宣言」を発表したが、突然思い立ったことではなかった（「川柳職業人宣言」前後①参照）。大正13年2月に「川柳雑誌」を刊行して以来、路郎は川柳の社会化に向けて邁進した。

昭和11年2月号「三味線草」の「川柳このごろ」には、〈路郎は代議士に成つて川柳は正運動をやるのだといふ。汀柳（筆者註）増位汀柳。当時の川柳雑誌社の事務所を提供し、編集を担当していた〉を選挙長にして次回に出るか。とある。この選挙は、2月20日に行われた衆議院選挙を指す。6日後には、二・二六事件が勃発している。この選挙に路郎は出馬しなかったが、路郎は川柳の社会化に向けて国会議員になることまで考えていたことがうかがえる。

「川柳雑誌」は、同年3月号から、有保証の新聞紙法の適用のもとに掲載内容の拡大を図った。「川柳雑誌」同年2月号の「掲載内容の拡大化 有保証の新聞紙法による」を全文挙げておく。

（川柳は社會批判、人生批判に由る人間陶冶の詩であり、超穿ち、超リリツクの詩であり、形から云へば十七音字中心の短詩であるなど）と今更こ、で川柳の定義めいたことを述べようとするのではない。が、さう云つた意味のホントの人間詩を建設するために、は現在の如き無保証新聞紙法に據る法的絆縛の下に刊行してゐる柳誌では萬全を期し難い。

ホントの川柳は詩や短歌の如く純正リリツクの範圍を出なかつたり、俳句の如く、隱遁的叙事詩であつたりしてはいけない。人生きた社會を知らなければならぬ。人の何物たるかを知らなければならぬ。人間自らの別扶（筆者註「別扶」の誤りか）に忠實でなければならぬ。そのためには凡俗濁の中に投じて眞の人間を琢（たく）上げねばならぬ。眞の川柳は人間陶冶の完成にある。これが資料の提供並びに體驗の發表は何んとしても有保証の新聞紙法による機關誌た

らざれば不可能である。

十三年以前逸早く川柳の社會化を提唱して起つた本誌は既に創刊當初に於て、この事を痛感してゐたのであるが、社内外の事情に於て容さざるものがあり、隱忍これを久しくしてゐたのであつたが、遂にその時期が到來した。

來るべき三月一日發行の本誌より愈々掲載内容の擴大を約束されること、なり、時事報道の自由を有し、我等の生活を直接支配する政治經濟、さては人生享樂の演藝映畫の方面にまで論及する權限を有するに至つたのである。

斯く云へばとて直ちに柳誌變じて政治經濟誌となすかの如く解するは早計である。名匠の寶刀は猥りに抜くべきでない。

特種文藝誌としての本誌が如何にこの特權を利用するかは今後の編輯振りに期待されたいのである。

路郎は、川柳は俳句や短歌とは異なり、社會の中に身を投じて自らを抉り出さなければならぬといふ。そのためには、社會の事象を掲載できる有保証の雑誌でなければならぬ。本文中の「社内外の事情に於て容さざるものがあり」とは、その保証金

の確保が困難だったのではない。

一色哲八の「切り取られた『川柳雑誌』昭和十八年八月号」(『川柳塔』平成24年6月号掲載)に、(路郎が求められた保証金は明治の世であれば千円であったことになる。明治末年の千円は現在の三百万円以上の価値があり、昭和十一年当時では、千円がそのままであっても実質百五十万円程度の価値はあり、物価上昇により改正され値上げされた可能性もある。)とあり、経済的な事情により、この時まで有保証に踏み出せなかったのだろう。

「川柳雑誌」が有保証の雑誌として認可され、路郎は川柳の社会化をさらに一歩進めた。3月号では、「春寒し拾ひ手のない首二つ」と題した、自句を交えた路郎の文章が掲載されている。昭和11年1月、立憲政友会が内閣不信任案を提出したのに対し、岡田啓介首相は衆議院を解散した。選挙粛正をスローガンに選挙が行われ、立憲民政党が勝利。岡田内閣安泰かと思われたが、二・二六事件が勃発し、内閣は総辞職した。このような当時の世相を風刺した文章を掲載できるのも有保証の雑誌ならではの。

しかし、順風満帆だったわけではない。当時の「川柳雑誌」の発行日は毎月1日だったが、3月号以降、肝心の雑誌の発行が毎月遅れたのである。

「編輯の窓」は汀柳が書いていたが、3月号の「編輯の窓」では、汀柳・雨迷の後に路郎が、(本號の遅刊は汀柳君の個人的支障と小生の旬日の臥床に據る。御寛恕を乞ふ)と遅刊を詫言っている。

4月号「編輯の窓」では、汀柳が(前月は主幹の病氣や僕の私用忙殺やらで、未曾有の大遅刊をしたのは誠に申譯のない次第ですが漸次挽回に努力を致してゐますので何卒御寛恕を祈上げます。)と詫言っている。

5月号「編輯の窓」は、路郎一人で書いている。(三月号遅刊、恐縮。四月號で少しく取戻した。この分なら五月號はうまく行くだらうと思つてゐたら、更に遅刊で申譯がない。果てしなき編輯に對して擔當者汀柳君の内的支障だから、どうにも仕方がない。六月號、七月號でスツカリ取り戻したいので、目下その工作中である。今暫くおゆるしが願ひたい。)

雑誌が遅刊しただけでなく、5月は本社句会も休会している。

そして、6月号では巻頭の「社告」で、(事務所廢止/今後、社務一切を發行所に於て行ふ/一層の御後援をお願いする/大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地/發行所川柳雜誌社)と汀柳方の事務所を廢止したことを告げている。

「編輯の窓」で、路郎が次のように書いている。(▼又遅刊。今度は一週間は取戻せる筈だったが印刷所との手違ひからこの始末である。これ以上云ふべき言葉がない。今暫くお目こぼしを乞ふ。▼汀柳君の茶房「川柳」は六月十五日に蓋をあけた。従つて同君は當分多忙である。借家經營の方も既に棟上げをしたので、これ又多忙である。▼巻頭社告の通り事務所を廢止して總てを發行所で行ふことになつたので御諒承を乞ふ。「柳界展望」や「川柳書架」など何れも次號へ割愛した。これ又お有し願ひたい。)

編集を担当していた汀柳が多忙なため、汀柳方にあった事務所(大阪市天王寺區上汐町二丁目五一番地)を廢止して路郎の自宅に移したのだが、汀柳はそのことを聞かされていなかったというのだ。そんな川柳雑誌社に激震が走った。(次回に続く)



(投句211名)

温暖の差が何
だか激しすぎる
ように思え、身
体が付いていくのが大変です。



若い女性は「オシャレは我慢」とばかり、
まだまだ寒い風の中を薄着してさっそう
と歩いています。オバチャンはそうは
いきません。

周囲の目が突き刺さるようになるギリ
ギリまで、分厚いダウンコートなんか着
てガンパツているのです。

では、ナビをどうぞ。

インスタ映え狙って味は下降線

(評) 味なんて二の次三の次、見かけばっ
かりカラフルでもねえ。世の中なんだか
見せ掛けばかりに偏っていませんか。

主役より目立ちたがり屋が居る困る

(評) ピカピカの一年生よりもっとピカ

尾道市 大本 和子
横浜市 菊地 政勝

ピカのお母さんとか、入学シーズンによ
く見かけます。

あらいやだ今日プレミアム・フライデー

(評) プレミアム・フライデーを身近に
感じている人がどれくらいいるのではし
ょうか。それほど広まっていないのでは。

そのつもりその気天への梯子です

(評) 本人のやる気、負けん気によって
運は開ける、つまり、天への梯子を登っ
て行くことに繋がるのでしょうか。

お隣は空き家お向かいが夜逃げ

(評) 結局、近隣には淋しさだけが漂っ
ているのですか。隣の歯が抜けていくよ
うなこの一句、笑い事ではないのです。

医療費の三割負担重すぎる

(評) ホントにそう思います。確定申告
で計算した一年分の医療費の合計を見る
たび痛感します。

妄想が膨らんでいく袋とじ

(評) これは多分、男性なら殆どの人が
経験しているのではないのでしょうか。今
もこんな袋とじあるのかな。

ウィッグでちよつと変身してみたの

(評) 女性のおしゃれは止まるところを

知りません。ウィッグは今や帽子の代わ
りと言えそうです。

スマホから顔を上げなよ梅満開

(評) あんなに下ばかり向いていては、
季節の移ろいなどに気付くはずありませ
ん。梅も満開だということに。

UFOが迷わないよう建てる塔

(評) その存在を信じるか信じないかは
別として、こういう塔があっても夢があっ
ていいではありませんか。

嘘に嘘重ねて身動きが取れぬ

クイズ王抽斗たんと持ったはる

縁の下の力に感謝忘れまい

恐山水子地蔵へ石を積み

少年はびしと静の駒進め

詰めこんだガセネタ売りにいくところ

そのうちに独身税を取られそう

体幹がモデルウォークを決めている

何事も丸く修めて丸い顔

和泉市 横山 捷也

三原市 鴨田 昭紀

大分市 岩崎 玲子

大分市 大内 朝子

大分市 福士 慕情

大分市 山根 妙子

大分市 八木 千代

大分市 梶原 弘光

大分市 宇都満知子

大分市 木下 敏子

大分市 吹田 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

大分市 木下 敏子

松山市 栗田 忠士
お静かに只今無我になるところ

塩竈市 木田比呂朗
老春を支える預金先細る

河内長野市 大島ともこ
これが噂のB級グルメ試食どう

西宮市 亀岡 哲子
夢売りが夢売りに来た春が来た

芦屋市 黒田 能子
新刊書つぎつぎ買ってそのまんま

倉吉市 山中 康子
お団子を七つものせて軽業師

東大阪市 佐々木満作
伝統の教えおろそかには出来ぬ

高槻市 安田 忠子
落とさずに一周したら何くれる

姫路市 古川 奮水
進化した街に空屋がよく目立つ

高槻市 片山かずお
どの型にしようか迷う春帽子

河内長野市 穂口 正子
人様は勝手気ままに値踏みする

島取市 山下 凱柳
おとつと上手く乗ったらご喝采

大阪市 岩本 安代
ストレスをことごと煮込むおでん鍋

佐賀市 真島久美子
言の葉は無縁仏になったとさ

米子市 後藤 宏之
おもしろい人だ話しをしてみれば

豊中市 水野 黒兎
国のツケ次第に増えていく不安
磯になった家訓を書き記す

松江市 石橋 芳山
あーこれがブレッシャーってやつですか

大阪市 江島谷勝弘
甘党派でできましたならツブあんで

青森市 守田 啓子
春はあけぼの睡眠負債膨らみます

大阪市 柴本ばつは
さあ勝負上から五番抜いてやる

松江市 相見 柳歩
一票の重さAKBも政界も

鳥取県 斉尾くにこ
やるせなさこぼさぬようにして生きる

橋本市 石田 隆彦
若い時積んだ知識は宝物

尼崎市 近兼 敦子
ハイハイと頼まれごとが増えてくる

鳥取県 橋本 整
春が来て老いの口元よく動く

河内長野市 木見谷孝代
バーベキューはずむ女子会花の下

大阪市 小野 雅美
頑張れの期待重くて羽ばたけず

寝屋川市 籠島 恵子
ゼロ金利だから自己責任だから

羽曳野市 徳山みつこ
とりどりのパン匂い立つ春の卓

大阪市 栃尾 奏子
規格外いえ個性です自家野菜

鳥取市 前田 楓花
誰にでもいい顔したらこんな羽目

枚方市 海老池 洋
よう我慢したなと思う定年日

三田市 村田 博
アンクルトリス2フィンガーはまだ余裕

大阪市 坂 裕之
お誘いにうっかり乗ると元も子も

松山市 宮尾みのり
ヨサコイを踊ると妙に気が揃う

岡山市 永見 心咲
三段目五段目あたりから謀反

豊中市 藤井 則彦
下からの目線で人に会う稽古

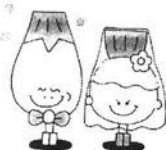
奈良市 長谷川崇明
君たちはできる出来ると煽てられ

沖繩県 宮 すみれ
縁側で雨の美音に時流れ

高槻市 初代 正彦
惚けまいとあたま鍛えているんです

6月号発表

(4月15日締切)



(平本 勝彦 画)
柳箋に2句



「川柳雑誌」創刊号を読む (1)

川柳塔社のホームページで「川柳雑誌」の創刊号をアップしていることは前号でご紹介しました。旧仮名遣いが多くて判読し難いところもありますが、ゆっくり読んでみますと面白い記事があちこちに載っています。

中でも愉快だったのは、22ページの「川柳塔」の下段にある【楽屋落】と題したコーナー。路郎師が同人の方々の様子を記したのですが、94年も前の先輩たちの様子が生き生きと現れていて「今と変わらん」と苦笑させられます。

▼快漢徹底郎は何事でも徹底的にやらねば氣の済まぬ男だけあって、酒を呑みだすと家は愚か最愛の妻も子も彼の眼中にはない。つい鼻の先の灘も伊丹も呑でしまひさうな元氣だが、翌日になって一度彼の眼に細君の顔が映ると低頭平身、これまた徹底的に家庭の人となる。而して二人の女の子を両手にブラ下げて編集所を覗きに来る同人きつての人氣男。

▼落ちついてゐるやうで慌て者の吉川クンは此の頃家族連れで齒医者へ通つてゐるが、ついこの間のこと、医者まで行ったのはいゝが暮口を落としたのに氣がついた。落としたのは細君クンだったので叱られずに済んだ。ところが家の鍵まで落としたので這入れないで弱つてゐたそう。

▼櫻ヶ丘で文化生活とやらをしてゐる史風クン、川柳家は尻の穴が小さいと、あの痩せこけた顔で見て来たやうなことを言つてゐるかと思ふと、何時の間にか旅鳥になつてゐる。

▼紫郎クンはまだ同人になつてゐないが、十九日の本社の創立句會の當夜、吉川クンから出席を促がされて、ヨシ来たとばかりに、早速までして紋付袴で築港の人事館へ駆けつけ、端然と坐つて待つてゐたが誰一人来ないので、いささか寒くなり、會場間違ひと知つて茫然としてゐたさうだ。その慌て方と来たら吉川クンの友達だけあると陰での話。

▼同人の夜調、正月にコッソリと城崎に出掛け、愛人といふものは、いいものですねと頼りだけはあつたが、創立句會に顔も出さねば、まだお土産も持つて来ない。

▼正月に別府に遊んだ洲馬クン、浮世小路あたりで嬉れしいあの妓にでも逢つたのだらう、あちらこちらへ、頼りに飛ばした一錢五厘録。

▼お茶ば裏ですと落ちつき拂つてゐる露太樓クン、創立句會に顔を見せないのどうしたんだらう、多分忙しいのだからと同情してゐると、黙つて中座行きをしてゐたのが句を送つて来て露見した。露知らぬとは云わせぬと洒落れて見てもおつつかぬ。

▼本社宣傳部にあつてさるものありと知られてゐた柳路クン、一寸顔を見せないとと思つてゐるとヒョコリ東京から寄越したハガキに曰く、東京の某々の住所至急に知らせ宣傳に行くだとか、二度目の地震の視察も次手に頼んまッせ。

(次号に続く)

注) 原文はすべて繋がつていて読みにくいので▼印のところで行分けしました。旧仮名遣いは出来るだけそのままにしましたが、古い漢字で変換できないのは現代の文字に置き換えています。また、句読点も一部変更しています。

くんじろう 選

白い息ぐらひは見せて 駆けて来い
沈丁花の間 逢いたい水たまり
白旗は我が家の居間の必需品
再生紙は開き直った白である
白状するとモスラを食ったことがある
踊り場で紋白線になる手帖
ゾワゾワと白に犯されゆく二月
大根の形のままで妥協する
白を足す呼吸が楽になるように
三日月のうすら透けて見える白
雪雪雪雪雪雪いやになる
降伏は巻いた晒に開いてから
20パー増量白絵の具チューブ
雪原を大蛇のごとくうねる川
婚約の指輪白つめ草に編む
歳月や渚に珊瑚礁の砂
クレゾールの移り香遠く春の白
白旗の真ん中に建つ精子の碑
いもうとは白夜に眠る未決囚
遡上して過去を漂白するのです
雑音をきれいに流す白雨かな
白夜には白いライオンからLINE
手筈どうり二泊三日の白亜紀へ
純白は無慈悲に処刑された壁
ルビコンを渡る白には戻れない
滑らかな白磁は白い血を流す
白馬が喉元過ぎて暴れ出す
白き手の報復メスは使わない
余罪などございませんと春の雪
町長がのこしたあぶりだしの遺書
遺すのは白い指紋とため息と
空欄を横切る一匹の白蛇
佳 アルテミス型の乳房を好いている
佳 腹筋がやっとな割れたわ白木蓮
佳 洗濯もせねばならない雪女
佳 後ろめたい白ときどきどきどきする
佳 搾乳機動けぬ牛の哀しい目
人 本部ですどうぞ 白骨ですどうぞ
地 「 ! , 。 」
天 豪雪さ生理が七日こないとき

細川 花門
米山明日歌
三好 光明
千 代 美
月波 与生
月波 与生
平井美智子
森山 盛桜
橋倉久美子
青砥たかこ
新家 完司
光畑 勝弘
雨森 茂喜
宮尾 美明
右田 俊郎
辻内 次根
福村まこと
福村まこと
柴田比呂志
根本 秋亜
斉尾くにこ
田口 和代
加藤 当白
うだあつこ
岸井ふさゑ
蕎麦 酔人
ま さ と
美馬りゅうこ
斎藤 秀雄
水 た ま り
伶
龍 せ ん
岩根 彰子
吉崎 柳歩
吉崎 和子
城崎 れい
加藤 当白
西沢 葉火
尾崎 良仁

居谷真理子 選

山頂で見れば冠雪薄汚れ
日章旗白地に赤の黄金比
白黒は好きにどうぞと風見鶏
白い飯たらふく喰えてまだ不満
真っ白なシャツから透ける腹の色
白線を5ミリ越えたと叫ぶ笛
再生紙は開き直った白である
よく泣いた 白が真白に見えた頃
空白の時間を生きる千鳥足
魂を漂白してる日曜日
白鵬の白が段々薄汚れ
大根の形のままで妥協する
迷彩色の手を白手袋で隠す
頷いている包帯の白いこと
母はいま眠り続ける白い部屋
白いのがいっぱい降ってくる寒い
雪のいる白で良かった街に野に
白か黒融通きかぬ男ども
洗濯もせねばならない雪女
他の色は排除したから白い色
ホワイトアウト神の試験が終わらない
白無垢が満艦飾で里帰り
夜の底ふたつ絡まる白い息
梅真白隣と比べたりしない
白髪がちらほら老いが迷い込む
白旗の裏にわずかに残る色
看病の窓に差し込む白い朝
漂白で働く辛さまで取れぬ
ドラッグで白衣着ているただの人
大好きな白が他人の顔をする
白菊に埋もれ帛辞の品定め
雪の色混せてこの世を淡くする
佳 雪よ雪解けるな汚染目を覚ます
佳 体幹を鍛え白旗高く揚げ
佳 本部ですどうぞ 白骨ですどうぞ
佳 証人がいないと僕は白でない
佳 大根がアナタ好みになりたがる
人 一点のシミもゆるさぬ白の罪
地 草食の男は見えない白日夢
天 白い手のままの神など信じない

かきくけ子
颯 来
大島ともこ
竹中 正幸
汐 海 岬
前川 真
千 代 美
川本真理子
岡野 満
十 六 夜
岸田 万彩
森山 盛桜
北田のりこ
ま ろ こ
上原 稔
新家 完司
小林 祥司
く み
吉崎 柳歩
寺川 弘一
笹倉 良一
葱 坊 主
石川 柳寿
紅 梅
山下 凱柳
西山 竹里
野平光太郎
徳重美恵子
井戸野 蛙
柳田かおる
あ そ か
水 た ま り
澤井 敏治
アズン安須
加藤 当白
平尾 定昭
わ こ う
澁谷さくら
伊藤 良一
澁谷さくら

投句方法 【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック

senryutou.net/html/index02.html (サイト管理 森山文切)

本社 三月句会

◇三月七日(水) 午後一時
ア ウ イ ー ナ 大 阪

梅薫る七日、三月句会は百四十名(内投句者四名)の参加で開催された。初出席は杉本光代さん(大阪市)と宮井いずみさん(大阪市)。句会に先立ち、三日に亡くなられた同人塩満敏さん(羽曳野市)に黙祷を捧げた。

今月のお話は平井美智子さん。題は「時実新子 川柳と慟哭」。塔社の薫風師を「お兄ちゃん」と慕い、師も新子の才能を支えてこられた。夫、子供、父母、恋人への愛を、激しい言葉で詠い続けた新子の人生を、最後まで共に過ごされた美智子さんから、直に熱く聞かせていただいた。新子の句から

まじまじとみつめてこの人も哀し
子は言いし生みしも生まれしも不幸
一握の灰 これが父これが母
妻をころしてゆらりゆらりと訪ね来よ

(真澄)

月間賞は柿花和夫さん(堺市)

(司会)真理子・隆彦(協理)勝弘・奏子

(受付)満作・満知子(懸垂幕墨書)耕治

(清記)憲彦・勝弘

席題「尽くす」

坂

裕之 選

全力を尽くそうなんて簡単に
尽くすなら今だよ母も傘寿です
尽くしても尽くしても振り向かぬ人
騙されたつて尽くす女の性である
言い尽くしましたあなたを愛してる
尽くし合い妻と楽しく半世紀
尽くしても愛が返って来ぬ亭主
棺の中ベスト尽くした顔がある
生き尽くすには不足する預金残
心尽くしは論吉がいいと娘いう
美しい女に尽くす雄の群
手は尽くしましたと主治医の目も潤む
子や孫に尽した元はとるつもり
書き替えない尽くし財務省
存分に生きてなんにも残さない
ワイフには言い尽くせない程の侘び
停年へ尽くしてくれた靴磨く
受験生力尽して咲を待つ
財産は使い尽くして行くと父
説得を尽くし論吉にダメ押さす
そだねそだね全力を尽くしたのね
居酒屋に尽くし続けて半世紀
屋台骨食い尽くしてる三代目
売り尽くしセールやつては甦る
心尽くして話せばわかる人の道

立蔵 信子
小川賀世子
久保田千代
森 廣子
大久保真澄
前 たもつ
出口セツ子
鈴木いさお
片山かずお
緒方美津子
木嶋 盛隆
矢倉 五月
古今堂蕉子
中川ひろ介
嶋澤喜八郎
坂上 淳司
川端 六次
大浦 初音
伊達 郁夫
島田 誠一
江島谷勝弘
永田 紀恵
中村 恵
関 よしみ
松尾美智代

国のため散った兵士を忘れまじ
楽しんで自分に尽くし生きている
子に尽くし夫に尽くし逝った母
あの世ではベストを尽くす覚悟です
尽くすだけ尽くし天命を待つ命
夫には尽しました えんまさま
一生あなたに尽くすと言ったわね
貴方には尽くし続けて半世紀
あなたのために尽くしますよと妻が言う
未練断つあなたの手紙焼き尽くす
引退の盲導犬よありがとう
わがままも理解し尽くす介助犬

佳

三宅 保州
指宿千枝子
平井美智子
山本 進
能勢 利子
細川 花門
能勢 良子
細川 花門
片山かずお
小野 雅美
川端 六次
石田 隆彦
古今堂蕉子
前田 紀雄
中村 恵
原田すみ子
正信寺尚邦
中島 一彌
荒川 鈍甲
渡辺 富子

兼題「ごろん」

兩川

無限選

一億円並べたうでごろ寝する
強者がごろんと転ぶのが愉快
どうにでもしてと鮎の朝の競
嫁はんも猫もまたいでいくごろん
ごろんごろんママのカレーの具沢山
酒瓶がゴロンと雨の飯場小屋
ごろんごろん夢の続きを抱いて寝る
おもちゃ屋の前でごろんと拗ねている
ごろ寝して助けた亀を待っている
結論を急ぐと若い芽がごろん
千切れ雲寝ごろん僕も無重力
ごろんごろんどうち付かずでございます
不愉快なことはごろんと胃に溜まる
夫逝きこの世天国ですごろん
満足の今日ごろんと夕陽落つ
赤絨緞嚙がだんごになっている
何本も徳利転がすやつっぱち
抜け殻をごろんと残し親ばなれ
掃除機がごろんごろんを追い立てる
わだかまりごろんと溶けて酌むお酒
石ごろん言いたいことがあるらしい
無難作にごろんと野心一つ捨て
お題「ごろん」で想起するのは彬の碑
ごろんとした鼻が家族のあかしです
ごろんごろん母ちゃん先に逝つてから

川端 一步
川端 一步
石田ひろ子
鈴木 栄子
大内 朝子
正信寺尚邦
今井万紗子
丹後屋 肇
伊達 郁夫
松本あや子
升成 好
立蔵 信子
大内 朝子
鈴木 栄子
久保田千代
大久保眞澄
山本 進
美馬りゅうこ
油谷 克己
長高 俊雄
岩佐ダン吉
中村 恵
坂上 淳司
山田 葉子
太田としお

飲み会が終わり徳利ごろ寝する
休日もごろんとしてる空財布
ごろんごろんと揉まれて丸くなる私
朝まだきごろ寝の鮎競りを聞く
飼ひ慣らすまではごろんとしたトド
寝返りをしてもニュースになるパンダ
ロボットに職を追われてからごろん
酒吞でごろんメシ食つてもごろん
魂をごろんと出して丸洗い
一升瓶ごろんごろんと花の下
草に寝て大地の吐息聴くごろん
反対に回つてからの転び癖

伊達 郁夫
出口セツ子
山本希久子
米澤 俣子
清水久美子
山根 妙子
荻野 浩子
鈴木いさお
藤井 宏造
木本 朱夏
前 たもつ
山崎 武彦

佳

大風呂敷からごろんと嚙が転げ出る
私を転がしてみる針の上
用済みの噂が道に捨ててある
阿寒湖のマリモごろんとアイヌ悲話
山脈をひとつ我が家の庭に置く

柿花 和夫
嶋澤喜八郎
嶋澤喜八郎
大坪 一徳
くんじろう

人

好き放題に遊んで天と地にごろん

石橋 芳山

地

転がった一升ピンは僕の影

海老池 洋

天

リングごろんと女は嚙をつき通す

石橋 芳山

軸

転落の椅子は三本足だった

兼題「隠す」

安土

理恵選

まあだだよ名残の雪が春かくす
内緒ですがおばあさんなんです私
月蝕は僕の頭の影だった
文春に頼んでみるか隠し撮り
秘密やと言った相手が悪かった
ひとつぐらい魅力ありますバスタオル
ヴィーナスも布一枚をまといたい
病名は隠し黙ってリングむく
今日あたり火を噴く妻と対峙する
ミサイルの陰に隠れている暮らし
第三の眼は前髪で隠しとく
ハンカチで隠せるほどの秘密です
隠しごと出来ない質で墨を吐く
破棄はしました隠蔽はしてません
秘伝秘仏隠す文化は日本流
句会だと言えはすんなり見送られ
黒塗りはひどいもんだと思います
見かけは暢気地獄見たこと隠しとく
たとえ話の中に隠されていた棘
実力を奇跡と言つて隠す爪
消せぬとも隠したい過去一二三つ
隠す財産ないから揉めることはない
黙つとれん隣がドローンあげてる
モノリザの笑顔で隠す悪巧み

藤井 宏造
大久保眞澄
村田 博
藤井 則彦
松浦 英夫
松原 寿子
藤井 宏造
西川 無限
杉本 光代
川端 一步
くんじろう
木本 朱夏
谷口 義
細川 花門
平賀 国和
松浦 英夫
江島谷勝弘
久保田千代
村上 玄也
木嶋 盛隆
木本 朱夏
中島 一彌
加川 靖鬼
吉岡 修
海老池 洋

隠す程ない通帳を隠してる

松本あや子

生い立ちを秘めた尼僧が美しい

三宅 保州

たつぷりの撒き餌で隠すさてその後

居谷真理子

おほほと笑って胸の炎を隠す

西出 楓楽

負けたふりでできる強さを隠し持ち

山口弘委智

隠しごとできぬ皮付きポテトです

柴本ばつは

大切な人を隠しているところ

籠島 恵子

ポケットに象一頭を忍ばせる

海老池 洋

波風を立てずあの世で捨てなさい

古今堂蕉子

なにもかも吐いてすつきりしたらどや

太田としお

動揺を隠して歩幅崩さない

川端 六点

ガラス張りそれでも隠し事はある

小川賀世子

佳

これ鴉あつちへ行つて鳴いてくれ

吉岡 修

究極の仮面と思う角隠し

伊達 郁夫

記号ばかりで書いてあります予定表

片山かずお

母の秘密隠し通してほしかった

今井万紗子

帯の芯家宝の刀隠し持つ

関 よしみ

人

フルメイクしても寂しさを隠せない

美馬りゅうこ

もういないのに親指を隠す癖

居谷真理子

天

二の矢三の矢隠して強気くずさない

吉村久仁雄

軸

約束を守って逝つた共犯者

兼題 「しびれる」

内藤

憲彦 選

全身で美空ひばりにしびれてる

川端 一步

持ち株がしびれるほどに値が上がる

奥村 五月

華麗完璧羽生の演技しびれるなあ

藤村 亜成

三部経まずは足から効いてくる

正信寺尚邦

パシートの録画を今日も見えています

正信寺尚邦

両肘に電氣うなぎが棲んでいる

坂上 淳司

子の寝息しびれる腕をそとと抜く

米澤 俣子

酒減らせしびれかり稼げ浮気すな

村上 直樹

薔薇よりも論吉私をしびれさす

小野 雅美

しびれる程感じた愛は夢だった

宮崎シマ子

初恋は今もしびれるビートルズ

鈴木 かこ

核ゼロにしびれ切らしている地球

升成 好

医療費に財布しびれる年金者

石田 隆彦

老いたつてしびれる恋を待っている

森 廣子

舌先のしびれ思い当たりが一つある

安土 理恵

送られて送り返してしびれてる

柴本ばつは

足しびれ這って焼香友の通夜

能勢 利子

熱いキス先にしびれた方の負け

栃尾 奏子

氷川きよしのライブにしびれ妻帰宅

藤井 宏造

流水の神秘に逢えたオホーツク

美馬りゅうこ

核ゼロを痺れ切らして待つドーム

岩佐タン吉

長い祝辞にビールの泡もしびれてる

たむらあきこ

あこがれの人の隣にいる私

柿花 和夫

倦怠期電氣ショックを受けにゆく

籠島 恵子

札束にしびれて靡く人の性

村上 玄也

何もかも捨てるしびれるほどの恋

出口セツ子

旨すぎる猪口一ぱいの盗み酒

永田 紀恵

ショーケンにしびれていたと笑い皺

岸井ふさゑ

締りない人に山椒を振りかける

岸井ふさゑ

お互いにしびれたことは内緒です

山岡富美子

虎造の喉にしびれていた昭和

鈴木いさお

妻よ許せしびれるほどのサユリスト

三宅 保州

フグの肝少し食べすぎちゃったかな

江島谷勝弘

何もかも計算づくとなりながら

上田ひとみ

電話口孫の合否の結果待つ

松浦 英夫

デキシーに友と痺れたジャズ喫茶

安福 和夫

佳

魂をしびれさすよな津軽三味

石田ひろ子

柳刃の牙えにしびれて通う店

くんじろう

正座して読経聞くのは地獄なり

古今堂蕉子

しびれる歌をしびれるように青江三奈

木藤こみつ

エンドロールの余韻にしびれ席立てず

澤井 敏治

人

アイドルにしびれておじさんは元氣

石橋 芳山

脇役で通す男の渋い芸

柴本ばつは

地

天

今ここでそんなセリフを言うなんて

上田ひとみ

軸

選手より痺れていますサポーター

軸

兼題「よろしく」 中岡千代美 選

南西北のポストに入れるラブレター 正信寺尚邦
 昼間からよろしく酒を飲む至福 吉村久仁雄
 よろしくとそだねで丸い絵が描ける 大内 朝子
 自信作投句しましたよろしくね 坂上 淳司
 よろしくと離婚届けを差し出され 七反田順子
 ありがとあとはよろしく言うて逝く 福田 好文
 よろしくと言われただけのプロポーズ 能勢 利子
 腕白を預けパートの白い息 津守 柳伸
 普段より賽銭はさむ句会の日 松岡 篤
 よろしくと都合は聞かぬ奉加帳 山岡富美子
 これからもよろしくなんてフルムーン 大内 朝子
 自動運転さあ昼寝でもしましょうか 木藤こみつ
 ボクの荷物運び出したよろしくね 山田 葉子
 賽銭は入れたかどうかよろしゅうに 森松まつお
 これからも共に歩こう白い杖 鈴木 かこ
 オペ前夜神へ白紙の委任状 正信寺尚邦
 初めましていきなりハグをされちゃった 澤井 敏治
 エンディングノットに言いたい事は書いてある 木藤こみつ
 明日から他人ですからよろしくね 木本 朱夏
 団地で論吉に頭下げられる 山本 進
 よろしくとも言わず押し寄せる老化 大久保真澄
 おでんとカレー炊いてありますよろしくね 西出 楓楽
 よろしくの最終章は尊厳死 鴨谷瑠美子
 よろしくが鼻にかかった声でくる 鴨谷瑠美子

コロン一滴あなたの吐息待ってます
 さらけ出しこんな私でよろしくて
 よろしくね子等もなついてくれてます
 片手拝みのよろしくだから適当に
 テーブルにワンコインある妻の留守
 新しいライバルが来たまず握手
 最後には万事よろしくとだけ書く
 金の要るよろしくならばお断り
 もの忘れてもかめへんお母ちゃん
 合格させてとちゃんと楷書で絵馬に書く
 よろしくと言われてわるい気はしない
 よろしくと言えない父の咳払い
 後はよろしく風になる予定です

佳

よろしくはときには空っぽの言葉
 青い目によろしくなんてどう言おう
 よろしくのくの字あたりに下心
 合い鍵もスマホの機種も変えました
 もう少し手元照らして欲しい夜
 人 美馬りゅうこ
 くんじろう

人

柩には花はいらないワンカップ
 地 川端 一步

地

付けが溜まっていますお待ちしてます
 天 小川賀世子

天

隣にはメガネをかけた男の子
 軸 上田ひとみ

軸

健診の結果も添えてプロポーズ

兼題「予感」 西出 楓楽 選

八十路坂少し予感を選び好み 仁部 四郎
 よく忘れ私壊れていく予感 関 よしみ
 長い夜になりそう誰か母を看る 田中 敬介
 満たされた歩幅のなかにある予感 松原 寿子
 玄孫等の新婚旅行火星かも 緒方美津子
 春キャベツわいわい友達の予感 鴨谷瑠美子
 最初はグー出す人きつと次はパー 永田 紀恵
 争いの予感ゴディバのチョコがある 石橋 芳山
 ロボットがホームの空き待つ未来 大久保真澄
 ある期待りんごが落ちただけなのに 嶋澤喜八郎
 横顔に見惚れて恋になりそうな 木本 朱夏
 生き切つてピンピンコロリ往く気する 荒川 鈍甲
 そう言えば近ごろちよつと色っぽい 内藤 憲彦
 彼連れて娘が「父さん」と来る予感 山田 耕治
 器から僕がこぼれてゆく予感 両川 無限
 こんな短い手紙に芽吹いてくる予感 鴨谷瑠美子
 風ふわり誰かが呼んでいる予感 今井万紗子
 戦車になるなら申告やめにする 大久保真澄
 着メロから別れの予感鳴り響く 松浦 英夫
 楽天家嫌な予感も近寄らず 安福 和夫
 予感どおり彼女は待つてくれない 宮崎シマ子
 予感通りピツタリなもの氣にいらす 榎本日の出
 春風最後の恋になりそうな 大坪 一徳
 生命線薄れて知能線縮む 吉村久仁雄

あの路地を曲るとききときする予感
エレベーター降りたら消えていた予感
東京へ出た子帰つて来ないかも
闇の向こうチャンスが光っている予感
雪解けのムードに茶々が入りそう
いい予感わるい予感を混ぜこの世
合格の予感へ諭吉洗つとく

藤村 亜成
両川 無限
長高 俊雄
渡辺 富子
清水久美子
水野 黒兎
松本あや子

春はそこ私も脱皮する予感
いい予感スマホ笑つてくれました
美しい眼だと思つたのが予感
メールも減つたし口数も減つたし
そつと握りつぶした手のひらの予感
臘月ズルイ女になる予感

前田 紀雄
山本希久子
居谷真理子
藤井 宏造
たむらあきこ
小野 雅美

佳

発芽する予感へ鉛筆を削る
当てられそうで目をそむけたが当てられた
メダル取る予感で挑みメダル取り
くしやみ三つまた三つ恋のテレパシー
胸ドッキューンうしろで鍵を締める音

山岡富美子
村上 玄也
松岡 篤
澤井 敏治
内藤 憲彦

人

左足から歩けば良いことが起きる
きつとまた会える私だけのさくら

片山かずお
鈴木 かこ

天

軸

杉玉がゆれた悪友きつと来る

柿花 和夫

ある予感夫の保険倍にする

句会 燦 燦

二月句会を読む 弘 津 秋の子

みぞれ道阿闍梨滑つた草鞋跡

中川ひろ介

千日回峰行を満行の酒井阿闍梨。七年がかりで約四万キロを歩かれたそうである。高僧の草鞋跡を「滑つたな」と見つめる目が鋭い。川柳塔W E V句会の選者くんじろう氏がフェイスブックに選句の基準として「人の道を説く句より悪党の句が好ましい」と記しておられる。

同級生は真面目と思つている私

能勢 利子

本当はそんなに強くない私

上田ひとみ

この二句の「私」は読み手の私に通じる。真面目で気弱な性格である。しかし善人ではない。そこを伝えたい。一足飛びに悪党まで行けない時はどうしたらいいか。くんじろう語録は更に続く。「冒険心の無い句は頂かない」

勢いで君と渡つた丸木橋

石田ひろ子

自由席へ約束果たすように着く

青木 公輔

糸切つた風よその後も幸せか

海老池 洋

明日はのどか時々鬱が降るでしょう

井上 洋三

春が近くなると鬱の風が吹いてくる。自由席すら意味のないものに思える。決心して糸を切つた風は振り返らない。ひたすらに未来へ飛ぶ。多分それが冒険心のある句に繋がるのだと感じる。

傾いた海は多くを語らない

木本 朱夏

菜の花の海で眠つていいですか

小島 蘭幸

何をしたって空き瓶の中だから

赤松ますみ

毎月の選は句会燦燦のページの名前欄に付箋を貼ることから始まる。係のルールとして毎月同じ人の句を選ばないという暗黙の約束事があるのだが、今回は悪党になります。先月と被っている作者がおります。

老地物語

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫報

大笑う我家の財布泣いている
未知の世の断言をする占い師
節税に悩むくらいに稼きたい
ストレスも悩みもないと呑気者
診察で主治医の悩み聞いてやり
孫の声悩みふつとび笑顔でる
老いてるが悩むだけまだ先がある
恋古い花びらちぎり好き嫌い
財産が頭痛める夢の中
何悩む死ぬ時誰も無一文
煩惱は無い筈なのに未だ悩む
おみくじは引くまでねばる吉の札

川柳塔みちのく(青森) 稻見

則彦報

豊稷を願って止まぬ虎落笛
晩酌は午後四時半と決めている
白黒をはっきりさせる悪い癖

ご破算で貴方の色に染まります
三百と六十五日立つ白線
一日のスタート薫る珈琲と
鶴が飛ぶ豊かな国を垣間見る
スタートはみんなおんなじハタカン坊
八十路のスタートむらさき引き摺って
ホワイトアウト僕の宇宙が狂いだす
新春のスタート鼓動の初初し
D51の余韻が残るレール跡
ごめんねのひと言葉豊かななる心
通学路朝の元気が響きあう
お絵かき帳孫ワールドがうめつくす
響けよと言葉選んで子に話す
母の声心に響く年になり
白いメモ初日と書いて前を向く
天花粉孫のむかしを喋りだす
よく響く君の呼名が聞きたくて
十字架を切って十倍返しする
スーパームーン見納めとなる老夫婦
病室で大空眺め雪しんしん
関節の軋みを耐える妻哀し
婆ちゃんの免許奪い村の足
一人では飲み屋へ行けぬ子に育ち
いいのかなあスマホ・スマホの人生で
ベタ凧の海に老舟浮かばせる
しみ・しわ・しらが話題溺れ死ぬ
何もかも値上げねあげの世を生きる
ひと吹きすすき野の風老介護

一 吞 美 鈴 風 来 坊 ひとし 小とみ 芳 生 則 彦 隆 樹 のぶよし 洋 子 慕 情 初 枝 柳 子 英 子 真由美 黙 喜 吹 馬 龍 馬 花 峯 ふさゑ きよし 井 蛙 一 花 霜 石 吞 舟 和 香 子 規 子 氏 加 子

和歌山三幸川柳会

楠見

章子報

絵本から希望の二字を読み聞かす
沸点になるまで希望ふくらます
望外の幸せ長く生きられて
希望だけは一応きくと言う閻魔
希望校目指す夜中のカップ麺
ご希望に添えるでしょうか余命表
幻を何時も見ている高望み
知恵の輪が解けて希望が湧いてくる
ビニール傘虹まで飛ぶという希望
少年の内に秘めたるアンビシャス
胎動へ膨らんでゆく母子手帳
未来への希望をつなぐアイバンク
本人の希望に添わぬ家族葬
妥協した分だけ希望痩せてゆく
錆ついた希望に発破掛けてみる
まったく新靴に希望が弾ける
目立たない善意が点す希望の灯
来年も希望を抱いて立ち上がる
来年もおいでと絵馬の高望み
良薬は口に甘しと世もかわり
優曇華の無事に開いて如来顔
底冷えの時間カボチャは切り売りに
根の浅い杭が背伸びをして困る
カーメーカー日本栄えた功労者
車社会郊外栄えは過疎
ご先祖の栄えあつての今がある

和 子 美 枝 子 ひろ子 保 州 次 根 当 代 みつ江 俣 子 幹 子 富 香 義 雄 智 三 千 鶴 昭 枝 菜 摘 准 一 章 子 かず子 寛 理 恵 宏 夫 一 雄 ま き 宏 枝

栄えてる店ののれんが威張ってる
A-Iが栄え人間廃れ出し
栄えてるうちにへそくり貯めましよう
建て売りに座敷童子も入りびたり
人類の栄華の裏で泣く地球
もう一度栄えてみたい種袋
働き蜂みんな国民栄誉賞
栄転に単身赴任セツトされ
栄光を支える母のにぎりめし

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

絹子 純子 澄夫 日出男 あき子 よし子 昇 起世子

人並みに合わせる幸せの目盛り
スーパームーン幸せ届く年賀状
幸せに生きて故郷の土を踏む
旅行記のスケッチブック宝物
幸せと書く鉛筆が柔らかい
奇跡の星地球を救う和の心
久しぶり皆んな揃った鍋囲む
和やかに家族で囲む車椅子
神様を起こす鐘です和やかに
伊勢海老も仲間入りして年を越す
和やかな暮し見護る鬼瓦
フォークダンスは和やか秋の天が澄む
和やかに笑い和やかに太る
一日も無駄にはしない家守り
一二三懐かし路地の独楽おじゃみ
恋の火が一喜一憂して揺らぐ
「俺オレ」を一人芝居でやつつける

昭紀 幸子 鬼焼 一徳 榮香 宣之 輝恵 慶子 笑子 夢香 淑子 蘭幸 千代美 規代 弘子 敬子

一と書く大筆墨はたつぷりと
携帯のメモ病院で句を作る
家族増え賑やかだったお正月
四世代おせちを囲む幸の味
いつも笑いの神様の居る我が家
おだやかに百寿の春を迎えたい
今日一日おだやかだった陽が落ちる
節分の鬼を怖がる可愛さよ

はびきの市民川柳会(大阪)中川ひろ介報

哀しかる寂しからうと賀状来る
大往生の式をなごます無邪気な子
無理通し義理が引つこむ人の道
モリカケは避けて通れません総理
哀しみを味わい器広くなる
政治利用され哀れなり少女像
人生は輪ゴムのように伸び縮み
哀れだなあ横綱どんと消えていく
私道です意地を通してカタツムリ
軍国少年悲哀を超えて生きてきた
黙々と輪ゴムひと筋町工場
輪ゴム持てば憎つき君へ指鉄砲
カラフルな輪ゴムで括る菓子袋
幸せな輪ゴム美女の髪束ね
子は宝なのに虐待なぜ起きる
飲めぬ酒あおり哀しさ耐えている
熱燗が五臓六腑を通過中
メシが喉通らない程酒が好き

比呂子 伸子 歩美 初音 厚子 栄恵 貞子 史子 久仁子 ちづる 壽峰 みつこ 大子 いさお 一文 真清 専平 高鷺 ヨシ枝 さくら 泰子 かつ美 シルク 欣之 まつお

竹村 紀の治 選

今朝の顔氣に入らぬから取り替える 初枝
神様よ補聴器付けて聞いてくれ 実
決めたのに酒が喋りの蓋を取る 一
売りません差し上げますと書く臓器(矢)五
光らない石があつてもええやんか 眞澄
母の梅最後の二つ食べました 直子
何人と話しただろう今日ひと日 恭子
和解するつもり靴がまだ重い 永玲子
走っている時には見えぬ花の色(蘭)恵子
OKを貰いペダルの軽い帰路(初)正彦

佳句地十選

(3月号から)

大内 朝子 選

魂をさぶさぶ洗つ初日の出
うららかな陽気いいこと有りそうな
生かされて日日に折りが深くなる
前向きに生きて忘れてならぬ過去
分かれ道迷わず母の後を行く
わたくしの鐘が鳴るとき空は青
自由って簡単そうで難しい
親しみをこめた笑顔に鍵が開く
走っている時には見えぬ花の色
世渡りに正直という武器があり(簡)恵子 集一

哀しみの世に性善説の灯は消さぬ
哀愁を心に秘めるお年頃
嫁ぐ娘の振り返る顔いと寂し
飲み友が先に旅立ち寂しい日
本年も与党ウオッチを続けます
大津波逆縁の子も早はたち

久仁雄
フジ
洋一
千鶴子
雄太
ひろ介

川柳荒川(兵庫)

中野

忠報

年重ね未だ追つて夢がある
時効でも心の痛みまだ取れず
背を押され趣味の会へと生きがいに
傘寿でもお年玉とは夢のよう
追うて来る三つ子に隠れ赴任地へ

節子
てる代
保子
博
三雄

川柳わかあゆ(島根)

松本はるみ報

若竹ののびのび節の美しさ
平凡が一番なのと知る夕日
また明日あしたがあると先延ばし
暑い夏いつしか過ぎて秋の虫
のびのびと育つてゲーム機良く覚え
あのかきは秋の日向にもう一人
平凡な暮らしになった老二人

ハル子
恵美子
かつ子
安子
昌
はるみ
好栄

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

土壇場で私の素顔お見せする
さてさての思いに知恵は沸いてこぬ
さてと言ひ帰ると言つてもう一曲

弘子
和子
文道

免許証返し雨降り続く日々
免許などいらんとカラス飛んでいる
免許など要らぬ寝るにも食べるにも
居酒屋で天下を取った酔っぱらい
無人駅マフラー巻いて誰を待つ
免許証持っていますすが乗れません
100歳でこの元気には舌を巻く
起き抜けに天気予報をチェックする
居酒屋でバツサリ政治切つて呑む
さてという顔では咲かぬ椿たち
手紙ではさてと話題を変えていた
はてさてなはてさてと雪が降る
包帯を心の傷に巻き付ける
軽い靴履いて免許を返します
居酒屋が一つづつ消え狼が住む
居酒屋で呑んだオッチャン皆あの世
さてここは周り亡者と鬼ばかり
求愛のダンス丹頂鶴歡喜
煽てられさて何事か推し測る
陽が昇り今日もやるぞとネジを巻く
潰されてさてどう生きる鬼瓦
居酒屋のおでんの味は老母の味
またとなひチャンスさて腰上げようか
政治不信さて年金はどうなるか

実満
照彦
綾子
重忠
好幸
ゆり子
草文
大鯰
すみれ
盛桜
完司
裕
小鹿
孔美子
茶子
恒
蟹郎
いさお
かおる
みさ子
京
富久江
満

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

新採の校長机上に国語辞書
名を忘れやあ先生と立ち話
富柳 会(大阪) 関 よしみ報
紙とペン長い余生の良き友に
防人が昔守つた神の島
持久力負けるものかと亀の首
再会へ長い手綱を手繰つて
好餌には群がる蟻の長い列
らしくあれ亡父の格言守りぬく
せつかで杖より先に歩いて
抱かれても抱かれなくても母の愛
故郷の真冬を描く墨と水
長生きでどんだん友の輪を広げ
春吸うていのちふくらませる大地
正論は眠らせ言の葉と遊ぶ
守らねばわたしの手の中の真珠
決断はもう揺るがない寒の月
風の香が微か命を急ぎ立てる
私のルーツだ強がりも聞も
長編の自分史だった華だった
両の掌に溢れた愛も終の章
守り抜く心に秘めた石ひとつ
長生きの予感被さつて眉毛
守られて守るは一筋の絆

四郎
蜂朗
伸雄
文重
田鶴子
澄子
壽峰
清
常男
高鷺
武人
一文
あかり
かこ
扶美代
浩子
恵
奏子
寿之
アキ
よしみ
欣之
森子
和夫

川柳塔なら
夜空から赤胴色のプレゼント
大久保眞澄報

見え透いた世辞は二三歩引いて受け
受けた恩返せば人情わいてくる
人間の心を受けるありがとう
すべり止め受ける入試の綱渡り
受けねらいやじつたはずが命とり
手に受けて雪の命をいづくしむ
無理難題受けて胃薬飲んでいる
交渉の前に逃げ道つくつとき
スランパから逃げるな明日も陽がのぼる
逃げないで立ち向えとは鶴彬
安倍さんの得意技です肩透かし
逃げ水を追って人生ひた走る
逃げるもの逃がしてやれる度量もつ
逃げ馬を信じて馬券にぎりしめ
終章も逃げず完走するつもり
部下底い石逃げ切れず無念の死
慌てるなしばらく待てと鍋奉行
責任の重さにすくむ受精卵
しばらくは笑えずにいた目を洗う
親友のやあ暫くに立ち飲み屋
手に乗れば虹もたちまち褪せてゆく
妻の吹くラッパしばらく蓋をする
寝ころべばしばしは雪のあたたかさ
今ひとりやがて皆が輪になろう
忍耐の奥歯は無駄を語らない
あの極貧耐えて仕合せ噛みしめる
忍耐を引きずり過ぎて自滅する
事情あり辞めぬ国税長官

崇明 すみれ 辰雄 恭昌 文聡 薫 貫一 敬子 よう子 ふりこ 紀雄 萌子 隆吉 將文 史郎 盛隆 のぶよし 雅美 甚之市 成子 美智子 千代美 ダン吉 比呂志 賛郎 倫 勝弘

夢かなう忍耐つよくチャンス待ち
忍耐の二字が重たい母の背な
少しづつ忍耐強くなる絆
足しびれ話聞けずに我慢だけ
夢抱いてぐつと我慢の冬木立
耐えるだけの人生いやと吠えてみる

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

長雨にせめて笑顔で暮らしたい
東洋の魔女もいつしかなでしこに
陽と風と北へは何をあげましょう
花一輪みんな一人で生きている
ふるさととは少女に戻る風が吹く
天国に繋ぐアドレスあります
星流れ過疎化の街にある童話
清濁を飲み少しづつ熟れていく
B面の吐息本音を知っている
私を生かす痛みを受け入れる
知らぬ間に効く忘却というクスリ
四季がどうあろうと妻という手綱
天晴れの生き様けさのお味噌汁
晴耕雨読私に合った暮らしする
道半ば落ちる夕日がせきたてる
マニフェストどこかで聞いたことがある

京都塔の会 山田 葉子報

朗報へ弾んでいます電話口
喜怒哀楽の息が聞こえる「声」の欄

孝子 國治 惠美子 展代 富子 理恵 陽子報 かずこ えい子 みち子 海希 美恵子 れい子 和之 華蓮 葵 章子 みどり 陽子 菜美 和代 游子 公弘 哲子 彦 則彦

単身赴任北国で聞く雪の声
長寿の家系百歳超えた母と叔母
天皇の退位も決まり安堵する
新年会続きスリムはどだい無理
家の中スリムにしたら快適に
アルバムの中年あたりまでスリム
甘い声いまでは怖いヨメの声
生きているか声掛け合って老いの坂
くしゃみまで大きすぎるよお父さん
断つたとたんにドスのきいた声
年とれば微笑みだけで若く見え
モナリザの微笑み好きで60年
ライバルが微笑んで来る気味悪さ
昔スリム今はおでぶで笑てんか
あるがままこれがスリムと決めてます
義理人情スリムに変えて自分色
夫の留守大きな声で本を読む
産声に両家ようやく仲直り
読めるのにわざわざルビが振ってある
厄除けのぜんざい小豆から仕込む
黒樫の妻はいつも微笑んでくれる
退位までに微笑み届け被災地へ
財布だけスリムになったジム通い
スリム化こそ不況を抜ける処方箋
トイレットペーパー値上げてます痩せてます
アマゾンで届く大丸の包装紙
三億円当たった時の遺言書
ソプラノでご飯ですよと妻が呼ぶ

福子 ルイ子 昭 ふりこ 弥生 欣之 保子 益子 葉子 弘子 泰夫 多津子 元一 文代 宏子 忠子 北舟 千代 知栄 求芽 満子 英旺 正彦 美津子 弘之 牛延 かずお

看護師の元気な声を待ちわびる
呼び声で家族が見える電話口
仲の良い二人の声は響き合う
胃カメラが少しスリムになれと言う
微笑みが戻り嬉しい介護の手

南大阪川柳会

松岡

喋らない二人はきつと深い仲
深い深い将棋も囲碁も川柳も
忠言の深さを知らず若い日を
木の葉舟独裁国の罪深さ

東北の海の深さにある無念
一病をかかえ八十路のクラス会
元カレにさりげなく会う同窓会
スキヤキをうきうき妻の浪費癖
バーゲンにうきうき妻の浪費癖
あの人が来る日は花を待って待つ
うきうきとしてるお方の隙だらけ

オリンピックうきうきさせて消費税
雪かきによつしや私が引き受ける
頼まれてよつしやとついた判に泣く
頼られる倅せよつしやまかしとき
しなる竿隣もよつしやお祭りだ
広辞苑七版電子辞書も出る
かあさんがよつしやと言えは大丈夫
今日の事先ず化粧して考える
予定では今極楽で昼寝中
前向きに計画を練る一周忌
計画が出来た出来たとはしゃいでる

義昭
洋志
光久
万紗子
美籠

今頃は課長の筈でロイン組み
計画を無視して老いがやってくる
何歳になつても挑戦のかたち
掌の中の画面に挑む老眼鏡
挑発も挑戦もあり磨く技
挑まないがなんばらないと決めました
若者の挑む力は無限大
四万キロ挑んで地球好きになる

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子

節分は太巻き食べさせ不気味な夜
月一の茶会わいわい同い年
身だしなみちよと工夫で良い男
差し出したマイクに今日も背を向ける
道なかばちよと斜めに世をみつめ
生き様を見せ後悔のない遺影

岩美川柳会(鳥取)

山下

節子

ミサイルが飛びそう妻の低気圧
にんげんよ驕るなかれと雪が降る
内輪モメお金のことがトツプの座
老い生きる内輪の愛につつまれて
安泰のために内輪も距離を置く
ヘソまがり一人まじると内輪もめ
ミサイルを撃ち損じたはウソでしょう
ミサイルが何ちゃい大和堆にゆく
いい犬だ歩きスマホの人に吠え
内輪の恥丸く包んで笑み見せる
箱口令内部告発救世主

篤子
栄子
紀乃
裕子
柳伸
峰子
直子
弘委智

雪の花枯れ木しつかり咲きました
内輪にも派閥爺対親子孫
内輪もめ母はだまつて米を研ぐ
師の教えたどる道には狂いない
早く高くミサイルごっこ金メダル
ミサイルはミサイルで撃つつもりです
内輪もめあつて絆が強くなり
内輪もめ因は世代の相違から

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦

寒くてもスタイル気にし街歩く
寒い日も川柳がある酒がある
ふところも身体も寒い春よ来い
北満の寒さ大地も凍りつく
地震後は隙間だらけで寒い家
手悴み頭かじかむ句浮かばず
脳天に仕舞つておいた味噌が無い
癖が出る人生十色仕舞い方
見つめてないで今泣き顔を仕舞うとこ
母の手の温もり胸に仕舞つて
本音などしまし所がわからない
人生のいい仕舞い方日々努力
子等達のへその緒ちゃんと仕舞つて
スーパが出来て老舗も店仕舞い
むつりが今朝は自分で声かけた
一ヶ月家計簿黒字稀有なこと
一休さん稀有な才知で驚かす
百歳を超えてやっこ稀有な人
稀有な人将棋ブームに火を点けた

一瑤
完司
一粹
重忠
天翔
清信
一平
蟹郎
敏子
幸安

菅子
茶子
千代
雅女
振作
彰夫
真理子
節子
日出子
完司
康忠
重忠
けいこ
紀美恵
萩江
次男
宣子
龍枝
大鯨
智恵子
美知江
妻露
風露
祐子
雄大
鬼一

希有なボス核ちらつかす西東
法螺貝を吹いてばちばち天国へ

野 蒜
石花菜

生きのびるためにばちばち奥の手を
欲の数ばちばち捨てて仏顔
仕舞つてある平和引出し破る奴

由紀子
醉芙蓉
照彦

川柳塔おつばご吟社(香川)川崎ひかり報

金平糖紙に包んで呉れた祖母

初 恵

三猿を守り幸せ保つて

よしみ

児をあやす添い寝の毛布掛けながら
何を撮る孫の操るドローン飛ぶ
春の夢話しはつきぬ種袋

放 任
ひかり

川柳大阪 山崎 珠生報

七十路です恋に旬などありません

福貴子

新聞を配る足音雪が消す

満知子

梅林の春の足音待ちわびる

堅 坊

旬便り聞くけど高値でお見送り

かよこ

神様はどんな足音なんだろう

芳 香

夢を追う足音迷うことがない

まつお

ごめんなんですまへん怖いへり落ちる

美世子

信号無視の自転車前を通り抜け

(小)雅 美

世の中で一番怖い人と住む

(鈴)いさお

この家に居着いて遊ぶ霊が居る

珠 生

バンジーを何でお金を払うてまで

俊 雄

子が揃い笑顔はじける鍋料理

志津子

どのクラスにも一人はいたな人気取り

(今)万紗子

いつまでもスマホ人気の外にいる

一 歩

半端では義理人情はすまされぬ

司

川柳ふうもん吟社(鳥取)両川 無限報

別嬪に挟まれ銭をむしられた
新年の自分勝手な道歩く
写真撮るときは五センチ背伸びする

振 作

雪あらし行き交う影は仏さま

一 野

まな板の音で期限を探ってる

義 徳

負けいくさ父は太鼓を叩かない

善 平

イエス様不倫しました罪ですか

鐘 軌

ぼろ出した後が正念場と思う

妻 子

そちらでも川柳会をしますか

蟹 郎

赤い実は一羽の鳥が鳥を呼ぶ

天 翔

付度は知らぬ存ぜぬ尻尾切る

敦 子

人生にまさかもあると喝入れる

一 平

老い二人まさかの時を考える

茶 人

座布団がまさかまさかと宙を飛ぶ

大 節

核戦争揃え地下壕掘つておく

回 春

ふうもんにまさかがあった師の逝去

幸 子

まさかとは思ふ男が妥協する

毅 毅

綻びを繋ぎ合わせる愛の糸

一 粹

老化です日々綻びて行く体

真理子

こたつから梅の綻ぶ春を待つ

雅 女

綻びた鎧をまとい出陣だ

房 江

綻びた絆をつなぐ糸がない

雅 女

さすがに巣立ち綻ぶ夫婦仲

房 江

温暖化やがて地球も綻びる

房 江

綻びを繕う嘘の哀しさよ

房 江

あちこちが綻び出した知恵袋

房 江

へそくりがまさかばれたか妻荒れる

房 江

今日からはまさかの気持ちずつと持ち

房 江

七草を摘めば聞こえる春の音

房 江

綻びた心つぐなうのも苦勞

房 江

綻びを繕う口はまだ元氣

房 江

涙腺の綻び埋めてゆく月日
川柳さざやま(兵庫) 北澤 桐民報
じつくりと心に手あて自問する
何だつて手書きがいいね温かい
終点のない欲望と言う電車
老人になればあなたもわかります
電柱の影が枯野へのびている
泣き上戸心つながる気がしたの
何事も親の意見は図星指す
正月に一人はつちだ句を作ろう
八十路坂優雅な日々を趣味に生き
いい笑顔感謝の言葉心から
きやらぼく川柳会(鳥取)後藤 宏之報
児の笑顔財布釣られるお年玉
初雪は末枯れた山を墨絵なす
初詣さい銭借りて願う幸
初詣今年の健康だけ祈る
スーパで男やめめの立ち話
川柳もきわのきわまで考える
みかんの木植えて楽しく味を待つ

美恵子
美津子
不二子
哲 子
清 信
楓 花
無 限
開 子
か ほ
哲 男
稠 民
真 由
さ ゆ
幸 子
善 輔
照 代
美 智
美 草
美 佐
あ や
美 枝
治 代
宏 之
登 美
美 草

初日の出平和の未来信じてる
手から手へ笑いの種がこぼれ出す
新調の服を味方に外に出る
口達者足はのろいと笑い出す
白雪に紅もあざやか寒椿
世が明けりやパーカッションに似た日課
愛犬ロニアイボでもいいいそばにいて
一年の命の保証ドック入り
前髪セットオツケーいざゆかん
一日中とろんと過ごすお正月
寒くても畑へ出ては野菜みる
心虚ろで五七五がつくれぬ
旅仲間揃えば晴れる冬の駅
雪かきに冬の土産の腰痛を

多美子 恵子 令位子 廣子 ゆたか ちえ 美穂 紀の治 瑞枝 雨奇 三千代 日枝子 千代 汪

長柳 会(大阪) 辻村 ヒ口報

一日の愚痴掃き清め仕舞風呂
この人生地球何周走ったか
父さんの出番ゴキブリ退治する
川柳に酔うて今宵も更けていく
胸算用据え膳喰えぬ不調法
一年で速いものだな勘亭流
孫に本読んで寝かせる爺が寝る
夏の恋指輪のあとがまだ疼く
三狼に習い浮世の風を読む
喜寿を越えつい口ずさむわらべ歌
外は雪ホームゴタツの捕虜になる
灯油やさん雪やこんこと寒さ売り

由和明 夏子信

童謡の流れる駅で待合せ
微笑んでちゃんと見ている丸い背な
こごつぱり四角の部屋を丸く掃き
蟹食べりやびたつと塞ぐしゃべり口
平和への期待を塞ぐ核武装
塞いでた出口破れば青い空
親をえらべぬ子等の涙に気が塞ぐ
塞ぎ込む胸にやさしい母の声
穴塞ぎ繕って着た昭和の子
嘘一つ塞げば次の嘘を生み
鬱ぐ子の家族が孤立する悲劇
未熟なり日日迷走の生きる道

英美 旅人 美子 隆彦 隆彦 孝代 孝代 和代 幸子 三和子 正美 淳司 洋二

八尾市民川柳会(大阪) 中園 清報

人間のまた一枚をはぐ夜明け
財務省廃棄の文書統々と
あつさり正論を消す多数決
やつと春三十路の嫁ぐ親の笑み
約束がなんだとうそぶいた小指
母はもう母を忘れて川になる
春色が恋へ誘うメゾピアノ
命のエンジンまだ掛かります老いの春
何を言う国難の主あんなやで
望郷の老母から温い冬野菜
極上のメ沢庵で括る猪口

英 旅人 美子 隆彦 隆彦 孝代 孝代 和代 幸子 三和子 正美 淳司 洋二

八尾市民川柳会(大阪) 梶原 弘光報

ミサイルとツイート空気張り詰める 淳司

一言のごめん澄んでゆく空気
空気よむ予定調和の生きづらさ
機関銃の妻に對抗空気銃
猛寒波鳶襟巻耳袋
わらべ歌百年経てど残りゆく
感情を封じ切れず目語る
幸か不幸か塞ぎ込む暇ない暮らし
靴下の穴をふさいだ母の針
悪口は耳栓しても聞こえます
口塞ぎママの顔見るつまみ食い
日馬富士ぶった証で悔いる日日
「はれのひにぶちこわされてくもりのひ」

久美子 正子 克三 政夫 悦夫 文子 清乃 五月 一彌 和代 弘光

川柳塔わかやま 小谷 小雪報

死ぬ時は手を繋ごうと言っている
大切な母の苦言は肝で聴く
本当に好きだからさようなら
大切にしているものは失せ易い
大切でないものは無い暮らしです
しあわせの鍵握ってる心掛け
手をやいた子に大切にされている
命より大切なものがありますか
悪口も言えるアカンベエもできる
センスよい魅力に小雨酔うている
真つ当に生きよう棘を抜きながら
心地よい小雨が胸の火を包む
気まぐれな雨が降らした天気雨
あの時もやはり小雨の午後でした
わたくしのきのうにまといつく小雨

夕胡 めぐみ 知香 願 紀久子 秀子 徑子 紀子 小雪 弘子 ちづこ 寿子 日出男 克子 あきこ

小雨なら路を変えずに突き進む
力抜き自分をさらす母の海

今の子ら抜きうちテスト怖がらず
手抜きした悔いも明日に活かされる
抜かりない人にもあつた落とし穴
輪を抜けてどこまで続く一人旅

川柳塔さかい(大阪)

内藤

憲彦報

またやつたあきられてる物忘れ
どこでも本命チョコを渡される
貰いもの野菜のしまつうんざりだ
雪の中車が前に進まない
とつさの間に好きな人からキス奪う
とつさに出たジョークで空入れかえる

ああ熊やとつさに僕を盾にする
得すると知つてとつさに態度変え
手招きに急に用事を作り出す
とつさの応答メダルあげたいインタビュ

(載)

清

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

言いい訳をなじりとつさにハグされる
Jアラートなぜか帯を持ち走る
セピア色の秘密を捨てて老い支度
融和ムード秘密の施策ありそうで
陰惨ないじめ知つてる校舎裏
嗅ぎつけた秘密ネットに流れ出る
惚れてるから返して欲しくないお金
秘密事吐かない貝で味気ない
カレンダーちいさなちいさな丸印
秘密持つ夫婦何故だか仲がいい
札束で手を切つたのは秘密です

世紀子
素頓馬
五月
雅美
憲

スパーマン月蝕連れて飲みに来た
遠い日の橋の欄干宿す傷
褒められて眩しく光り出す個性
ほほ笑んでいるようだが謎の阿修羅像
開けたなら必ず閉めて寒いから
改憲で戻れぬ橋を渡るかも
i P S 命を生かすヒント秘め
父無言そとかけ橋母の笑み
眼に見えぬ眩しい宝積んでいる
内の鬼豆は苦手とワンカップ
高値呼び眩しく並ぶ青菜達
鬼の面涙を拭いた跡がある
鉛筆の倒れた方にあるヒント

世紀子
素頓馬
五月
雅美
憲

誰ですか私の靴で帰る人
人生の節目に橋をわたり喜寿
平成から希望の明日の虹の橋
トランプがバンドラの箱開けました
ヒントから推理重ねて解き明かす
名人の背中にヒント揺れている
六歳のひ孫が将棋やるという
クーパールタン天で苦虫噛んでいる
生き延びるヒント雑草からもらう
閉じた心やさしく母の愛
胸襟を開いて飲める旨い酒
人生に開けてない部屋あと幾つ
生きてゆくヒントを笑顔から貰う
事故現場片方の靴雨に泣く
エプロンの白が眩しい新所帯
節分に年の鯖よみ豆かじる
この島に橋はいらんと父と舟
新米の白が眩しい朝ごはん
暦からヒントをもらい春支度
被災地に眩しい汗が流れている
仮想通過なぜ現金で買うのかい

世紀子
素頓馬
五月
雅美
憲

正

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

和夫
八千代
誠一
玄也
健吾
佳子
扶美代
舞夢
好

紙風船持ってくすり屋来た昭和
智に走りすぎては群へ戻れない
値上げ前安いうちにと買ひ走る
春の陽に走って還る雪だるま
百年の完走視野に大食らい
床を背にどっしり座る父が居る
大丈夫口癖の妻居る安堵
西郷どんを真似ては犬と散歩する
思い出のマフラ―今も手放せぬ
マフラ―に顔を埋めてポストまで
ビヨンチャンはヨン様巻きも凍ってる
免許返納未練が残る教習所

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

一番若いばくを鏡に見てもらう
銅鏡を磨けば卑弥呼浮かびそう
父の背をボクは鏡にして生きる
貧相な鬼が映っている鏡
まだ少し恋が残っている鏡
鏡から今日の戦士の顔にする
自惚れの強さ計っている鏡
人間の心を磨き抜く鏡
姿見がスリムな頃を覚えてた
国会に正直の文字見当らぬ
正直は昔話の中に生き
正直に書くの嫌味な日記帳
折り鶴の重さ折りの重みだらう
軽いトップが持つ重い核ボタン
重い土割って土筆の独り立ち

黒 兎 久 子 奈 津 子 美 佐 子 勝 彦 一 弥 則 彦 桂 子 春 代 順 子 柳 童 ちもつ 哲 男 一 歩 真理子 扶美代 ひろ子 恵 欣 之 信 二 直 子 一 志 みつ江 常 男 堅 坊 か こ

病名が分らず足が重くなる
冷や飯を食うた分だけ重みあり
重い冬撥ね除け芽吹く露の盞
気が重い頭二三度振ってみる
一トンを動かす知恵のベアリング
軍人と美女軍団は瘦せてない
このところミサイルよりも怖いへり
無事終われるか平昌の冬まつり
本当のところ大きな箱がよい
こな雪しきり運河の町よ多喜二の忌
小綺麗な老人めざし身をやつす
介護保険の金の行方を捜査中
ス―ツ着て理事選に行く元力士
ご祝儀と目をむきましたマクロの値
ご祝儀を仮想通貨でもらっても
森友の祝儀はコンニャクが似合う
春だからどんと祝儀をはずみましょ
離婚の予感ご祝儀はけちとく
大入袋喜んでいる五円玉
失敗も笑い話にする祝儀

六甲川柳会(兵庫)

奥澤洋次郎報

乱高下ビットコインに泣き笑い
歌カルタ孫と競ってあそばれて
凍ったいた諏訪湖のロマン御神渡り
冬の風呂脚がじんじん唱います
その普通具はなくても遊べたに
バりに遊ばずせめて大阪中之島
もどらない影追っている虎落笛

須磨の浦白帆が二つ長閑な日
デッサンは陰影一つものをいう
八十年のすべてを影は知っている
出直してごらんと叱る影法師
学ぶごとくたくさんあって生き上手
遊びごころ一杯抱いて春を待つ
鏡見て思いと合わぬ顔写る
親父似の影がしつこく付き纏う
終活とあつさり過去をシュレッダー
遊びたい気持はいつもありすぎる
あつさりと負けてもやはり酒にする
マンガから学ぶ歴史が面白い
影踏ませ前に進める師弟愛
つぶやきも涙も隠し遺影笑み
ローソクが消えて相談事終る
影を見て姿勢を直す散歩道
棟梁の影生き生きと日脚伸ぶ
向学に汲めど尽きない高い天
影を見て老いたかなと呼びかける
川柳塔まつえ吟社(高根)相見 柳歩報
日本がぬるくて領土驚られる
ぬるい口秘密ポロポロ歌いだす
ふるりのぬるい空気を吸いに行く
あくまでも死なないためのぬるい風呂
身を焦がすテキーラよりも君の煙
熱心な人は何でも粋である
熱心になると時間は走りだす
運ばねば私の舟が沈みます
光 久 札 子 和 宏 武 彦 弘 華 美 恵 子 芳 江 としお 道 子 邦 子 美 穂 千 賀 子 正 彦 弘 敏 夫 利 子 日 呂 志 憲 三 廣 光 芳 山 ともし 知 恵 子 弘 充 瑞 人 富 紫 美 ひすい 美 智 子

粉雪が風の機嫌で運ばれる
古里の文化を運ぶ国訛り

厳冬に耐えて梅咲き春運ぶ
重くても貰い物なかりがたく

しあわせも運んでくれる年賀状
今年こそ前へ前へと足運ぶ

運ぶこと出来ない心ひとつ持つ
福引きの何故か空しい末吉だ

小銭入れ少し膨れて至福感
一葉も論吉もみんなお友達

幸福をドンキホーテに買いに行く
えべっさん一番のりで福男

人生の福引き良かったことに
豆をまきアメリカ産の福が来る

福ちゃんと呼ばれているが毒がある
気楽です顔には高価な化粧品

絶対に気楽にやれとブレッシャー
気楽にね生きてくほうがずつといい

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

古里じゃ羽釜がデンとくど守る
迷いなど少しも見せず寺を継ぐ

AIが進み未来は楽園か
金貸して厳しく怒鳴りそつと貸す

これという継ぐ物はなく平和なり
作句でもするか雪の日の無職

鍋と蓋びつたり合つて恙なし
甘酒がどぶろくになるひな祭り

模様替えタンスの跡がまだ青い

哲子

あきら

輝山

邦代

涼子

静枝

青帆

草庵

ゆき

寿代

朋子

雪代

堂太

徳利

聡美

柳歩

紗季

修平

柳明

健二

富夫

菊江

公子

初音

新録

その内に禪にロゴアルマーニ
甘いキスこの私の唇に

マンホールの蓋にも古都の味があり
欲深い賽銭箱に蓋がない

ああいやだこんなとこまで父に似る
新米と古米は主婦の水加減

甘い顔したらアカンと言うてある
ガン家系糖尿病も継いだもの

朽ちていく貴男の形見蓋あける
手で蓋しよう充分と酒の席

この寒さ歳のせいではないらしい
体調を教えてくれた三面鏡

白寿の柩へころうさんと蓋をする
豪雪が男の筆を凍えさす

フロノセンシタカとよくぞ聞いてくれ
雪雲が広がります空は冬の顔

歳だかしんどい辛いことはせぬ
継ぎ木した花は清楚でひかえ目で

継ぎ足して愛を絶やさぬ夫婦道
とり急ぎくちづけました別れ際

継ぎ接ぎの知識まわりを煙に巻く
スイーツの甘さはほんのり春を呼ぶ

仮想通貨詰めの甘さに大火傷
太陽に甘みをねだる柿すだれ

平成から継ぐ元号が気に掛かる

紀恵

こみつ

純

歌留多

祐康

雪菜

靖鬼

ひろ介

紀華

りこ

正和

奮水

宏造

哲夫

耕治

かずお

勝弘

一歩

久仁雄

ひとみ

美籠

ヨシエ

敏子

堅坊

博

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

AIが「流石はプロ」の場をうばう
籠もる子の心を開ける老教師

秒守る新幹線はさすがが本音吐き
核心に触れればさすがが本音吐き

神様が隣に居ると気がつかず
側に居るいつものように風のように

あの歓声トラキチなんだお隣も
お隣の採め事だから面白い

薄味になれ食卓はもう無口
お隣に開けぬカーテン案じられ

隣合う人と話が盛り上がり
お隣はどうやら別居中らしい

お隣の洗濯物に見る未来
イケメンの中には生まれ背筋伸び

春風に誘われふらり隣町
ぶつけてこい青い意見は小気味良い

がみがみのお陰で惚ける暇がない
子の礫はいつても受けて立つ

甘辛をぶつけて試す子の猿
核心にぶつかつてくれ野党さん

立ち話小雪の中もまだ続き
年金の杜撰な処理にあきれ果て

リビングの壁塗り替えて春を待つ
妻旅行三日間だけ天下取る

人それぞれ宇宙みつけて咲いている
がんばらず気儘に自立いたします

自分史は妻にもあるとふと気付く
おしゃべりが揃った我が家活気づく

土壇場で付かず離れずして平和

正彦

恭子

みよし

野鶴

紀華

ひとみ

盛夫

光久

宏造

洋次郎

宣子

いさお

千賀子

順彦

健彦

蕉子

千代

美津子

弘委智

和宏

弘子

浩司

武彦

勝弘

いわゑ

哲子

一徳

敦子

カップ賞さすがあの句にあの人が
ぶつかって来る新人を待っている
短かくも長くも思う人生を

邦男
秋果
輝彦

川柳藤井寺(大阪)

太田扶美代報

二人とものおん気で遺書は書いてない
一人旅自分探しの風に問う

一歩
寿之

ほとばしる恋は春へとまっしぐら
花粉症ない友弾み花さそう

恵
よしみ

春になる前に亀の水かえる
呑気な妻消費期限は切れている

瑞美子
喜代子

一点の火種をあおる春の風
満開の春を飲み干す花筵

あかり
欣之

たらの芽の苦みほのかに春甘露
玄関をノックしたのは春の風

光男
いさお

のほんと時の流れに乗っている
プロの腕釘を曲げずに打ち終える

みつこ
六點

春なのにお別れでですか恋人と
まだ聞こえぬ春の訪問告げる声

真
雄太

コネはなく腕一本の立志伝
Jアラート鳴ってるさかい起きなはれ

信二
まつお

独り居で呑気に暮す我が天下
独居して腕上るの台所

絹子
一文

酌み交わす酒のお側に菜の浸し
今もお青春の日日胸被う

フジ子
かずお

聞きましたかわたしも聴いた春の音
扶美代

扶美代

川柳さんだ(兵庫)

上田ひとみ報

さよならがすんなり言えぬ胸騒ぎ

千代美

川柳藤井寺(大阪)

太田扶美代報

さよならがすんなり言えぬ胸騒ぎ

千代美

淋しいねインスタ映えするひとり膳
歓迎会今宵ホテルに泊ります
母の味やはり古里一番や

武彦
つな子
隆太

丁度よい枯れ具合で旅立つて
未だ生きたる夢中のうちに卒寿来る

喜久子
涼子

人生のいろはを知った枯れた文字
春めいて炎えるものあり鳥の声

美籠
ヨシエ

美しい女を目で追う枯れてなお
喋らねば君はセレブで通るのに

健彦
優子

優等生ばかりの集い生あくび
知る人ぞ知る本当はシャイな僕

花門
美智子

雑記帳我慢のページ増えたのは
戦力にならぬが数のひとりです

真由
祐康

胸騒ぎ妻が敬語で僕を呼ぶ
ビヨンちゃんに夢中お鍋が焦けてます

修平
利子

輪の中は落ち着かないと言う個性
朝帰り妻が三つ指ついている

義徳
宣子

四季間わず飛んでる妻がうらやまし
どこ行くのいつ帰るのと聞かれな

耕治
ひろ介

競技ます春には芽吹く冬木立
爺婆は枯れても家の内裏構

好文
厚子

診察日身内を連れて来いと言う
子や孫より金の成る木はもう枯れた

行兵衛
宏造

妻の味旨いかなんて聞くは野暮
結果出て医者が十秒目を閉じた

恭子
徹子

団体割一人足りぬと誘われる
呆けたって優しい花に囲まれる

一子
迪

話合う程に惹かれる人間味

迪

食い意地が僕の味覚を育て上げ
なんでかな皆んな私を好きになる
いい味を出していますねタモリさん
味があるあんな句ボクは作れない
川柳にうつつを抜かしもう傘寿

雅尚
ひとみ
正和
勝弘
哲男

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

天敵が味方が夫婦鍋つくつく
感性は鈍いが神経は太い

厚子
石花菜

今日まではにんげん明日からはゴミ
今日あたりタイオウイカのバーベキュー

芳山
くにこ

しばらくは皆席立でず映画館
一日が一番長い休肝日

幸子
紀の治

果てるまできょう今日きょうをミルフィーユ
大丈夫痛いと言っている限り

楓花
正人

雑草のどれにもちゃんとある名前
故郷の草蹴散らして外来種

美ツ千
照彦

畑に出て私の分担草むしり
草耨る目ざわりという理由から

昭子
大鯰

握手して感じる味方でなかった
今日で終りなんて思ってた暮らせない

雄大
けいこ

好きなこと出来て幸せ感じてる
あちこちが痛い確かに生きている

風露
野蒜

みどり児も早や二十歳なり匂い立つ
くすぐったい場所がだんだん減ってきた

正男
規夫

六感が働いたので手を出さぬ
俺だけが景気回復感しない

久明
清明

天日干し緑にあがる板ワカメ
ストレスを感じる時はケーキ買う

重忠
鈴野

鈴野

鈴野

野良猫を叱って今日はまだ元氣
完司
川柳塔打吹(鳥取) 齊尾くにこ報

筋肉が減って一枚厚着する
電気代見るのも恐いこの寒さ
寒くてもオリンピックは燃えている
寒くてもときめきの脈打っている
北極が日本海まで下りてきた
突然に彼と二人だチャンスきた
振り返ればチャンスはととと落しとる
チャンスだと言うのに軒かいている
流されたついでいかと思うチャンスかも
町中に響く放送人探し
百年間探しても出ぬ埋蔵金
救助犬臭いで探す生存者
探し物日々の暮しの一仕事
人の世は建前本音の探り合い
好きだよと伝える言葉探してる
探せば出る相撲協会裏の陰
春風を探し酒場へ辿り着く
探すのは平和のボタン核じゃない
私を探し続ける遊歩道
箱庭の春を探している小鳥
岩波文庫からはじまった本の旅
山歩き石清水飲み生き返る
目を見張る岩に刻んだ摩崖仏
生ガキを打ちに岩場へ出て行った
山頂の巨岩は氷河の置土産
岩盤を破り生まれた獣医大

瑞子 清 泰山 美知江 芳光 紀美恵 美子 石花菜 美千千 久芽代 公恵 貴恵 岳人 美美人 龍枝 完司 照彦 三津子 宣子 くにこ 悦子 重忠 妻子 玲坊 紀の治

岩の中金もメノウも産まれてる
前歯欠けそれでも挑む栗おこし
軽々と岩を動かす札の束
自然石墓石に据え居士信女

岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

だんじりが枕言葉の岸和田市
草枕彬見ていた能登の海
主題より枕が受けたこの落語
枕元水とノートとペンがある
神さまも枕持参で旅をする
枕ふたつ重ね芥川賞読む
遣り遂げた夢の枕は高くする
枕当てうれし涙で濡れた夜
長すぎるお布施はずんだ枕経
タンス預金枕の下に寝かせてる
味よりもインスタ映えに凝っている
ボランティアの手の温もりを忘れない
試着ではたしかに映えて見えたのに
農に生き夕陽に映えて鍬を打つ
この笑顔大黒柱あればこそ
沢山の秘密眠っている墓場
喜怒哀楽喜楽な秘密だけを聞く
あこがれの人のひみつは暴かずに
絵本離れ少女そろそろ羽化の時
そろそろの亀を兎が引き立てる
人生の四季もそろそろ冬仕度
残り火がそろそろ尽きて般若経
時報より正確ですよ腹の虫

義人 野蒜 節子 大鯰 義泰 丹吉 笑司 あかね しげ子 信子 ふさゑ 康信 信二 香代 良一 律雄 カズ子 白水 喜代志 一子 みつ江 玲子 英夫 珠子 大輔 洋二

肩巾に合わせそばからきしませる
介護するまかせておけという夫
何気ないサボット気付かない迂闊
叱られてばあちゃんいつも助け船
反抗期妻のサボット気付けぬ吾
富士山の勇姿サボットする裾野
ひたむきな額の汗はきらめいて
かすみ草添えて花束映えて
加計その他そろそろ泥を吐きなさい

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

九条が揺れる平和の灯が揺れる
文豪を世に出したのは名無し猫
猫だって名譽職長任に付く
保証人猫なで声で頼まれる
才能のない分汗でカバーする
少しずつ若さも才も後ずさり
才能は母のお腹に置いてきた
才能と努力あつての世界一
ケチじゃない儉約の才あるのです
ライバルの背中の見える位置で追う
他人の背を追うのはやめてマイウェイ
追うの止め待てば女が寄ってくる
深追いをしました夢が消えました
銃規則出来ぬアメリカ病んでいる
焼き芋に牛乳あなたにはわたし
貝高値好きな酒蒸しに会えず
菜の花忌そりそりと雪の朝
あの時もこの時も友だちがいた
ぶら下げる価値勲章とボシエットと

世紀子 三一成 昭美 隆昭 喜八郎 ひろ子 浩子 希久子 満作 善之 紀子 楓子 富子 眞澄 舞夢 和夫 捷也 大子 げんい 理恵 桃花 すみ子 蕉子 恭昌 義華子

五十点優しい言葉添えてある
うきうきと春を先取りネイルケア
独り居のくらし知りたく話題の書
スカートにやさしくじやれる春の風
晩学に夢追うころ衰えぬ

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

いちにちを静かに畳むひとり膳
豪雪の車列へ熱いにぎり飯
オルガンが今日も猫踏む幼稚園
いきなりメシと言われたいなあ三回忌
初対面女同士は値踏みする
急ぐときいつもやるのは忘れ物
わが保険亡母が内証にかけて逝き
よき時代鍋釜だけで世帯持ち
あと一歩踏み出すことで見えてくる
打算ある男の魅力知りつくす
いきなりのハグに乳房が首を振る
玉の輿打算がドレス身にまとう
明日へと踏み出す吾子に春の雪
A I が踏み台にする人の知恵
急ぐほど謀反を起すボクの脳
酒呑んだついでに好きと言ってみる
心に木一つ植えると余裕でき
寒くとも子らは風の子光の子
信じてた人が突然背を向ける
大事な娘をいきなり嫁に馬の骨
踏み出した一歩で決意固くなり
もてなしの裏でそろばん弾く音
ポツクリ死のつもりがひょいと救急車

日の出 ふりこ 敬子 千枝子 弘子
ヨシエ 求芽 公子 英旺 健三 武彦 健二 多美子 真理子 シズエ 歌留多 美佐子 野鶴 堅美 雅美 玲子 黒兎 久子 宏子 見清 正彦 則彦

たましいよ急げあの人呼んでいる
出し抜けのおだてに乗って跳びこえる
飛切りの笑顔に打算見当たらぬ
いきなりの出会い今では無二の友
いま風が変るジョーカー引いたから
踏み込まないでここは私のテリトリー

ふつもん吟社(鳥取)(前月分) 西川 無限報

毎日のお経が私サブリです
サブリより食を正せと胃が騒ぐ
趣味みたいサブリ揃えて飲む女
老いてまたサブリに心ゆさられる
よく回る舌だサブリが効いている
年金カットサブリも一つ減らそうか
何があっても論吉を追ってまっしぐら
まっしぐら最終章は君の胸
天命を聞いて故郷に逢いに行く
不器用だが信じた道だまっしぐら
まっしぐら浮いた話も無く終わる
青いままリンゴの恋はまっしぐら
極楽と決まれば行くぞまっしぐら
上から目線バカにするなよめるなよ
年金暮らし目線下げれば極楽だ
はいはいの目線は好奇心だらけ
採めぬよう私の目線低くする
ふる里へ罪ほろばしの草笔る
税務署が安易に筆る酒煙草
片仮名を筆るとパンが焦がっていた
幸せを筆った拉致を許すまじ
非正規をすつといじめて黒字です

奏子 葉子 千鶴子 美智代 きらり 玲子
茂登子 孝二 由美子 一平 延子 房江 雅女 りんこ 善平 真理子 鐘軌 清信 凱柳 回春子 白兎 楓花 はじめ 心咲 茶子 隆浩

還暦も古稀も片思いで過ぎた
夢の位置ずつと変えずに貴方待つ
森から海へずつと続いている手紙
弁慶の脛に余罪の疼き持つ
櫛の歯が欠けるが如く出る余罪
着地とはあの世だろうか父母が待つ
冬の海北斎の波見るようだ
天命を待つが阿弥陀に招かれる
断捨離で残すきれいな過去ばかり
生も死も不意でかすかに風の音
ごめんねの距離を計っている目線

川柳藤井寺(大阪)(前月分) 太田扶美代報

冷たい手うどんなの鉢で温める
江戸落語うどんながそばに変わって
伊勢参りシメにいたたく伊勢うどん
食欲はないが饅飩なら食べる
饅飩打つ頑固な腕と強い腰
ねこ舌の妻丁寧な饅飩吹く
素饅飩で無口な夢見た少年期
うどんな好きさいわいい人だと思
頑張れば僕も変われるかも知れぬ
大阪のうどんと妻が好きな婿
うどんな好きその一言で妻と決め
すき焼きの後のうどんが好きやねん
大阪のきつねうどんは世界一
あつあつのうどんの湯気に母偲ぶ
シャッター街うどんな提灯ひとつ消え
そばで越し明けてうどんなで幸祈る
空腹に屋台うどんなは旨かった

盛桜 八千代 一瑠 金祥 一粹 幸子 節子 蟹郎 義徳 美智子 無限 フジ子 真久仁雄 いさお よしみ 瑠美子 紅紫朗 扶美代 雄太 真澄 一歩 美代子 一文 育代 信二 キーキー 喜代子

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	15日(日) 13時締切 席題・いやいや・身内・年金 自由吟	寝屋川市 産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
八尾市民 川柳会	15日(日) 14時締切 花見・どっさり・甘い・雑詠	八尾市洪川町・安中町集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳 藤井寺	15日(日) 14時締切 坂・びっくり・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
南大阪 川柳会	16日(月) 18時30分締切 受ける・がっかり・芝居・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
豊中 もくせい 川柳会	16日(月) 13時50分締切 カーテン・搔く・ふわり 自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳 さんだ	17日(火) 13時30分締切 処理・流れる・ページ・大笑い 自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳 たちばな	18日(水) 13時45分締切 席題・ロボット・渋い・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) TEL 06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 TEL 06-6494-5187
川柳塔 みちのく	21日(土) 17時締切 馬・シンプル・一服	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL 0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL 0172-36-8605
はびきの 市民会 川柳会	22日(日) 14時締切 恵・流転・スランプ	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷺」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
岸和田 川柳会	22日(日) 吟行句会 行先：いよやかの里 笑顔・ほのぼの・囁目吟	集合場所：南海岸和田駅前 9時30分 または JR岸和田駅前9時45分 問合せ：雪本珠子 TEL 072-423-3116
川柳 ふうもん 吟社	22日(日) 13時30分開場 自由吟・小銭・フワフワ 死後	開発ビル 2F 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金洋
川柳塔 すみよし	28日(土) 14時15分締切 雑音・くらくら・曲げる	住吉区民ホール 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
和歌山 三幸会 川柳会	28日(土) 13時15分締切 鳥・香る・じっくり	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
京都 塔の会	30日(月) 14時締切 ピンチ・姿・ずらり・席題	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子 TEL 075-591-0424

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

4 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	4 日(水) 14時締切 命・いきいき・輝く	奈良市立中部公民館 4F 近鉄「奈良」駅④番出口 徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
城 北 川 柳 会	7 日(土) 14時締切 迷う・バック・皮肉・自由吟	老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川 柳 とんだばやし 富 柳 会	7 日(土) 14時締切 逆・急ぐ・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL・RM0721-25-0603
倉 吉 川 柳 会	7 日(土) 14時締切 岬・暗い・こっくり 席題一題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ 吟 え 社	7 日(土) 13時30分締切 味方・やさしい・読む・安心	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保岡町笠浦222-1 相見柳歩
川 柳 塔 わかやま 吟 社	8 日(日) 14時10分締切 兼 題=その後・残る・運命 課題吟=名	和歌山県JAビル11階 和歌山市美園町5-1-1 TEL 073-488-5641 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 柴原道夫
西宮北口 川 柳 会	9 日(月) 14時締切 ハンケチ・庇う・やれやれ 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほ たる 川 柳 同 好 会	10日(火) 13時30分締切 水・振る・更に	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール蛸池 蛸池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川 柳 塔 さ か い	10日(火) 14時締切 マナー・預ける・折り句：イワキ	東洋ビルディング 4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月
川 柳 あまがさき	10日(火) 14時締切 刺す・顔・まさか・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 TEL 06-6494-5187
あかつき 川 柳 会	13日(金) 14時締切 漸く・西・目的・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	14日(土) 14時締切 あなた・約束・出逢い	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六 甲 川 柳 会	14日(土) 14時締切 酔う・味・頑張る・自由吟	六甲道勤労市民センター 5F E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川 柳 塔 打 吹	14日(土) 13時30分締切 恐竜・植える・ワクワク 席題一題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局

柳界展望

★「出雲総合芸術文化祭
川柳大会」は、11月19日パ
ルメイとホールで開催。
同人成績。

出雲市教育長賞

両川 無限

日めくりの一枚ずつに
ある夜明け

★平成29年度「川柳塔み
ちのく大賞」

大賞 浅田 隆樹

雪深いりんこの枝は怒
り肩

準優秀作品第一席

伊藤のぶよし

菊弱の芯まで探す寂し
がり

準優秀作品第二席

高瀬 霜石

なるほどと思う転んで
踊いて

★「第67回西大寺会陽川

柳大会」は、2月25日西
大寺ふれあいセンター開
催。同人成績。

天位 小島 蘭幸

ドアを叩いているのは
きつと春だろう

天位 小島 蘭幸

私のいないところでは
めていたらしい

天位 新家 完司

黒髪は風が攫っていつ
たまたま

天位 高岡 茂子

犬も虫も共に隠れた秘
密基地

▽動向△

○鳥取県川柳作家協会会
長に牧野芳光さんが、四
月から就任。

○ふうもん吟社前会長両
川洋々氏が3月6日、正
六位旭双光章を叙勲され
た。

▽計報△

○3月3日、塩満敏氏
(参与・羽曳野市)が逝去。

享年86。常任理事・参与
をはじめ多数の同人・柳
人が参列した。

▽訂正とお詫び△

○3月号、P101上段24行
目、継続→続続。

○3月号P41上段20行目
雲の下→雪の下。

▽新誌友紹介△

三田市 大西 重男

西予市 北野 哲男

紹介者 井関はるか

堺市 中居 善信

紹介者 古川 光雄

紹介者 澤井 敏治

奈良県 内藤 憲彦

常任理事会3月7日
①第6回春の誌上大会の
中間報告について②第24
回川柳塔まつりの業務進
捗状況について③連絡網
について④定例確認事項
等。

次回常任理事会4月5日
(火)AM10時

新同人紹介

中山 春代
なかもやまはる
—推薦 完司・黒兎推薦

市川 雄太
いちかわゆうた
—みつこ・いさお・まつお推薦

進化するホームページ!

川柳塔ホームページは、本社句会の日程・
課題・選者のご案内、本社句会前月秀句な
どさまざまな情報を掲載しております。

また、一方通行ではなく参加型を目指し
て下記の企画を実施しております。皆さま
お気軽にお楽しみください。

- WEB句会
- ミニ句集
- 若手エッセイ
- 掲示板

ご意見やご感想などをお待ちしています。

アドレス: <http://senryutou.net/html/index02.html> サイト管理・森山文切

川柳塔みちのく 創立30周年記念句会

日 時 7月1日(日) 受付9時
席題発表 午前 10時
会 場 弘前プラザホテル 弘前市代官町101-1
電話 0172-35-0345
会 費 4000円(昼食・懇親会・発表誌含む)
お 話 「川柳初心の頃」 小島 蘭幸
(日川協理事長)

★宿題 (各題2句・共選) 投句締切11時20分
「道」 櫛引八千代選・岩崎 雪洲 選
「奥」 大黒谷サチエ選・む さ し選
「青」 工藤 青夏選・千島 鉄男 選

★席題 (各2句・共選)
「 」 高瀬 霜石・佐藤ふんじ 共選
「 」 野沢 省悟・豊巻つくし 共選

★特別選 (1句) 投句締切 5月1日(火)
「森」 小島 蘭幸 選
特別選はハガキに作品1句と住所・氏名・電話番号記入の上下記事務所宛お送りください。当日消印有効。

問合せ・投句先
〒036-8275 弘前市城西1-3-10
川柳塔みちのく事務局 稲見 則彦 宛
電話 0172-36-8605
主 催 川柳塔みちのく

第29回 時の川柳交歓川柳会

日 時 5月13日(日) 開場10時30分
会 場 兵庫県中央労働センター
2階大ホール TEL078-341-2271
神戸市中央区下山手通6-3-28
会 費 2000円(記念品・発表誌呈)
※昼食は各自でお済ませくだ
さい(地下に食堂あり)

講 演 「日本語の魅力を語る」

江畑 哲男 氏

兼 題 各題2句 欠席投句拝辞

「立 場」 大堀 正明 選

「海」 筒井 祥文 選

「やがて」 宮村 典子 選

「遊び心」 川上 大輪 選

「返す」 河原 千壽 選

「時」 赤井 花城 選

「雑 詠」 矢沢 和女 謝選

特別課題 1句「息」 前川 淳 選

投句締切 12時

主 催 時の川柳社

奈良番傘川柳会

創立70周年記念川柳大会

と き 5月27日(日) 11時30分開場
(昼食は済ませてご出席ください)

ところ ならまちセンター
奈良市東寺林町38 TEL0742-27-1151

近鉄奈良駅より約10分

JR奈良駅より約15分

事前投句 「飾る」 大楠 紀子 謝選
(葉書に1句・5月1日(火)欠席投句拝辞)

宿 題 「バランス」 阪本きりり 選

「秘 密」 笹倉 良一 選

「触れる」 西出 楓楽 選

「ささやく」 久保田半蔵門選

「素 顔」 森中恵美子 選

出 句 各題2句・締切 12時30分
(欠席投句拝辞)

会 費 2,000円(お土産・発表誌呈)

懇親会 4,000円(申込み制・事前投句と同じ)

投句・問合せ先 〒630-8014

奈良市四条大路1-4-52-401

山田 順啓 TEL/FAX0742-34-4157

主 催 奈良番傘川柳会

井笠川柳会 第19回笠岡大会

と き 5月26日(土) 開場9時30分
開 会 午後1時 締切 午前11時30分

ところ 笠岡市保健センター(ギャラクシーホール)
笠岡市十一番町1-3 TEL0865-62-5701
笠岡駅から④バスで伏越下車徒歩4分

課題と選者

◎第一部 事前投句「うるさい」(2句)

野島 全・河原 千寿・岩崎 弘舟

3選者による共選

天位の中から1名に市長賞として句碑を贈呈

所定の用紙または便箋に2句併記

のうえ、住所・氏名・電話・所属柳

社明記投句料1000円と共に4月28日

必着で送付のこと

投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡2289

井笠川柳会 宛

◎第二部 当日投句 (各題2句)

「残念」 赤井 花城 選

「皮肉」 小島 蘭幸 選

「相撲」 新家 完司 選

「素人」 矢沢 和女 選

当日席題 (1句) 藤井 智史 選

当日参加料 2000円(弁当・大会誌)
欠席投句拝辞

主 催 井笠川柳会

編集後記

★白胡麻と黒胡麻しかと差別あり 薫風

★人を分類するのによく言われるのは猫派犬派だが最近パンダ派もありだなと思う。昨年上野動物園に香香(シャンシャン)が生まれてパンダブームが再来。パンダと言えば上野と思われるだろうが、和歌山県白浜アドベンチャーワールドには5頭居る。上野よりも多い。神戸の王子動物園にも1頭。どちらも行列せずにパンダに逢える。上野だけがなぜもてる？

セイが満載。出久根氏は年賀状に干支の動物の代わりにパンダを描くそう。氏曰く、「お供え餅のように、二つの楕円形を重ねて描き、黒の垂れ目をつければ、簡単にパンダができあがる」らしい。★前田尋画伯の個展を拝見する機会を得た。会場には本誌表紙でお馴染みの鮮やかな切り絵が展示されていた。画伯の故郷丹波市の四季の数々の切り絵には、懐かしい日本の原風景が再現され、観る者に何かを語りかけてくる。心和む静謐なひとときを頂いた。

★本誌印象絵でお馴染みの大西泰世さんが「川柳魚座」を立ち上げられた。当分は3カ月に1回句会を開く予定とか。「魚座」は彼女の星座からの命名。因みに印象絵の「インスピレーション・ナビ」も泰世さんの命名である。

★大阪の知人に水子軒の八角弁当を頂いた。玉子焼き・肉・魚・海老・空豆・筍・椎茸その他、彩りよくおかずが盛られている。薫風先生は八角弁当がお好きだった。亡くなられる1カ月前お弁当をお土産にお尋ねした。食の細かった先生を思う。4月24日薫風忌。

□再来年の「川柳塔95周年記念事業」として「川柳雑誌・川柳塔」の電子化の取り組みが始まりました。統括責任は新家完友・佐渡市。両氏の御寄贈で、No.243から終刊号No.460までは揃っていました。再刊号のNo.240とNo.241は残念ながら発見することができませんでした。

□お願いです「川柳雑誌」の再刊号のNo.240とNo.241をお持ちの方がおられましたら、川柳塔事務所までご連絡をお待ちしています。(勝弘)

ひとこと

踊りと舞いについて

以前この欄で出雲の阿国の話が出ていたので、更に私見を述べさせて頂きます。釈迦に説法の諷りを受けるとは思いますが、よろしくお願いします。

違うものです。私の住む出雲地方、また石見地方にはそれぞれ御神楽が伝承されていますが、神楽は「舞う」ものです。盆は盆踊りと、これも地域により色々な踊りがあります。

踊りは、歌舞伎から出ていますが、舞いは「能」から出たものです。従って童謡に「鯛や鯛の舞い踊り」の表現があります。踊りと舞いは次元の

全国的に有名なのは越中富山の風の盆を迎える「越中おわら節」。私の最も好きな民謡です。(松本 昌)

紙 用 句 投 抄 様 檸

「 屈 退 」 (4 月 15 日 締 切)

表 発 号 月 6

選 久 光 口 山 — 選 共 — 選 小 くに 尾 齊

B A

--	--

B A

--	--

地名

市 都
道 府
姓 雅 号

地名

市 都
道 府
姓 雅 号

.....
下 さい
.....

◎ 楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

.....
きりとりせん
.....

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
水煙抄 (8句) 川上大輪選
愛染帖 (2句) 新家完司選
檸檬抄「退屈」 (2句) 山口光久共選
イノスレーションナビ (2句) 齊尾くにこ選
一路集 (2句) 「タイム」 鴨谷瑠美子選
「不」 後藤宏之選
「足」 居谷真理子選
初歩教室 「感謝」 (3句) 居谷真理子選

七月号
檸檬抄「柔かい」
一路集「ちぐはぐ」「通知」
初歩教室「蟻」

本社4月句会

とき 4月5日(木) 13時開場・13時40分締切
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06-6772-1441

おはなし「小島六厘坊のこと」
席題「」
兼題「遅れる」
「すべて」
「こだわり」
「丸い」
「透明」

川端一歩氏
藤井宏造選
矢倉五月選
出口セツ子選
堀口正和選
森松まつお選
小島蘭幸選

会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社5月句会

7日(月) 午後1時から

兼題「同じ」「熱い」「マスク」
「家」「邪魔」

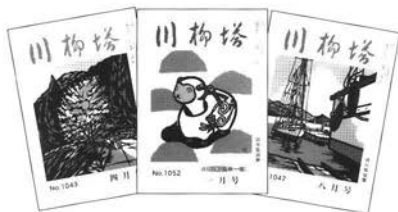
川柳塔WEB句会のご案内

課題「桜」 青砥たかこ 共選
石橋 芳山
締切 4月20日 発表 4月25日頃
投句料 無料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

〒543-0052
大阪府天王寺区大道一丁目一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話(06)六七九三三九〇番
振替〇〇九八〇一四二二九八四七九番

定価 八百円(送料83円)
半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)
二〇一八年(平成三十年)四月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL (06) 6372-1178
FAX (06) 6372-1196
E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

第11回 オニザキ「ごま川柳」入選句発表

川柳塔社 主幹

小島蘭幸 選

ご応募ありがとうございました。入選の皆様には賞品をお送りいたします。

ごま和えだ亡母の笑顔が懐かしい
 ごまの香が染みた搦り粉木嫁が継ぐ
 ごま塩のおむすび蘇る昭和
 菜の花の母の胡麻和え食べる春
 ごま尽くし素肌美人をめざします
 義母に習った芹のごま和え早春賦
 主役にも負けないゴマの底力
 にぎり飯ごまは多いほど宜し
 新婚の孫が受け継ぐゴマレシビ
 ごまふってごらんおいしくなりますよ
 半世紀素顔が光る胡麻パワー
 ごまの力借りて維持する記憶力
 こころ一番に強い味方のごまパワー
 ごま食べて百歳までは遠くない
 仏飯にごま一振りが癖になり
 ちよつとしたお返しに買う胡麻セット
 気がつけばゴマの虜になっていた
 ごま和えも夫婦の味で目分量
 食べても食べても尽きないごまのネタ
 母さんの着物にごまの香が残る

【準特選】

【特選】

黒ごまでパンダを描くお弁当
 ごまが好き吉永小百合ぐらい好き
 ばあちゃんの魔法はごまにあつたんだ

福岡 芳枝
 川崎ひかり
 佐々木満作
 山野 寿之
 山岡富美子
 松尾美智代
 中井 萌
 太田扶美代
 田中 敬子
 谷口 義
 大島ともこ
 小林 わこ
 鴨田 昭紀
 今井万紗子
 松本 文子
 木本 朱夏
 森松まつお
 山根 妙子
 井丸 昌紀
 田中 章子
 柳原 敏子
 谷口 東風
 石橋 直子

杵つき製法の「すりごま」
 オニザキの

ごま

長い間親しまれてきた
 オニザキの「すりごま」は、
 名称を変更し、パッケージ
 を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
 元々すり鉢ですったゴマで
 はなく、杵と臼を使った杵
 つき製法で出来た「すりこ
 ま」です。

今までと変わらぬ、風
 味豊かな味わいをご堪能く
 ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
 〒862-0951 熊本中央区水上前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050